

福岡市埋蔵文化財調査報告書第536集

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 2 —

福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査

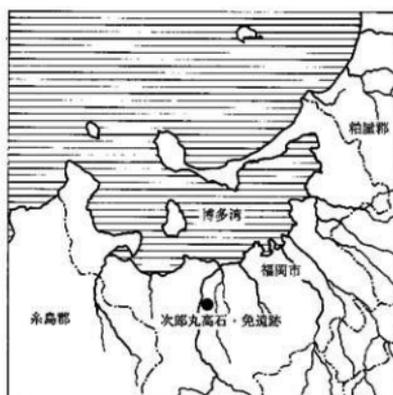
1997

福岡市教育委員会

福岡外環状道路関係 埋蔵文化財調査報告

— 2 —

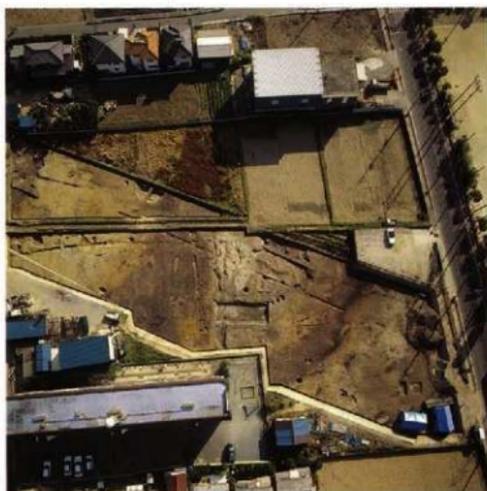
福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査



遺跡名	遺跡番号	調査番号
次郎丸高石遺跡	JRT-3	9238
免遺跡	MEN-2	9261

1997

福岡市教育委員会



1) 次郎丸高石遺跡第3次調査I区全景



2) 出土墨書石



1) 免遺跡第2次調査遠景



2) 免遺跡第2次調査全景

序

福岡外環状道路は、福岡市西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原までの都市計画道路で、延長26.4kmをいいます。本道路は福岡市西南部交通対策の鍵を握る幹線道路で、早急な供用が望まれており、現在、姪浜と野芥間、月隈と志免町間など一部の供用が開始されております。

今回報告する次郎丸高石遺跡・免遺跡は、福岡外環状道路の福重と野芥間に所在し、道路建設工事に先だって発掘調査を実施いたしました。

次郎丸高石遺跡の調査では、奈良時代の川や戦国時代の建物や井戸からなる集落が発見され、免遺跡の調査では、縄文時代前期の遺物包含層や弥生時代から古墳時代にかけての井堰や護岸施設など大規模な水利施設が発見され、多大な成果を得ることができました。

最後になりましたが、発掘調査に際し、建設省福岡国道工事事務所の関係者および地元の方々をはじめ発掘調査から整理・報告まで多くの皆様のご理解とご協力を得ました。ここに感謝の意を表するとともに、本書が文化財理解の一助となり、広く活用されることを願っております。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例 言

1. 本書は、福岡外環状道路の建設省施行区間にあたる九重・野芥間の道路建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1992年9月から1993年9月にかけて発掘調査を実施した次郎丸高石遺跡第3次調査・免遺跡第2次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、池田祐司・中村啓太郎・山口譲治・榎本義嗣・原山洋・白井克也・加藤隆也・河崇・後藤和武・柳澤竜広・小川勝彦・清川朋和・太田寿和・高山義克・水井大志・柴藤祐志・宮本周作・山口朱美が作成した。
3. 本書使用の遺物実測図は、縄文土器を池田祐司が、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器を平川敬治が、木製品を犬丸陽子が、石器を山口譲治が作成した。
4. 本書使用の写真は、遺構を山口譲治・中村啓太郎・池田祐司・加藤隆也が、遺物を平川敬治が撮影した。
5. 本書使用の図面の整図は、池田祐司・山口朱美が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書の執筆は、池田祐司・山口譲治で行ない、編集は、池田祐司・中村啓太郎の協力を受け山口譲治が行なった。
8. 本書収録の出土遺物および調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本文目次

第1章 序説

1. はじめに…………… 1
2. 1993・1994年度の調査体制…………… 4

第2章 遺跡の位置と環境

1. 本書報告遺跡の位置…………… 5
2. 本書報告遺跡の層位…………… 5

第3章 発掘調査の記録—次郎丸高石遺跡第3次調査—

1. I・II区の調査概要…………… 7
2. 古代の遺構と出土遺物
 - 1) 第6号溝と出土遺物…………… 10
 - 2) 第8号溝と出土遺物…………… 19
 - 3) 第16号土壇と出土遺物…………… 23
3. 中世の遺構と出土遺物
 - 1) 掘立柱建物と出土遺物…………… 25
 - 2) その他の遺構と出土遺物…………… 48
4. I・II区出土その他の土器…………… 63
5. III～VII区の調査概要…………… 64
6. 検出遺構と出土遺物
 - 1) 第3号溝と出土遺物…………… 66
 - 2) その他の遺構と出土遺物…………… 73
7. IV～VII区出土のその他の遺物…………… 74
8. 本調査出土縄文時代遺物…………… 75
9. まとめ…………… 78

第4章 発掘調査の記録—免遺跡第2次調査—

1. 調査の概要…………… 79
2. 縄文時代包含層と出土遺物…………… 84
 - 1) 包含層出土土器…………… 86
 - 2) その他の出土土器…………… 88

3) 出土石器	88
3. 第1号溝と出土遺物	
1) 第1号溝および第1井堰	93
2) 第2溝	104
3) 第3井堰	108
4) 第4井堰	110
5) 第5井堰	112
6) 出土石器	113
7) 出土木器	113
4. 第3号溝と出土遺物	
1) 第3号溝	134
2) 出土遺物	138
5. その他の遺構と出土遺物	
1) 第2・4号溝	141
2) 第6号溝と出土遺物	141
3) その他の出土遺物	143
6. II区の調査	145
7. まとめ	145
第5章 おわりに	146

挿 図 目 次

Fig. 1 福岡外環状道路路線図	1
Fig. 2 福岡外環状道路IV工区内調査遺跡位置図	2
Fig. 3 次郎丸高石遺跡・免遺跡群の位置と周辺の遺跡	6
Fig. 4 次郎丸高石遺跡土層堆積状態実測図	付図
Fig. 5 次郎丸高石遺跡第3次調査地形実測図	8
Fig. 6 次郎丸高石遺跡第3次調査I・II区遺構配置および地形実測図	付図
Fig. 7 次郎丸高石遺跡第3次調査古代遺構実測図および土層断面実測図	付図
Fig. 8 第6号溝出土黒書土器実測図	11
Fig. 9 第6号溝出土須恵器実測図(1)	13
Fig. 10 第6号溝出土土師器実測図(1)	16
Fig. 11 第6号溝出土須恵器実測図(2)	17
Fig. 12 第6号溝出土土師器実測図(2)	18
Fig. 13 第6号溝坡上層出土遺物実測図	19
Fig. 14 第8号溝出土遺物実測図	21

Fig. 15	第16号土壌出土遺物実測図	23
Fig. 16	第21号掘立柱建物(SH-21)実測図	26
Fig. 17	第21号掘立柱建物柱穴(SP-2101~2108)土層断面実測図	28
Fig. 18	第21号掘立柱建物柱穴(SP-2109~2114)土層断面実測図	29
Fig. 19	第21~23号掘立柱建物出土遺物実測図	30
Fig. 20	第22・23号掘立柱建物(SB-22・23)実測図	32
Fig. 21	第24・26号掘立柱建物(SB-24・26)実測図	33
Fig. 22	第25号掘立柱建物(SB-25)実測図	34
Fig. 23	第27・28号掘立柱建物(SB-27・28)実測図	36
Fig. 24	第29・30号掘立柱建物(SB-29・30)実測図	38
Fig. 25	第27・32・33・35号掘立柱建物出土遺物実測図	40
Fig. 26	第31・32号掘立柱建物(SB-31・32)実測図	41
Fig. 27	第33・34号掘立柱建物(SB-33・34)実測図	42
Fig. 28	第35号掘立柱建物(SB-35)実測図	43
Fig. 29	各柱穴出土遺物実測図	45
Fig. 30	第1号井戸(SE-01)実測図	48
Fig. 31	各遺構出土遺物実測図(1)	49
Fig. 32	第4・8~11号土壌(SK-04・08~11)実測図	50
Fig. 33	第7号土壌(SK-07)実測図	51
Fig. 34	第7号土壌出土遺物実測図	52
Fig. 35	第12~14・17~19号土壌(SK-12~14・17~19)実測図	53
Fig. 36	各遺構出土遺物実測図(2)	55
Fig. 37	第1~5・7号溝出土遺物実測図	56
Fig. 38	I区出土中世遺物実測図(1)	59
Fig. 39	I区出土中世遺物実測図(2)	61
Fig. 40	I・II区出土弥生土器実測図	62
Fig. 41	I区出土土師器・須恵器実測図	63
Fig. 42	次郎丸高石遺跡第3次調査IV区遺構配置実測図	付図
Fig. 43	次郎丸高石遺跡第3次調査V~VII区遺構配置実測図	付図
Fig. 44	第3号溝出土遺物実測図(1)	68
Fig. 45	第3号溝出土遺物実測図(2)	69
Fig. 46	第3号溝出土遺物実測図(3)	71
Fig. 47	VI区第4号土壌出土遺物実測図	73
Fig. 48	第7・8号土壌(SK-07・08)実測図	73
Fig. 49	第7・8号土壌出土土器実測図	73
Fig. 50	VI区出土白磁実測図	74
Fig. 51	V・VI区出土古墳時代遺物実測図	74
Fig. 52	IV~VII区出土弥生土器実測図	75
Fig. 53	出土土器実測図	76
Fig. 54	出土縄文土器拓影	77
Fig. 55	免遺跡第2次調査地形実測図	79
Fig. 56	免遺跡第2次調査I区遺構配置実測図	付図
Fig. 57	調査区南壁土層断面実測図	81
Fig. 58	調査区北壁土層断面実測図	82
Fig. 59	中央ベルト南壁土層断面実測図	83
Fig. 60	縄文時代包含層調査区	84
Fig. 61	包含層遺物出土状況	85
Fig. 62	包含層土層断面実測図	86

Fig. 63	包含層出土土器実測図	87
Fig. 64	採集土器実測図	88
Fig. 65	第1層(アカホヤ上位層)出土土器実測図	88
Fig. 66	第4層(アカホヤ下位層)出土土器実測図	90
Fig. 67	出土ナイフ形石器実測図	90
Fig. 68	出土土器実測図	91
Fig. 69	免遺跡第2次調査第1号溝第1井堰実測図	付図
Fig. 70	第1井堰平面実測図	94
Fig. 71	第1井堰土層断面実測図	94
Fig. 72	第1井堰土層断面見通し実測図	96
Fig. 73	第1号溝および第1井堰出土弥生土器実測図(1)	99
Fig. 74	第1号溝および第1井堰出土弥生土器実測図(2)	101
Fig. 75	第1号溝第1・5井堰および第2溝出土土師器実測図	102
Fig. 76	第2橋実測図	104~105
Fig. 77	第2橋断面見通し実測図	106
Fig. 78	第1号溝第2橋出土土器実測図	107
Fig. 79	第3井堰断面見通し実測図	108
Fig. 80	第3井堰実測図	109
Fig. 81	第4井堰断面見通し実測図	110
Fig. 82	第4井堰実測図	111
Fig. 83	免遺跡第2次調査第1号溝第5井堰実測図	付図
Fig. 84	第5井堰断面見通し実測図	112
Fig. 85	第1・6号溝出土石製穂摘具実測図	113
Fig. 86	出土鉄類実測図(1)	114
Fig. 87	出土鉄類実測図(2)	116
Fig. 88	出土鉄類実測図(3)	118
Fig. 89	出土銅類実測図	120
Fig. 90	出土木製農具実測図	122
Fig. 91	出土竪杵実測図	124
Fig. 92	出土杵・槌実測図	126
Fig. 93	出土木器実測図(1)	128
Fig. 94	出土木器実測図(2)	129
Fig. 95	出土建築材実測図(1)	130
Fig. 96	出土建築材実測図(2)	131
Fig. 97	出土建築材実測図(3)	132
Fig. 98	第3号溝上層出土土師器実測図	136
Fig. 99	第3号溝出土弥生土器実測図(1)	137
Fig. 100	第3号溝出土弥生土器実測図(2)	138
Fig. 101	第3号溝第6井堰出土土器実測図	139
Fig. 102	第2・4号溝土層断面実測図	141
Fig. 103	第6号溝出土土師器および須恵器実測図	143
Fig. 104	採集遺物実測図	144
Fig. 105	第II区遺構配置実測図	144

目 次

巻頭図版	1	1) 次郎丸高石遺跡第3次調査I区全景	
		2) 出土墨書石	
巻頭図版	2	1) 免遺跡第2次調査遠景	
		2) 免遺跡第2次調査全景	
P h. 1		試掘状況	1
P h. 2		次郎丸高石遺跡第3次調査全景	2
P h. 3		免遺跡第2次調査風景	3
P h. 4		次郎丸高石遺跡第3次調査土層堆積状況	4
P h. 5		I・II区全景	9
P h. 6		第6号溝完掘状況	10
P h. 7		第6号溝出土墨書土器	12
P h. 8		第6号溝出土墨書土器および須恵器	14
P h. 9		第6号溝出土須恵器および土師器	15
P h. 10		第8号溝および土層堆積状況	20
P h. 11		第8号溝南壁土層堆積状況	20
P h. 12		第8号溝出土須恵器および土師器	22
P h. 13		第16号土壇出土土師器	24
P h. 14		中世遺構分布状況	25
P h. 15		第21号掘立柱建物および各柱穴土層堆積状況	27
P h. 16		第21～25号掘立柱建物出土遺物	31
P h. 17		東側建物群	35
P h. 18		西側建物群	39
P h. 19		各掘立柱建物出土遺物	40
P h. 20		各柱穴出土遺物	46
P h. 21		第1号井戸完掘状況	49
P h. 22		第1号井戸出土青磁	49
P h. 23		第7号土壇遺物出土状況	51
P h. 24		第7号土壇出土遺物	52
P h. 25		各土壇出土遺物	54
P h. 26		各溝出土遺物	57
P h. 27		I・II区出土中世遺物	60
P h. 28		次郎丸高石遺跡全景(東から)	64
P h. 29		IV～VII区全景	65
P h. 30		第3号溝検出状況	66
P h. 31		第3号溝土層堆積状況	67
P h. 32		第3号溝出土遺物(1)	70
P h. 33		第3号溝出土遺物(2)	72
P h. 34		第7・8号土壇遺物出土状況	74
P h. 35		第7・8号土壇出土土器	74
P h. 36		出土石器	77
P h. 37		免遺跡第2次調査I区全景	80
P h. 38		中央ベルト土層	83
P h. 39		包含層調査区全景(北西から)	84
P h. 40		包含層土層(c-c')	86
P h. 41		包含層出土土器	87
P h. 42		包含層出土石器	89

P h. 43	採集石器	92
P h. 44	第1井堰全景	93
P h. 45	第1井堰構築状況(1)	95
P h. 46	第1井堰構築状況(2)	97
P h. 47	第1号溝出土弥生土器	100
P h. 48	第1号溝出土土師器	103
P h. 49	第2柵構築状況	106
P h. 50	第1号溝第2柵出土須恵器	108
P h. 51	第3井堰(南から)	108
P h. 52	第4井堰	110
P h. 53	第5井堰(南から)	112
P h. 54	出土石製穂摘具	113
P h. 55	出土木器(1)	115
P h. 56	出土木器(2)	117
P h. 57	出土木器(3)	119
P h. 58	出土木器(4)	121
P h. 59	出土木器(5)	125
P h. 60	出土木器(6)	127
P h. 61	第3号溝検出状況	134
P h. 62	第3号溝第6井堰構築状況	135
P h. 63	第3号溝出土土師器	136
P h. 64	第3号溝出土弥生土器	140
P h. 65	第2・4号溝土層堆積状況	141
P h. 66	第6号溝土層堆積状況	142
P h. 67	第6号溝出土土師器および須恵器	142
P h. 68	Ⅱ区完掘状況	145

表 目 次

Tab. 1	出土木器一覽表	122
Tab. 2	出土建築材等一覽表	133

第1章 序説

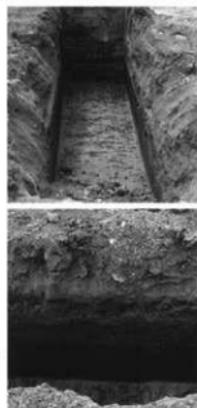
1. はじめに

福岡外環状道路は、西区姪浜から粕屋郡粕屋町戸原間の延長26.4kmの都市計画決定された都市計画道路で、建設省施行の福重から月隈間の16.2kmの区間は、一般国道202号福岡外環状道路とよばれています (Fig.1)。

平成元～3年に、建設省福岡国道事務所より福岡外環状道路線内の埋蔵文化財の事前調査願いが埋蔵文化財課 (以下、埋文課とする) に提出された。これを受けて、埋文課は、I工区の立花寺およびIV工区の野芥・福重間などで、遺跡の有無および遺構の遺存状態確認のため、用地更地分について、平成2～3年に試掘調査を実施した。

本書収録の賀茂三・四丁目地内の次郎丸高石遺跡は、平成3年11月に試掘調査を実施し、中世の柱穴や溝などが検出され、記録保存のための発掘調査が必要であると決定された。賀茂二丁目地内の免遺跡は、平成3年11月と平成4年7月10日に試掘調査を実施し、弥生時代から古墳時代にかけての遺物とともに、水利施設が検出されたため、記録保存のための発掘調査が必要であると決定した。前者の賀茂三丁目423、賀茂四丁目424・425地内は免Ⅰ要本調査地、賀茂三丁目394・397～400は免Ⅱ要本調査地にあたり、後者は免Ⅲ要本調査地にあたる。

発掘調査は、福岡国道事務所と福岡市土木局外環状道路推進部と埋文課の三者で、発掘調査順・契約などについて協議を重ね、工事工程に合わせ



Ph.1 試掘状況

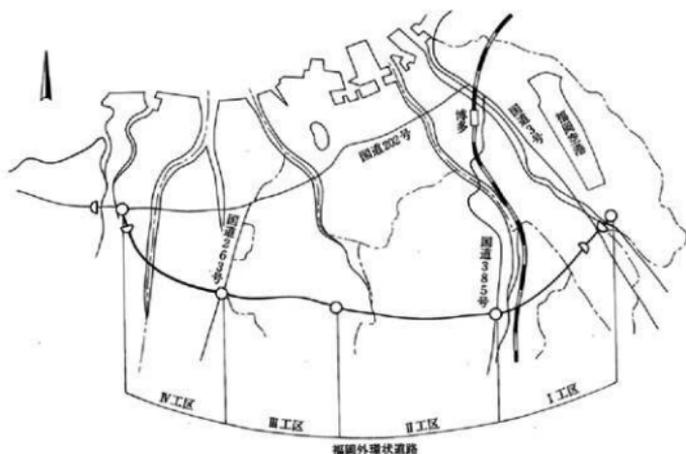


Fig.1 福岡外環状道路路線図

9238 次郎丸高石遺跡第3次調査

所在地 早良区賀茂三・四丁目地内
本報告書掲載

(第3章 発掘調査の記録
—次郎丸高石遺跡第3次調査—)



Ph.2 次郎丸高石遺跡第3次調査全景

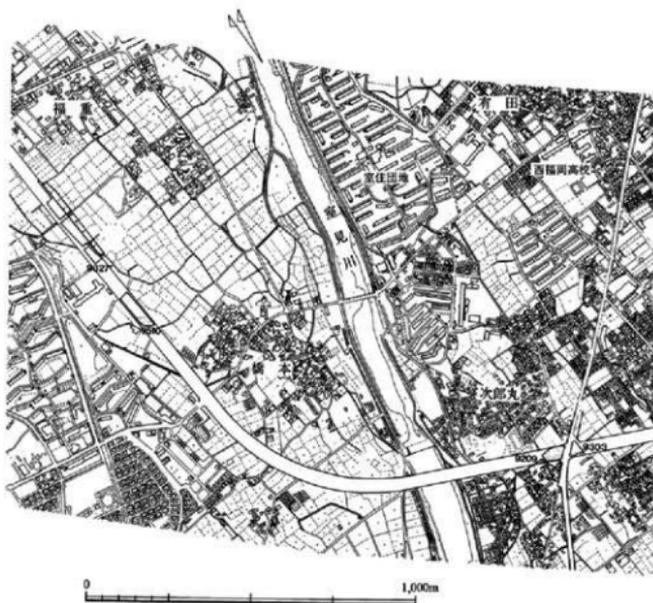


Fig.2 福岡外環状道路Ⅳ工区内調査遺跡位置図

9327 橋本一丁目遺跡第2次調査

所在地 西区福重二丁目地内
調査期間 平成5年9月1日～平成6年3月31日
調査面積 9,178㎡
調査担当 池田裕司・中村啓太郎
報告予定 平成9年度

9510 橋本遺跡第1次調査

所在地 西区橋本地内
調査期間 平成7年5月22日～平成7年6月15日
調査面積 1,050㎡
調査担当 杉山篤雄
報告予定 平成9年度

9261 免遺跡第2次調査

所在地 早良区賀茂二丁目地内
本報告書掲載
(第4章 発掘調査の記録
-免遺跡第2次調査-)



Ph.3 免遺跡第2次調査風景



9209 次郎丸遺跡第1次調査

所在地 早良区次郎丸二丁目地内
調査期間 平成4年5月19日～平成4年8月29日
調査面積 1,935m²
調査担当 山口謙治
報告書 平成7年度発行 (福岡外環状道路関係
歴史文化財調査報告-1-)

9233 次郎丸高石遺跡第2次調査

所在地 早良区次郎丸一丁目地内
調査期間 平成5年7月31日～平成4年11月3日
調査面積 1,503m²
調査担当 山口謙治
報告書 平成7年度発行 (福岡外環状道路関係
歴史文化財調査報告-1-)

9303 次郎丸遺跡第2次調査

所在地 早良区次郎丸四丁目地内
調査期間 平成5年4月19日～平成5年7月26日
調査面積 1,600m²
調査担当 山崎龍雄
報告書 本年度発行 (福岡外環状道路関係歴史
文化財調査報告-3-)

9307 野芥大森遺跡第1次調査

所在地 早良区賀茂二丁目地内
調査期間 平成5年5月18日～平成6年6月27日
調査面積 8,752m²
調査担当 山崎龍雄
報告予定 平成9年度

9454 野芥遺跡第5次調査

所在地 早良区野芥二丁目地内
調査期間 平成6年4月20日～平成6年12月15日
調査面積 5,559m²
調査担当 山崎龍雄
報告予定 平成10年度

な形で実施した。免Ⅰ・Ⅱ要本調査地を免遺跡第3次調査、免Ⅲ要本調査地を免遺跡第4次調査として本調査を実施した。しかし、平成5年度の分布地図改訂に伴い、免遺跡第3次調査を次郎丸高石遺跡第3次調査、免遺跡第4次調査を免遺跡第2次調査と改訂登録し報告する。

なお、1993年2月25日、次郎丸高石遺跡第3次調査地の遺構の拡がりを確認する目的で、次郎丸六丁目14-8・11(1,600m²)について試掘調査を実施したが、削平を受けた状態であり、遺構はなく、本調査対象外とした(Ph.1)。

2. 1992・1993年度の調査体制

調査体制としては、充分なる体制を組むことはできませんでしたが、建設省福岡国道事務所や本市外環状道路推進部をはじめとする関係者各位の協力のもとに、本調査・整理・報告からなる発掘調査は順調に進行いたしました。関係者各位に謝意を表します。

調査主体

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

教育長 井口雄哉・尾花剛(前) 町田英俊

前文化部長 花田兎一 文化財部長 後藤直

埋蔵文化財課長 折尾学(前) 荒巻輝勝

1992年度調査担当

山口謙治(主任文化財主事) 中村啓太郎(文化財主事)

1993年度調査担当

山崎龍雄(主任文化財主事) 池田祐司・中村啓太郎(文化財主事)

試掘調査担当

井澤洋一(主任文化財主事) 瀧本正志・加藤良彦・吉武学(文化財主事)

事務担当

入江幸男(前) 小森彰

調査・整理調査員

加藤隆也(現文化財主事) 山口亨(現大和町教委) 俵寛司(九州大学)

犬丸陽子 平川敬治 山口朱美 加藤周子

調査・整理協力者

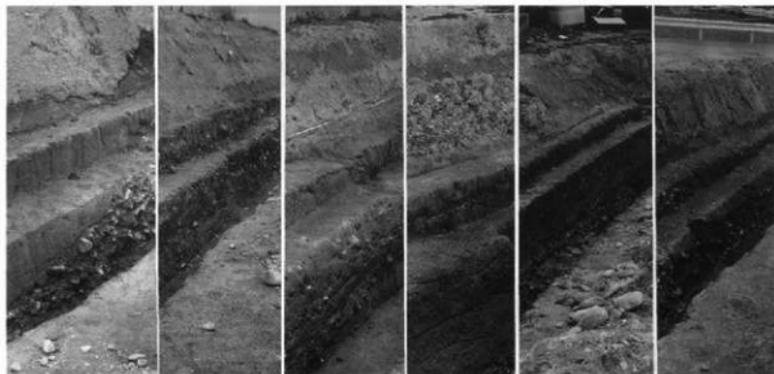
榎本義嗣・屋山洋・白井克也(文化財主事) 岡崇・後藤和武・柳澤寛広

小川勝彦・清川朋和・太田寿和・高山義克・永井大志・柴藤裕志・宮本周作

(以上、福岡大学歴史研究部) 赤星撰 有吉千栄子 池田礼子 上田保子

内野亜香 大久保沙波 太田明子 吉良山益美 武田裕子 中原尚美

堀江佐和子 前田みゆき 松尾真澄 松下節子 村田洋子 矢川みどり



Ph.4 次郎丸高石遺跡第3次調査土層堆積状況

第2章 遺跡の位置と環境

1. 本書報告遺跡の位置 (Fig.2・3)

福岡平野の西部には、北流する室見川を中心として早良平野が広がっている。福岡外環状道路は、早良平野のほぼ中央を東西に横切っている。本書報告の次郎丸高石遺跡第3次調査地は、福岡外環状道路IV区区基点である野芥から西に1km前後、同じく免遺跡第2次調査地は750m前後に位置している。

次郎丸高石遺跡第3次調査地は、室見川支流である金屑川中流域西岸の標高10m前後の低位段丘に位置している。調査前は、調査対象地の西側の南北に走る道路沿いが盛土されて宅地となっていたが、大半は水田として利用されていた。本調査地は、次郎丸高石遺跡第2次調査地の東300m前後に位置し、国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」の北から26.4cm、西から16.6cmにあたる。

免遺跡第2次調査地は、金屑川東岸の標高10.5m前後の低位段丘上に位置し、調査前は調査対象地の西側は水田、東側は盛土され工場敷地として使用されていた。本調査地は、免遺跡第1次調査地(鶴町遺跡)の南200m前後に位置し、国土地理院発行の5万分の1地形図「福岡」の北から26.5cm、西から12cmにあたる。

2. 本書報告遺跡の層位 (Fig.4, Ph.4)

次郎丸高石遺跡第3次調査地からみていくことにする。調査着手時は、西側は盛土され宅地使用のため標高10.35m前後で、Ⅱ～Ⅶ区は水田使用のため標高9.4m前後であった。Ⅰ区の基本層順は、標高7.7m(調査区東側)から8.8m(西側)に砂礫層(拳大の礫を多く含む)があり、その上に砂礫・砂・シルト・粘土が互層となり最大で1m前後堆積し、その上に最大で50cmの厚さをもつ暗灰色～黒色火山灰が堆積している。Ⅰ区検出遺構は、この層の上面(標高8.7m～9m)で検出した。その上に現代水田耕土があり、さらに盛土が行なわれている。Ⅲ～Ⅵ区は標高7m～8.2m前後に砂礫層があり(Ⅲ～Ⅴ区で確認。Ⅵ～Ⅶ区は7m以下と考えられる)、その上に流木など植物遺体を多く含む砂層が堆積し、その上に砂・シルト・粘土が互層となり1m前後堆積し、黒色～灰色の砂～シルトが、黄灰色～淡黄褐色のシルト～粘土が覆っている。Ⅴ～Ⅶ区の遺構は、この層上面の標高8.6m～9.1mで検出した。その上に現代水田耕土がある。

Ⅰ区遺構検出面の火山灰を下山正一氏に分析していただいた。その結果、アカホヤ火山灰に由来するものが大部分を占め、AT火山灰に由来するものが少量混入したことが判明した。このことからアカホヤ降灰時には安定した平坦面があったことが想定できるので、縄文時代早期の遺物が期待できるという指摘を受けた。後述する縄文時代の石器類は、遺構検出時および深掘り調査溝から検出したものであり、石器もその特徴から前期から早期のものといえ、同時期の遺物包含層であった可能性が大きい。駄目押しの調査を行なわなかったことを反省するとともに今後の周辺の調査に期待したい。

免遺跡第2次調査地は標高7.7m前後に多くの植物遺体を含む黒色粘質土があり、その上に砂・シルト・粘土が互層となり1m前後堆積し、その上に青灰色粘土～シルトが覆っている。遺構は、標高8.9m前後のこの面で検出した。青灰色シルトは東から西へ傾斜をもつと同時に、その上面は凹凸があり、凹面上には黒褐色砂～シルト・粘土が堆積し、その上にはアカホヤ火山灰・黒色粘土・黒灰色砂が堆積し、現代水田耕土・盛土がのっている。アカホヤ火山灰をはさんだ上下層からは縄文時代前期の遺物が出土した。



0318 免遺跡群	0252 熊倉石遺跡	0313 原草遺跡群	0347 三郎丸古墳群	0402 戸切遺跡群
2447 次郎丸高石遺跡	0253 熊倉石遺跡	0315 光野大遺跡群	3369 野方入形遺跡	9403 戸切渡り町遺跡群
2640 西条町遺跡	0254 熊倉石遺跡	0317 田村遺跡群	3390 熊丸一丁目遺跡	9405 古式遺跡群
0243 熊倉石遺跡	0269 クヌヅノ遺跡	3319 野宮遺跡群	0391 橋本遺跡	0525 野方下原遺跡
0245 熊倉A遺跡	0307 藤崎遺跡群	0330 石室遺跡群	0392 橋本塚田遺跡	0544 北原戸原A遺跡群
0246 熊倉C遺跡	0320 石室遺跡群	0332 石室遺跡群	0393 橋本元遺跡	2422 熊倉村遺跡
0247 熊倉D遺跡	0311 川邊遺跡	0333 東宮遺跡群	0398 野宮戸原石室遺跡	2448 野方大遺跡
0248 新山遺跡	0312 有日本坪遺跡	0334 重留村下遺跡	0399 野宮戸原C遺跡群	

Fig.3 次郎丸高石遺跡・免遺跡群の位置と周辺の遺跡

第3章 発掘調査の記録

—次郎丸高石遺跡第3次調査—

遺跡調査番号 9238

遺跡略号 JRT-3

分布地図番号 083-2447

調査地地籍 福岡市早良区賀茂三丁目394・397～400・423、四丁目424・425 調査面積 7,955m²

調査期間 1992年9月24日～1993年3月29日

新編 古語類聚 卷之九

一、萬葉集卷之九

萬葉集卷之九 卷之九 卷之九

萬葉集卷之九 卷之九 卷之九

萬葉集卷之九 卷之九 卷之九

1. I・II区の調査概要 (Fig.5・6, Ph.5)

本調査地は平成3年度試掘調査を実施し、中世の溝や柱穴を検出し、免I・II要本調査地と決定した地区にあたる。本調査地内には、免I・II要本調査地の境に幅8m、これにとりつく形で幅5mの市道があり、道路切り換えが行なわれていないことと、東西・南北方向に農業用水があり、水路切り換えが行なわれていないことから、道路・水路部については調査対象地から除いた。また、一部の未買収地についても調査対象外とした。

調査は調査対象外の道路・水路を利用し、西から東へI～VII区に分け、西のI区から順に実施した。本書では、本調査地内容および試掘調査から本調査着手までの協議過程で免I・II要本調査地としており、免I要本調査地のI・II区と免II要本調査地のIII～VII区に便宜的に分けて、I・II区からみていくことにする。

I・II区(以下、本調査区とする)の間には、幅1mの水路があり、両側に幅1mの引きをとり、西端には幅1mの道路があり、盛土されているため5mの引きをとったほか、それぞれ1～5mの引きをとり調査区を設定した。

調査は、盛土(西側)および水田耕土をバックホーを使用して除去することから始めた。その結果、標高8.6m前後(東側)～9m前後(西側)の黒灰色～黒褐色火山灰および砂礫の面で、中世の遺構を検出したため、この面を精査した。なお、I区西側の800㎡については削平を受けたと考えられ、遺構は確認できなかった。この西側遺構未検出地を、本調査区の廃土置き場とした。

検出遺構は、中世の掘立建物(以下、建物とする)・井戸・土塼・溝・柱穴と古代の自然流路・土塼がある。建物は本調査区の中央に集中し、南北方向の主軸をもつもの15棟を検出した。井戸は建物群の西に隣接した形で1基検出した。中世の土塼は、建物群の南側で15基検出した。中世の溝は、東西・南北方向のもの6条を検出した。古代の遺構は、本調査区中央部と東端部で自然流路を検出したほか、II区で溜状の土塼1基を検出した。これらの検出遺構は、建物をSB、井戸をSE、土塼をSK、溝および自然流路をSD、柱穴をSPと遺構記号を使用した。遺構番号は、遺構ごとに検出順に遺構記号を頭とし、柱穴は4桁、そのほかの遺構は2桁の通し番号を付した(例 SB-21……、SE-01、SK-01……、SD-01……、SP-0001……)。なお、本書中では遺構名と遺構記号を併記して述べていく。

出土遺物は、縄文時代のものと考えられる打製石鏃などの石器、弥生時代の甕等弥生土器、古墳時代の甕等土器器・須恵器、古代の坏等須恵器・土器器・鉄滓、中世の碗等輸入陶磁器・皿等土器器・土錘・ガラス玉・墨書石・瓦経等がある。これらの遺物は、頭に9238の遺跡調査登録番号を冠し、土器類および土製品は00001から、石器および石製品は01001からの通し番号をそれぞれ付し、登録番号とした(例 土器923800001……、石器923801001……)。なお、本書中の挿図および図版は遺跡調査登録番号をはずした5桁で示し、本文中では4桁で述べていくことにする。

本調査区においては、前述したように、標高8.6m前後から9m前後にかけての面で、西側の一部を除いて中世の遺構が検出でき、遺構検出面は西側が高く東側が下がっていることがわかった。本調査区から西へ200mの第2次調査地の知見では、本調査地と第2次調査地間に南北方向の谷が入ると想定できた。向調査の知見から次郎丸六丁目14の地まで遺構が広がっている可能性があったため、序段でも述べたように試掘調査を実施したが、遺構は確認できなかった。このことから本調査区検出の中世集落は、本調査区中央部から北へ広がっていると考えられる。

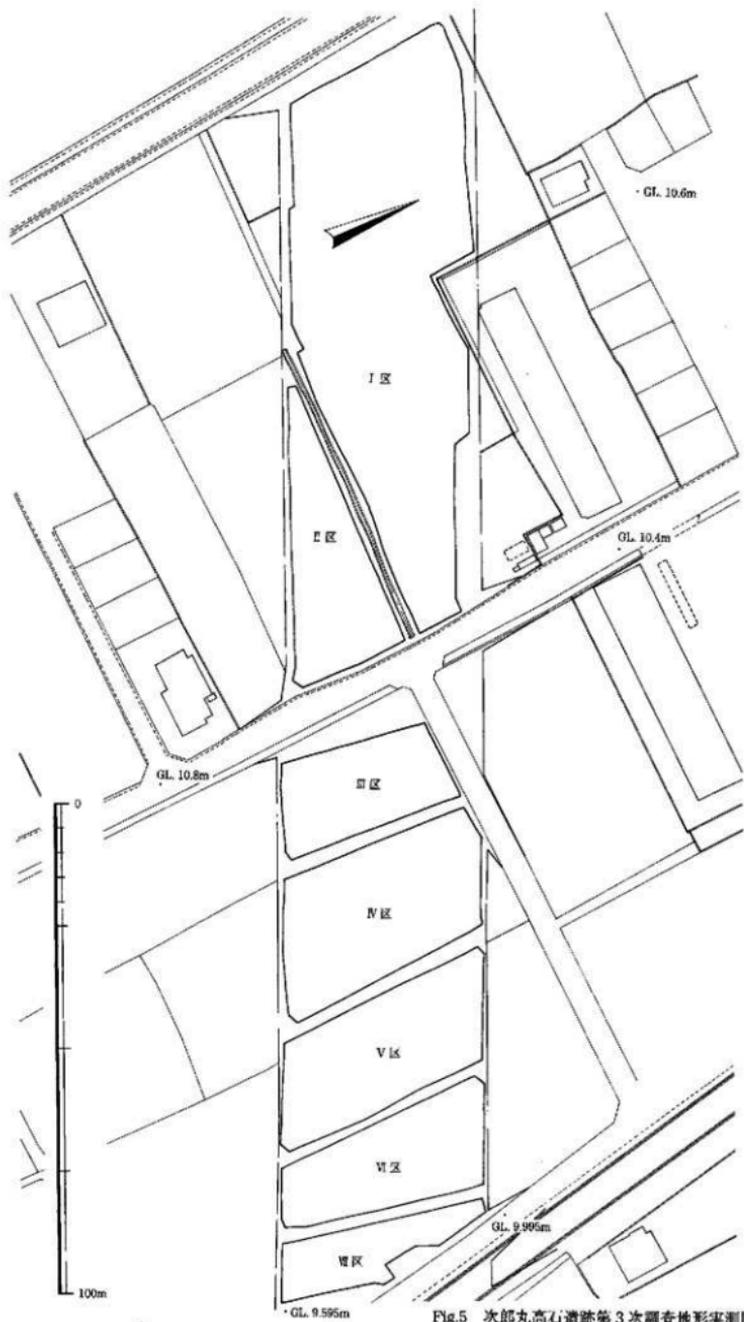


Fig.5 次郎丸高石遺跡第3次調査地形実測図



1) I・II区 (西から)



2) I区 (東から)

Ph.5 I・II区全景

2. 古代の遺構と出土遺物 (Fig.7~15, Ph.6~9)

1) 第6号溝 (SD-06) と出土遺物 (Fig.7~13, Ph.6~9)

本溝は、I区中央部とII区西端部の標高8.95m~9.0mの黒褐色~黒灰色火山灰質土の面で検出した。第28・29号建物、第5~11・14号土塊、第2・5号溝や柱穴に切られ、北側の一部は6×13mの溜折?によって攪乱を受けている。本溝は幅7m前後の北流する自然流路と考えられるが、自然流路が長期に渡って遺存したため、完掘状態では13m前後の幅をもつところもある。深さは1m前後遺存し、段丘砂礫層を削っている。埋土をみていくと砂層が基調で、粘土・シルト・砂・粗砂の互層となっている。東端側の幅3m前後の流路が埋まった後、西端側に幅1m前後の流路が残っていたと考えられるが、黒褐色土から叩き締められた状態で覆っており整地されたといえよう。

遺物は、最上部埋土の黒褐色土中から中世の遺物が出土したほか、底まで先土器時代・縄文時代の石器、弥生土器、古墳時代の土師器、古代の須恵器・土師器がまんべなく出土した。遺物の出土量は底および底近くが多く、古代の遺物の完形品および完形品に近いものはほとんどが底密着に近い形で出土しており、遺存状態は良好である。これに比べ古墳時代以前の遺物は破片で、磨耗している。

以上から、本溝は8世紀前後の浸蝕によってでき、たびたびの洪水を受けながら中世まで残り、中世の集落形成に伴う整地によって埋められた自然流路といえよう。本溝の東200m弱を北流する金屑川が同河川支流と考えられる。

出土遺物 (Fig.8~13, Ph.7~9) 本溝からは、前述したように先土器時代から中世の遺物が出土したが、ここでは8世紀前後から本溝が整地されるまでの遺物をみていくことにする。

本溝出土の奈良時代の遺物としては、須恵器・土師器と鉄滓があり、中世整地層からは瓦器と土師器が出土した。

墨書土器 (Fig.8, Ph.7・8) 55~59は須恵器、85・86・88は土師器で、58・59・85は皿、他は坏である。55は有高台で外底に「城司」の墨書があり、口径14cm、底径7.95cm、器高4cmを測る。56・57は無高台坏で、外底に墨書がみられ (56は「〇」)、口径は12.8cm・12.5cm、底径7.9cm・7.7cm、器高3.6cm・3.5cmを測る。86・88は無高台坏で、外底に「井田」 「畠」の墨書がみられ、外底はヘラケズリ、他の器面は横ナデ調整で仕上げている。口径14.4cm、14.5cm、底径9.5cm、8.4cm、器高4.1cm、3.5cmを測る。58・59・85は外底に墨書がみら



1) 完掘状況



2) 土層堆積状況

Ph.6 第6号溝完掘状況

れ (58は「个」)、口径14.9cm・14.6cm・17cm、底径11.6cm・11.4cm・11.1cmを測る。

以上の墨書土器は8世紀前半から後半のものといえ、磨耗していないこと、役職名と考えられる「城司」の墨書があることなどから、本調査では同時期の建物等の遺構は検出できなかったが、本調査区の南周辺に奈良時代の官衙的性格をもつ集落が存在すると考えられる。

坏 (Fig.8-9, Ph.8-9) 0128・0153は須恵器の坏蓋で、0128は受け部をもち、0153は天井につまみをもっている。0128は口径10.4cmを測り、赤焼きである。

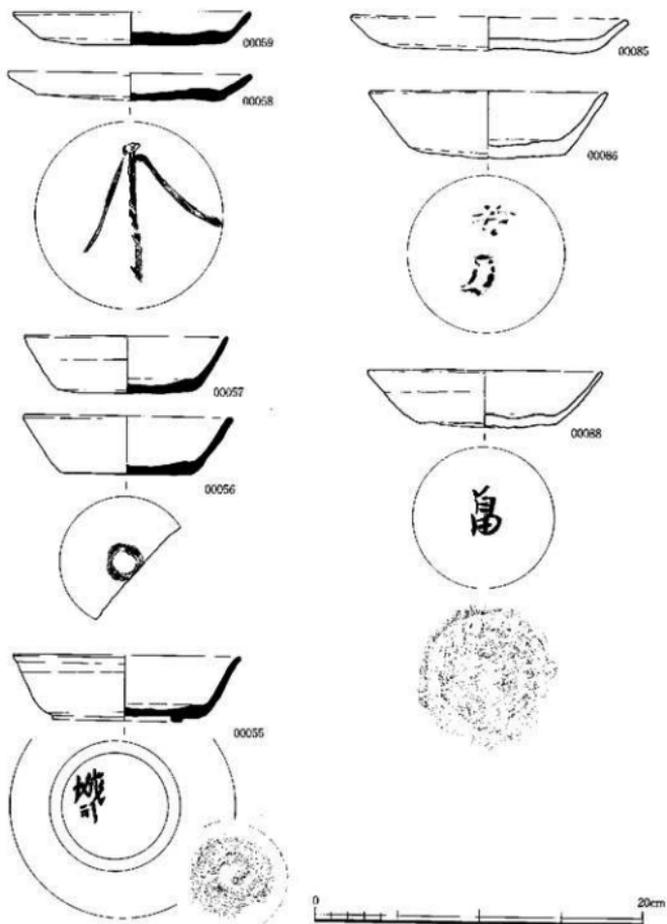
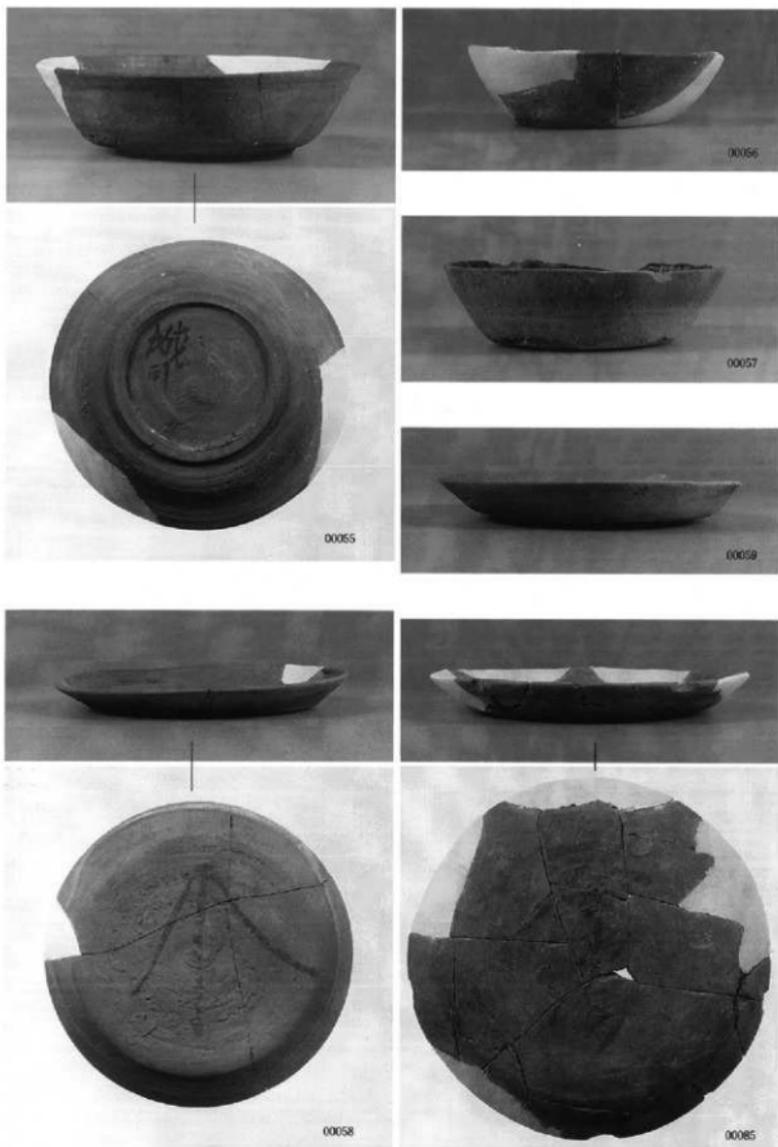


Fig.8 第6号津出土墨書土器実測図



Ph.7 第6号溝出土墨書土器

39・54・60・67・68・0147は須恵器の坏で、60は蓋の受け部をもち、43・44・67・0147は無高台、他は有高台である。60の外底にはヘラ記号がみられる。60以外の外底は回転ヘラケズリ後ナデ調整が、内底はナデ調整、他の器面は横ナデ調整が施されている。口径は40がもっとも大きく15.2cm、最小は47の12.1cmで、13cm前後を測るものももっとも多く、12.2cm前後のものとも15cm前後のものがある。底径は有高台では54の11.1cmが、無高台は43の11cmが最大、42・44の6.6cmが最小で、ばらつきがある。器高は39の4.9cmが最大、47の3cmが最小である。0147の外底近くにはヘラ記号がみられる。

73・82・87・89・90・0100～0109・0129・0130・0145・0146・0155は土師器の坏で、87・0107・0108が有高台、0130が有高台の可能性はあるほかは無高台である。87は高い高台をもち、器面はナデ調整が施され、口径18.5cm、底径10.7cm、器高8.3cm強を測る。73・80・0101の外底には板状圧痕がみられ、他の器面は横ナデ調整が施されている。口径12.7cm・12.8cm・14cm、底径8.2cm・7.5cm・8.4cm、器高4.6cm・3cm・3.8cm弱を測る。74～77・0109の外底はヘラケズリ後ナデ調整、他の器面は横ナデ調整が施されている。74・75の口径は13.5cm・12.4cm、底径7.1cm・7.7cm、器高4.4cm前後を測る。0109は口径12.4cm、底径9.1cm、器高3.8cmを測る。78・79・82等

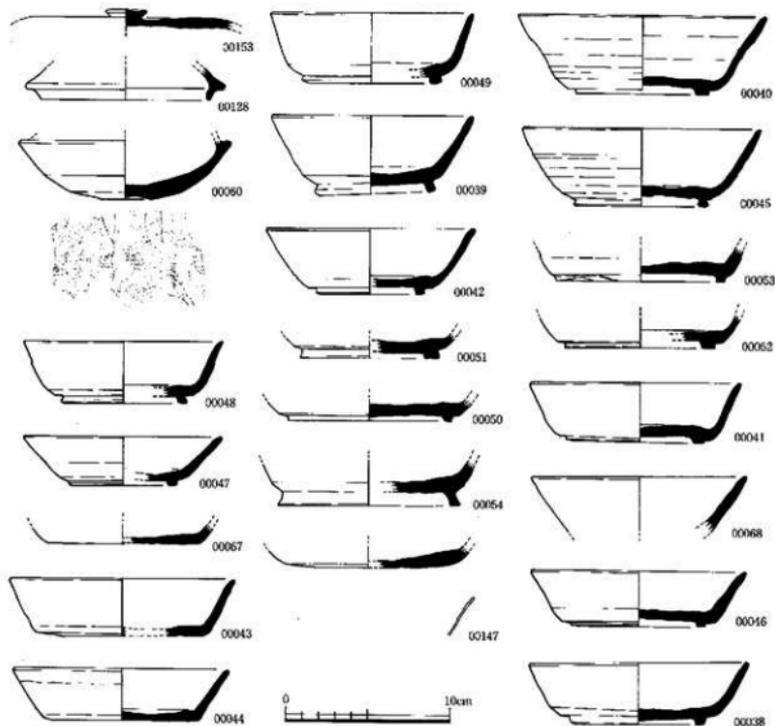
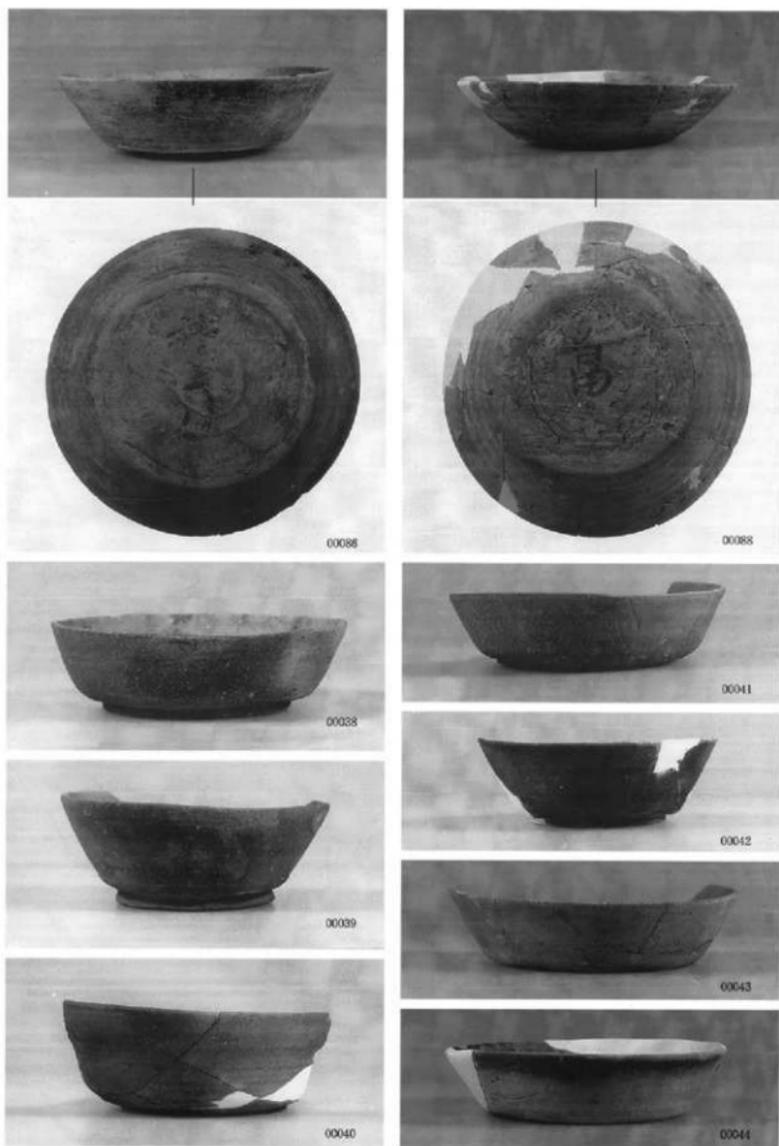
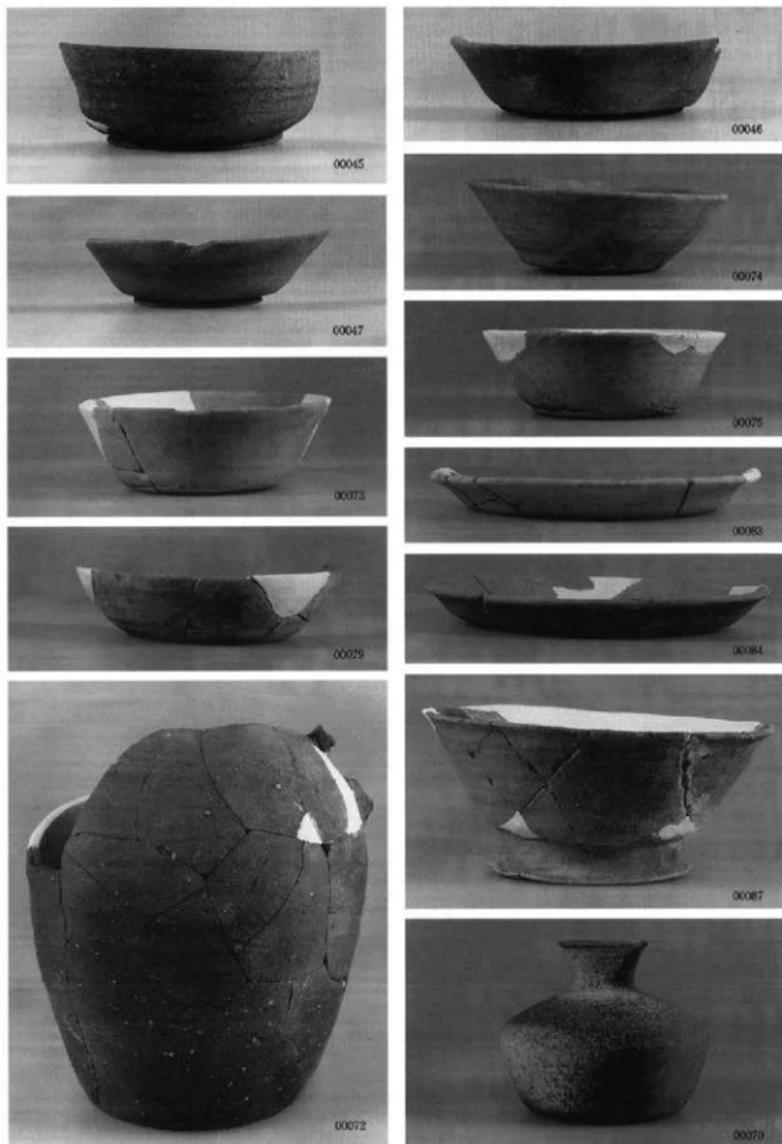


Fig.9 第6号溝出土須恵器実測図 (1)



Ph.8 第6号溝出土黒書土器および須恵器



Ph.9 第6号清出土須恵器および土器器

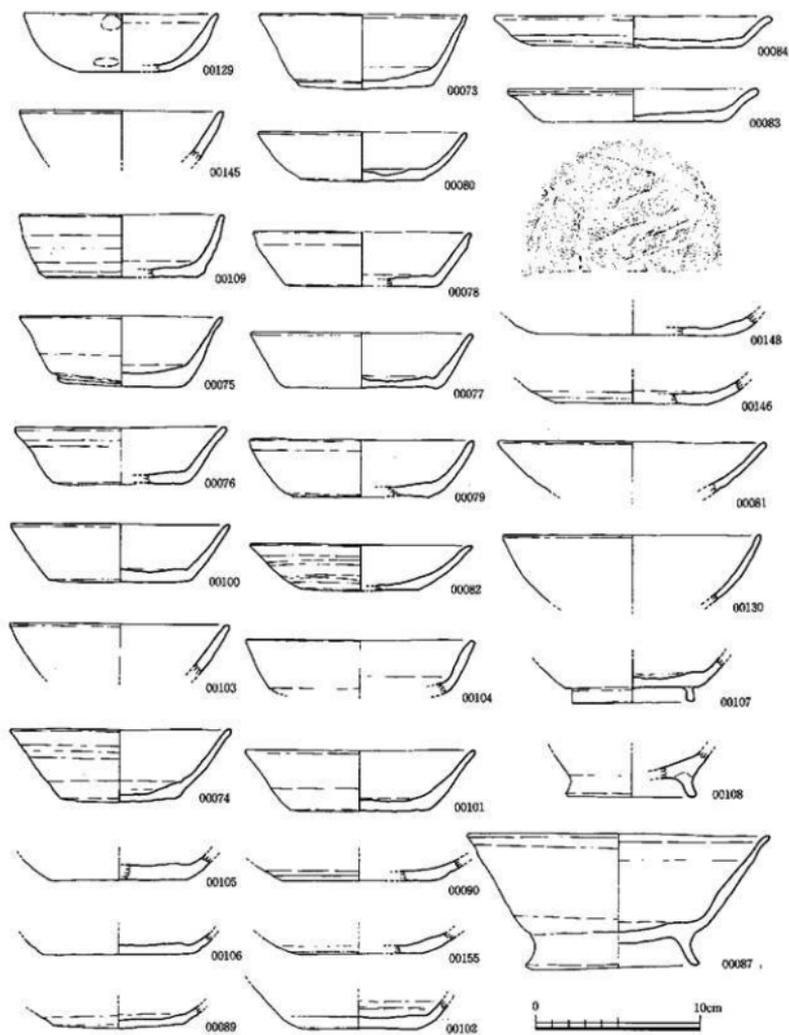


Fig.10 第6号清出土土器実測図 (1)

の外底は回転ヘラケズリ後ナデ調整が加えられ、他の器面は横ナデ調整が施されている。78・79・82は、口径13.5cm前後、底径9.2cm・8.3cm・7.1cm、器高3.3cm・3.5cm・2.8cmを測る。

60・0128が6世紀末、他の須恵器が8世紀で、土師器は8世紀から10世紀末までのものがある。

Ⅲ (Fig.9, Ph.9) 本溝では須恵器と土師器があるが、墨書以外の須恵器皿は細片のため図化しなかった。83・84・0148は土師器で、83の外底には板状圧痕がみられる。84の外底は回転ヘラケズリが加えられ、器面は横ナデ調整が施されている。83・84は口径15.4cm・17cm、底径10.8cm・12.9cm、器高2cm・1.95cmを測る。

83は10世紀後半から末、84は9世紀前後か。

その他の須恵器 (Fig.10, Ph.9) 63は短頸の壺、64は壺、61・62・71は長頸壺、70は小壺、72は瓶、65は瓶か壺、0154は大皿、66は蓋か。69は播鉢か。70は口径4.4cm、器高8.7cmを測り、0154は口径22cmを測る。

以上の須恵器は8世紀から9世紀にかけてのものといえよう。

その他の土師器 (Fig.11) 91～95・97・99・0133・0156は甕で、0111は甗、0110は甗片か。口径は99が最小で14.4cm、0133が最大で39.8cmを測る。

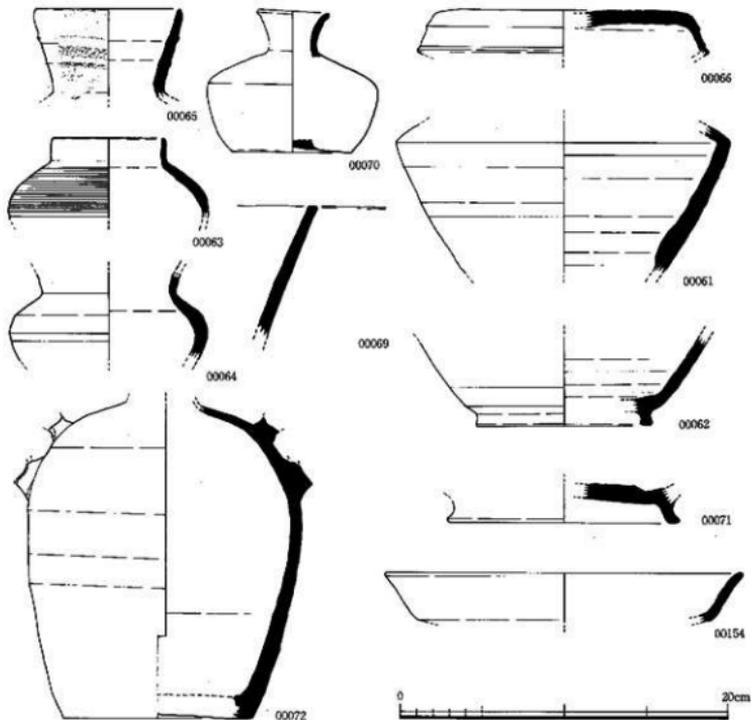


Fig.11 第6号溝出土須恵器実測図 (2)

93・95・97は古墳時代のものであるが、8世紀から9世紀にかけてのものが大半を占めている。
 最上層出土土器 (Fig.12) 0142・0143は瓦器碗、0144・0151は土鍋、0149は土師質摺鉢、0150は
 土師質の皿である。

以上の遺物は11世紀末前後のものと考えられ、本溝が整地された時期を示しているといえる。

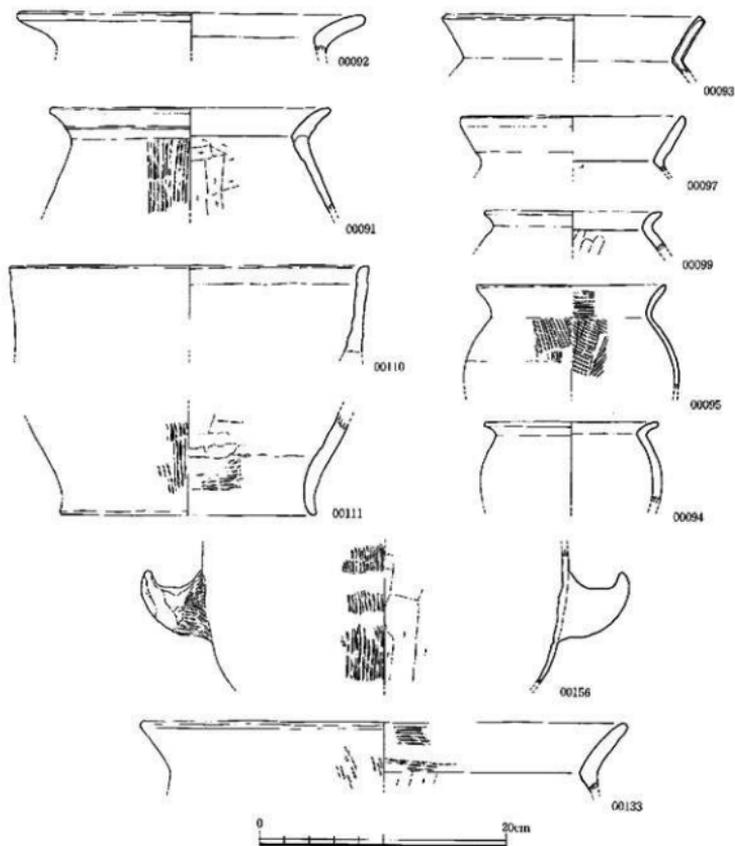


Fig.12 第6号溝出土土師器実測図 (2)

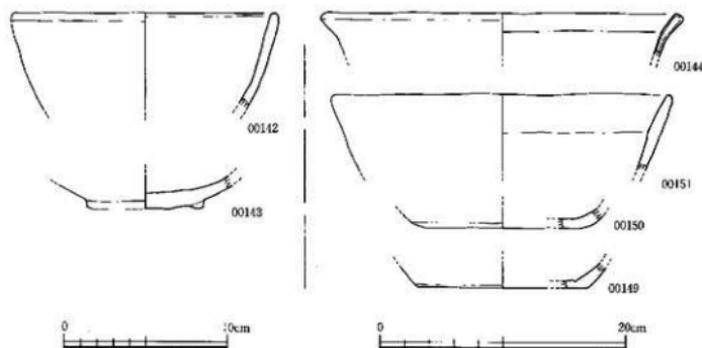


Fig.13 第6号溝最上層出土遺物実測図

2) 第8号溝 (SD-08) と出土遺物 (Fig.7・14, Ph.10~12)

本溝は、Ⅱ区東端部の標高8.9m前後の淡黄褐色のシルト面で検出した。幅6m前後で40cm~80cm前後の深さ遺存し、北流する自然流路と考えられる。本溝の西岸には2ヶ所土壌が付設されており、東岸には小溝2条がとり付いている。削平を受けているため復元は困難であるが、土壌は水田水入れ用のぬるめの役目をはたし、小溝は水田排水用の施設と考えられるところから、本溝は自然流路を利用した水田用の用水として利用された可能性が高いといえよう。土層堆積状態をみていくと、砂を基調として、粘土・シルト・砂・粗砂が互層となって堆積し、最上部に灰黄褐色・淡褐色シルトに堆積している。最上部の4・5層は整地層の可能性が高いといえよう。

遺物は、弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器、奈良時代の須恵器・土師器があり、底から上部までむらなく出土した。ただし、弥生土器は磨耗が激しく、古墳時代の土器は磨耗は少しみられるが器形がわかるものが多く、奈良時代の土器はほとんど傷みがない。

以上から、本溝は古墳時代前期ごろ浸蝕によってできた金眉川の本流か支流で、奈良時代まで存在したと考えられる。また、付設遺構が存在することから本溝は水稲耕作用の用水として用いられ、存続時期が異なることから、本溝の機能は第6号溝に切り換えられた可能性もある。

出土遺物 (Fig.14, Ph.12)

本溝からは、多量の遺物が底から上部までむらなく出土した。前述したように各時期の土器が出土したが、比較的遺存状態が良い古墳時代の土器と古代の土器について、ここではみていくことにする。
須恵器 0214・0215は無返し of 坏蓋で、天井外面には回転ヘラケズリがみられ、他の器面にはヨコナデ調整が施されている。0214の口径は13.2cmを測る。0213は有高台の坏で、口径15.3cm、底径8.8cm、器高5cmを測る。以上のほか、坏の出土量が多いが細片のため固化しなかった。0216・0217は新羅陶器煮で、外面には叩き痕がみられ内面はナデ調整が施されている。0216は沈線も巡っており削上半部片、0217は削下半部片か。0218・0219は甕で、外面は叩き、内面は当て具痕がみられるがナデ消している。

以上の須恵器・新羅陶器は8世紀代のものといえよう。

土師器 0211は有高台坏で、口径16.6cm、器高5.4cm+αを測る。0212は無高台坏で、外底は回転ヘ



Ph.10 第8号溝および土層堆積状況

ラケズリが施され、内底はナデ調整、他の器面はヨコナデ調整で仕上げている。口径12.6cm、底形7.2cm、器高3.2cmを測る。以上のほか、坏の出土量が多いが細片のため図化しなかった。0220・0222は高坏で、0220は軸部、他は底部片。0221・0222は底径12cm、13.2cmを測る。0223は口径13.2cmを測る小形丸底壺。0206・0207・0385は鉢で、0207は台付き。0206の外底はヘラケズリ、胴外面から内面上部はヘラナデ？、内面下半から底は指押さえ後ナデ調整が施されている。口径15.4cm、器高6.5cm。0385の外底はハケ目調整、胴外面下半はヘラケズリ、胴外面から内面上部はヨコナデ調整、内面下半から底は指押さえ後ナデ調整を施している。口径13.7cm、器高6.1cm。0205・0208～0210・0224・0225は甕で、0208～0210は長胴から屈曲して口縁となり、内面屈曲下はヘラケズリが施されている。口径21.7cm・21.8cm・12.6cmを測る。0225の外面には叩き痕がみられる。0205はやや磨耗しているが複合口縁をもち、口径20.4cmを測る。

以上の土師器および未図化土師器は、古墳時代初頭から8世紀後半までのものといえる。



Ph.11 第8号溝南壁土層堆積状況

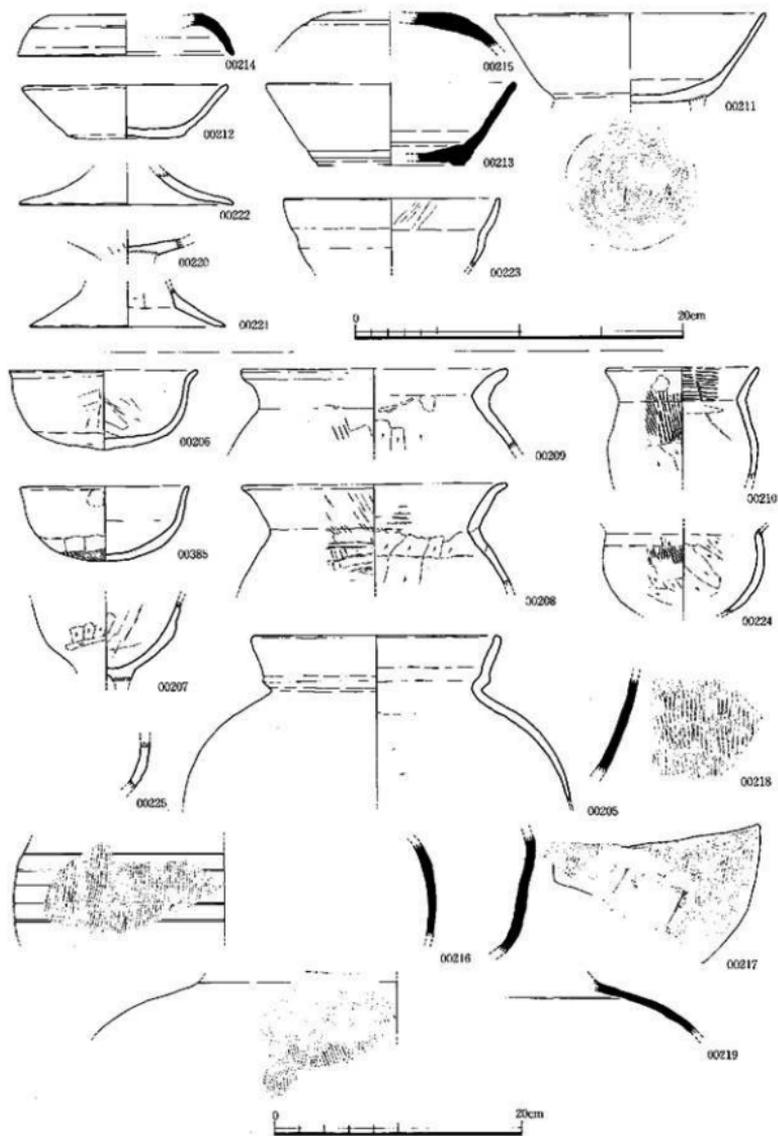
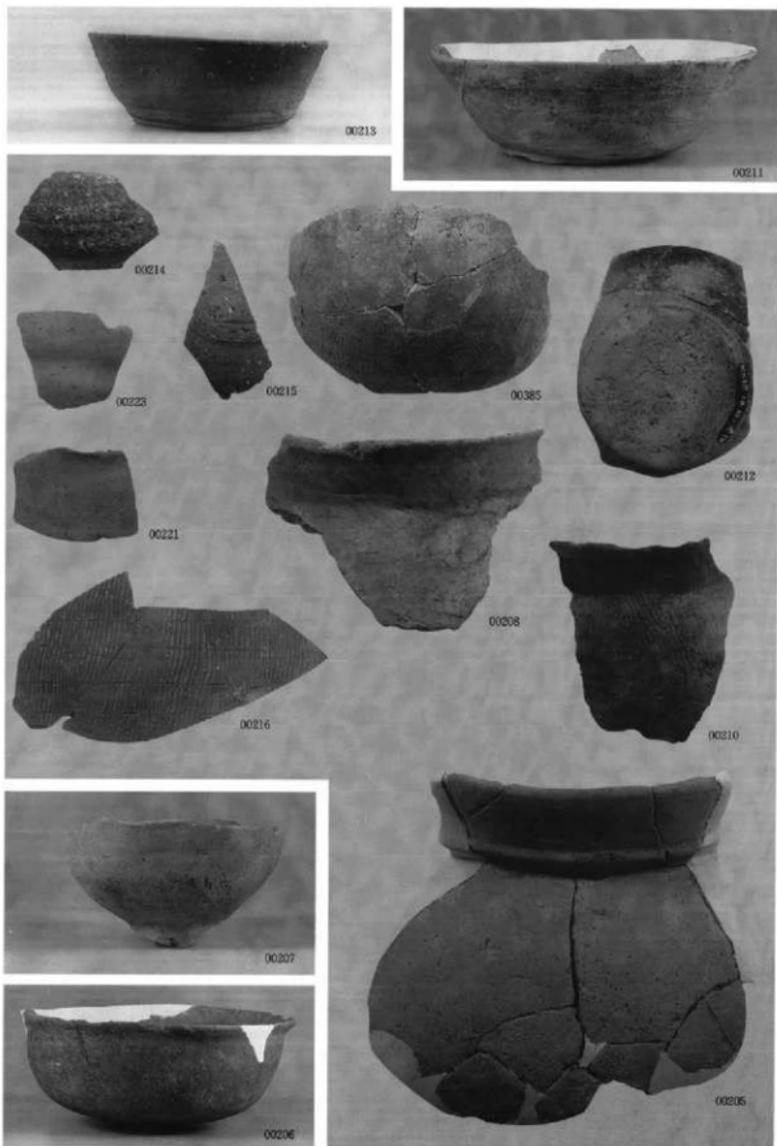


Fig.14 第8号溝出土遺物実測図



Ph.12 第8号溝出土須恵器および土師器

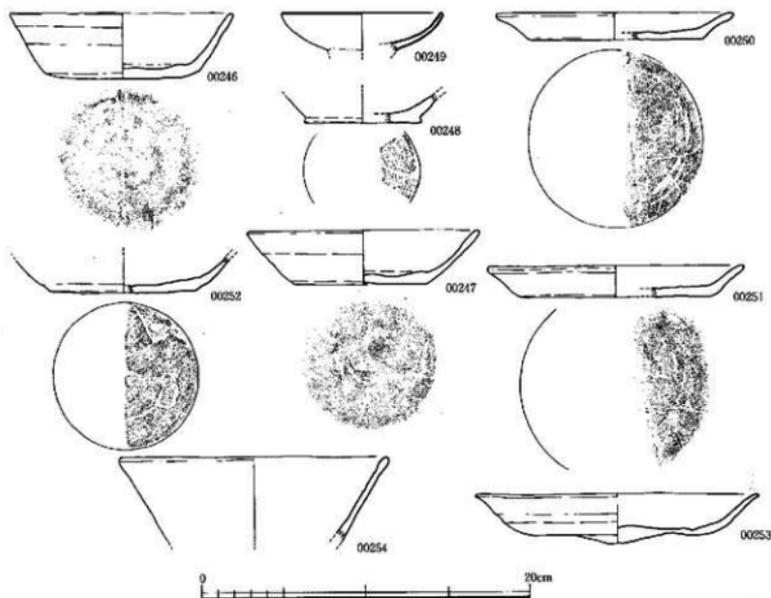


Fig.15 第16号土壌出土遺物実測図

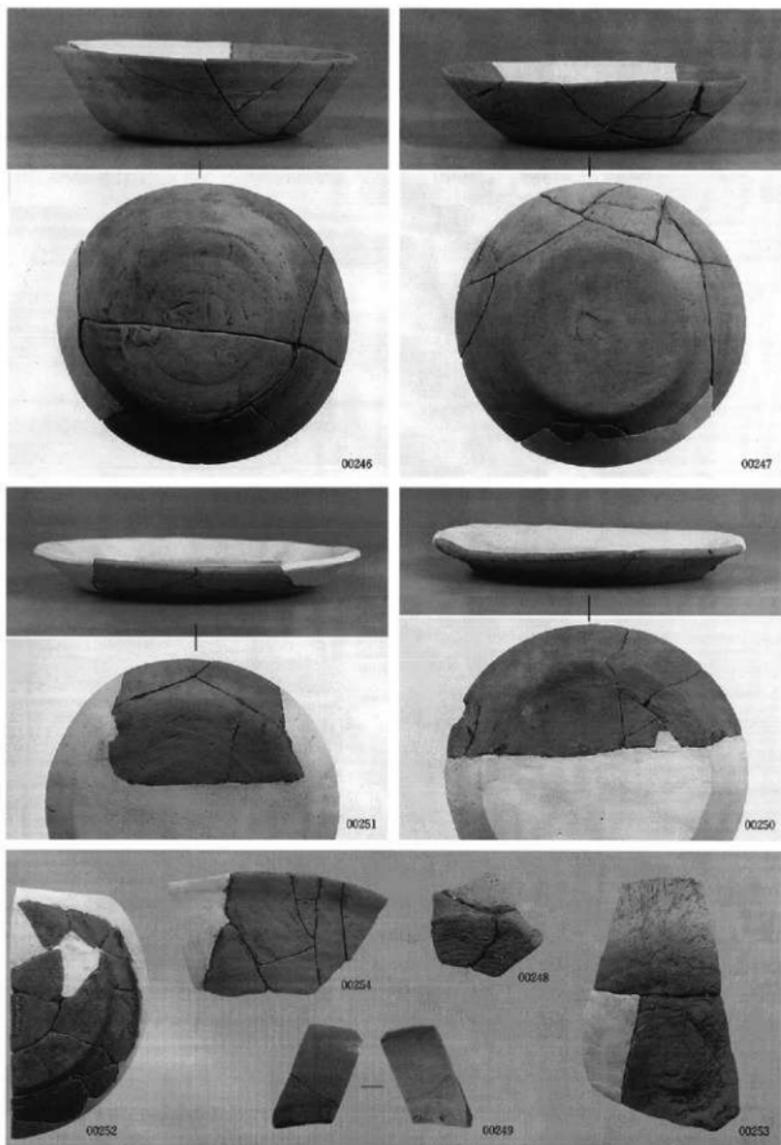
3) 第16号土壌 (SK-16) と出土遺物 (Fig.7・15, Ph.13)

本土壌は、Ⅱ区の第6号溝東の標高8.95m前後の黄灰色シルトの面で検出した。検出面では東西軸9m、南北軸5m前後を測る不整形土壌で、1.5m前後遺存している。埋土をみていくと粘土・シルト・砂・粗砂の互層となっており、上部には黒褐色～暗灰色土が叩き締められた状態でみられることから整地によって埋められたと考えられる。第6号溝の付設土壌の可能性がある。

出土遺物 (Fig.15, Ph.13)

0249は白磁皿で、口径9.8cm、器高2.4cm+ α を測る。0248・0250・0251・0253は土師器皿で、0248は糸切り底、0250・0251の外底には板状圧痕がみられる。0250・0251・0253は口径14.6cm・15.8cm・17.4cm、底径10.8cm・11.8cm・10.2cm、器高1.7cm・1.9cm・3cmを測る。0246・0247・0252は土師器無高台坏で、外底は回転ヘラケズリ後ナデ調整が加えられ他の器面はヨコナデ調整で仕上げている。口径13.7cm・14.2cm、底径9.3cm・8cm・9cm、器高4cm、3.3cmを測る。0254は口径16.6cmを測り碗か。

以上、本土壌の上層からは12世紀前半の遺物が出土し、底からは9世紀前後の土師器がまとめて出土した。本土壌は8世紀後半から9世紀前半に機能し、12世紀前半に廃棄されたといえる。



Ph.13 第16号土坑出土土陶器

3. 中世の遺構と出土遺物

中世の遺構としては、建物15棟、井戸1基、土坑18基、溝6条がある。これらの遺構はI区西側では標高9m前後の黒灰色火山灰および黄褐色砂礫層の上で、I区東側では標高8.7m前後の黒褐色火山灰層で層上面で検出した。なお、II区では同時期の遺構は検出できなかった。

1) 掘立柱建物(SB)と出土遺物(Fig.6・16~29, Ph.14~20)

建物15棟は本調査区の中央部に集中し、いずれも南北方向を主軸とするものである。また、分布状態をみていくと時期は異なるものの第6号溝を挟むように東に8棟、西に7棟分布している。また、建物としてまとめることができなかった柱穴も建物群と同じような分布をもつが、I区中央部南側の第6号溝廃棄整地面にも分布している。以上から、検出した建物群は15m前後の空地をもち、平行した状態で確認したが、南側に東西棟が存在した可能性が高く、中庭をもつ建物群だったことが推定できる。

第21号掘立柱建物(SB-21)(Fig.16~19, Ph.15~16)

本建物は東側建物群の南端に位置し、第7号溝を切り、第22・28号建物と切り合い関係にあるが、柱穴の切り合い関係がなく、出土遺物が少量であるため前後関係はわからない。SP-2101~2114の14個の柱穴で構成された梁行2間、桁行4間の側柱の建物である。柱掘り方は検出面では円形・隅丸方形を呈し、径40~60cmを測り、32~76cm遺存している。柱は、柱痕跡から径14~18cmの円柱と考えられる。柱穴のうち、SP-2102・2103は掘り方の底に扁平の石を礎石状に置き、その上に柱をのせたと考えられる。また、柱穴断面をみていくと柱はシルト・粘土・砂を版築状に入れ固定しているほか、柱固定に小石を用いているものもある。柱間は桁行東側が190cm・202cm・186cm・199cmで桁行770cm、桁行西側が192cm・185cm・194cm・181cmで桁行752cm、梁行南側が194cm・197cm・188cmで梁行579cm、梁行北側が199cm・189cm・183cmで梁行571cmとなっている。SP-2101・2105・2108・2112の四隅の柱穴掘り方からは、まじないと考えられる墨書石が出土した。

出土遺物(Fig.19, Ph.16) 本建物の各柱穴掘り方からは、少量の遺物が出土した。出土遺物としては青磁・土師器・墨書石・壁土がある。

01・1001はSP-2101から出土した竜泉窯青磁碗と墨書石である。01は口径17cm、1001は長さ16.6cm、最大幅9.1cm、最大厚4.2cmを測る重さ789.78gの花崗岩転石の一面に「一切悪日皆成善日一切悪宿皆成善宿一切悪曜皆成善曜一切悪_四・_四・_四・_四」と2行に分けて墨書がみられる。1003はSP-2105から出土した墨書石である。長さ12.8cm、



Ph.14 中世遺構分布状況

幅9.9cm、最大厚4.5cmを測る重さ858.79gの花崗岩角礫転石の一面に「一切悪^田、^口成、善^口 一切^口
^口成、^口口 一^口、^口口口口口口 ^口口口口口口口」と4行の墨書がみられる。02・03はSP-2106から出土した糸切り底の土師器皿で、底径9cm・8.2cmを測る。05はSP-2107から出土した糸切り底の土師器皿で、口径12.4cm、底径8.4cm、器高1.9cmを測る。04・1002はSP-2108から出土した土師器坏(皿か)と墨書石である。04は口径14.8cmを測る。1002はSP-2101等の柱穴から墨書石が出土したため、柱穴から掘り上げた集石中で確認したものであり、SP-2108から出土したと断言できない。他の墨書石が隣の柱穴から出土していること、SP-2108の平面および断面図に入っている石と同程度の大きさであることから本柱穴出土と認定した。長さ11.2cm、幅10.5cm、厚さ3.9cmを測る重さ645.03gの花崗岩角礫転石の一面に「一切悪^日皆^田、善^口 一切悪^皆皆^田、善^宿 一切悪^口皆^田、成^田、^田。一切悪^時皆^成善^時」と4行の墨書がみられる。06はSP-2109から出土した糸切り底の土師器で、底径8.4cmを測る。07・08はSP-2110から出土した糸切り底の土師器皿で、口径8.4cm、底径

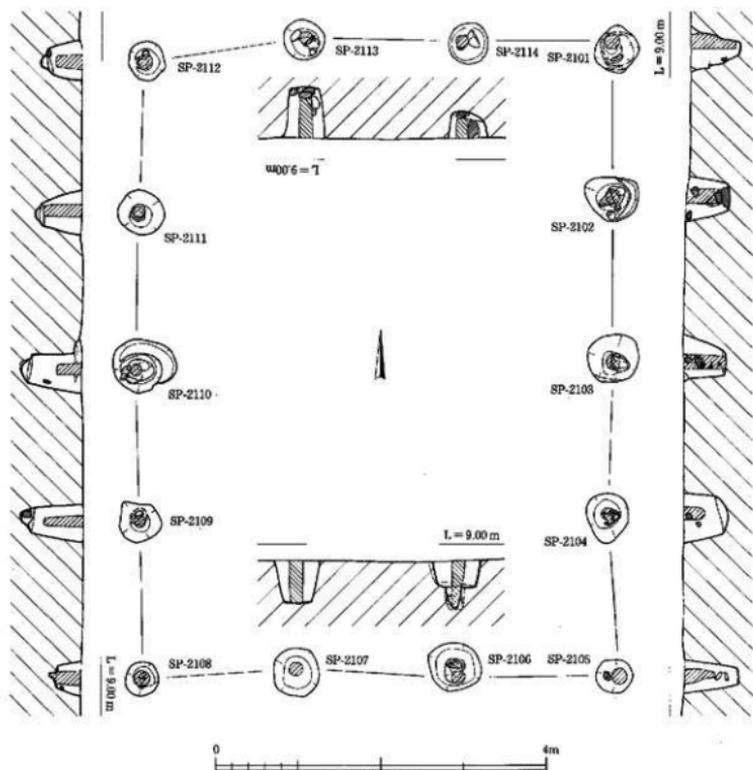
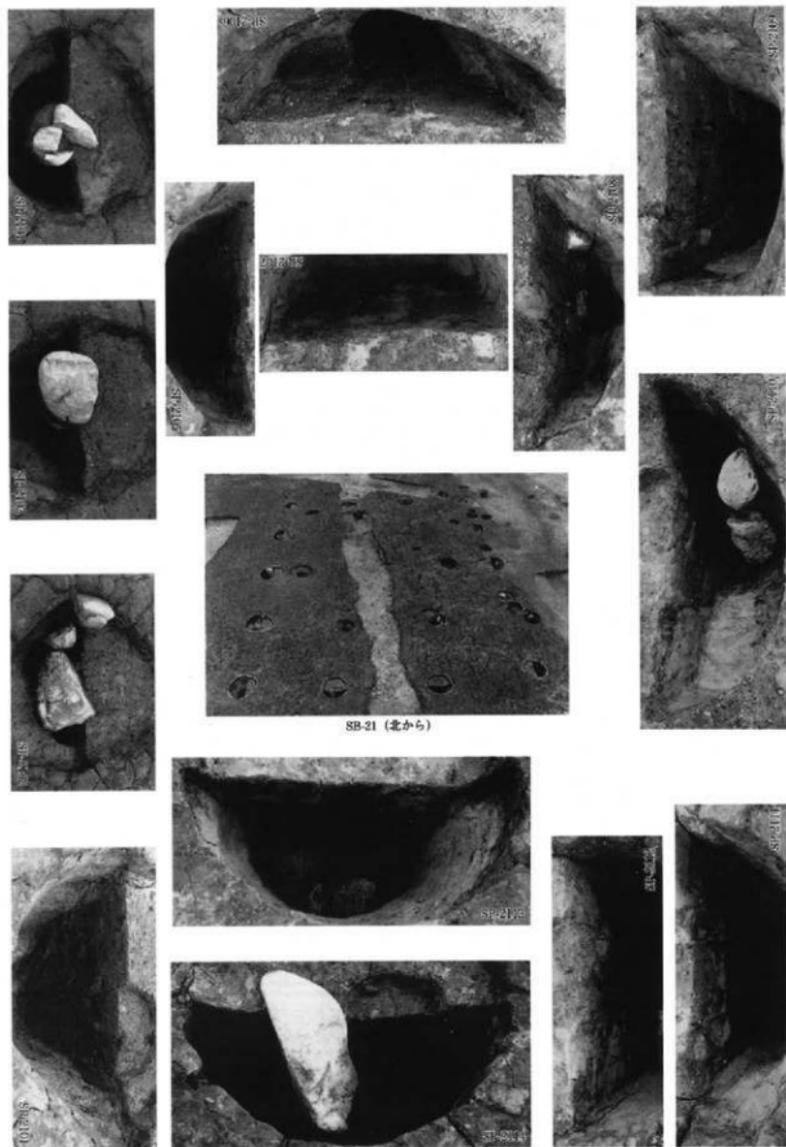


Fig.16 第21号掘立柱建物 (SB-21) 実測図



Ph.15 第21号掘立柱建物および各柱穴土層堆積状況

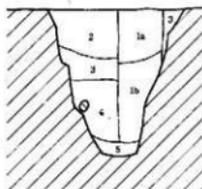
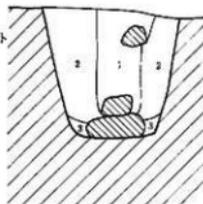
SP-2102

L=9.00m

L=9.00m

SP-2101

1. 黒褐色シルト～砂 (柱痕跡)
2. 茶褐色粘土ブロック混じり淡褐色砂～シルト
3. 暗褐色粘土混じり黄褐色粘土～シルト



- 1a. 褐色シルト～砂 (柱十混じり)
- 1b. 灰茶褐色砂～シルト (柱十混じり)
2. 灰褐色砂～シルト
3. 黄褐色粘土混じり灰褐色シルト
4. 灰褐色シルト
5. 暗褐色砂～シルト

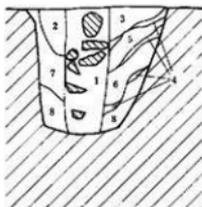
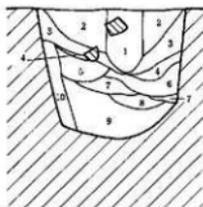
SP-2104

L=9.00m

L=9.00m

SP-2103

1. 茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
2. 茶褐色粘土～シルト
3. 黒褐色粘土～シルト
4. 灰褐色砂～シルト
5. 黒褐色粘土～シルト
6. 暗褐色砂～シルト
7. 暗灰色粘土～シルト
8. 黒褐色粘土～シルト
9. 暗褐色シルト
10. 黄褐色粘土～シルト



1. 茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
2. 茶褐色粘土～シルト
3. 黄褐色シルト～粘質土
4. 灰褐色シルト～粘土
5. 黄褐色シルト～粘質土
6. 灰褐色シルト～粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 黄褐色粘土～シルト

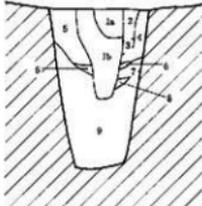
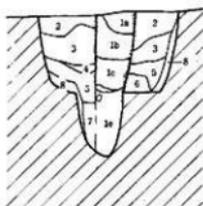
SP-2106

L=9.00m

L=9.00m

SP-2105

- 1a. 茶褐色砂 (柱痕跡)
- 1b. 茶褐色砂～シルト
- 1c. 黒褐色シルト (砂粒混じり)
- 1d. 暗灰色シルト
- 1e. 黒褐色シルト (柱痕跡?)
2. 砂粒混じり茶褐色シルト
3. 茶褐色シルト
4. 砂粒混じり茶褐色シルト
5. 砂粒・黄褐色塊混じり黒褐色シルト
6. 暗灰色シルト～砂
7. 黒色粘土
8. 灰色～黄褐色シルト



- 1a. 灰色シルト混じり赤褐色土 (柱痕跡)
- 1b. 茶褐色粘土～シルト
2. 茶褐色粘土～シルト
3. 灰褐色砂～シルト
4. 黒褐色粘土～シルト
5. 茶褐色粘土～シルト
6. 次層色砂～シルト
7. 黒褐色粘土～シルト
8. 灰褐色砂～シルト
9. 暗灰色シルト (黒褐色粘土～シルト混じり)

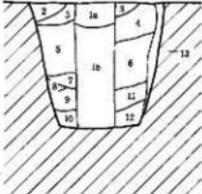
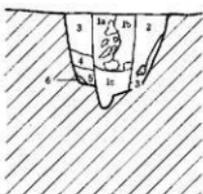
SP-2108

L=9.00m

L=9.00m

SP-2107

- 1a. 黄土塊混じり茶褐色シルト～砂
- 1b. 黄土混じり茶褐色シルト
- 1c. 暗灰色砂～シルト
2. 暗褐色シルト
3. 暗灰色シルト
4. 黒灰色シルト
5. 灰色シルト
6. 黒色粘土



- 1a. 茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
- 1b. 黒灰色シルト～砂
2. 暗褐色シルト
3. 黄褐色シルト
4. 黄褐色シルト塊混じり黒灰色シルト
5. 暗褐色シルト
6. 黄褐色シルト塊混じり黒灰色シルト
7. 暗灰色シルト
8. 黒褐色シルト
9. 黒灰色シルト
10. 黒色シルト～粘土
11. 黄褐色シルト混じり黒褐色シルト
12. 黒灰色シルト
13. 黄褐色～暗灰色シルト

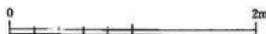
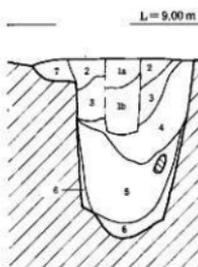


Fig.17 第21号掘立柱建物柱穴 (SP-2101～2108) 土層断面実測図

SP-2110

- 1a. 焼土混じり茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 暗灰色シルト～砂
 2. 暗茶褐色シルト
 3. 暗褐色シルト
 4. 黒色シルト
 5. 黒色粘土混じり茶褐色シルト～粘土
 6. 黒色シルト～粘土
 7. 黒色粘土 (黄褐色シルト混じり)



L=9.00m

SP-2109

- 1a. 焼土混じり茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 暗灰色砂～シルト
 1c. 黒灰色砂～シルト
 2. 焼土混じり茶褐色シルト
 3. 焼土混じり暗褐色シルト
 4. 暗灰色シルト混じり黒色粘土
 5. 暗褐色シルト
 6. 暗灰色シルト
 7. 黒色シルト～粘土

SP-2112

- 1a. 焼土混じり茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 黒褐色シルト (砂混じり)
 2. 茶褐色シルト～砂
 3. 黒褐色シルト
 4. 黄褐色シルト
 5. 黄褐色シルト塊混じり黒色粘土
 6. 黄褐色シルト (黒色粘土ブロック混じり)
 7. 黒色粘土
 8. 黄褐色シルト
 9. 黒色粘土
 10. 黄褐色シルト塊混じり黒色粘土
 11. 黒色粘土
 12. 暗灰色シルト
 13. 黒色粘土
 14. 暗灰色シルト
 15. 黒色シルト～粘土
 16. 黒色粘土混じり黄褐色シルト



L=9.00m

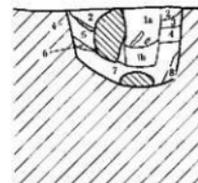
L=9.00m

SP-2111

- 1a. 焼土塊混じり茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 黒灰色シルト～砂
 2. 焼土塊混じり茶褐色シルト～砂
 3. 砂粒混じり茶褐色シルト
 4. 黒灰色シルト
 5. 暗茶褐色シルト
 6. 灰色シルト
 7. 黒褐色シルト
 8. 暗灰色シルト
 9. 黒色粘土
 10. 暗灰色シルト
 11. 黒色粘土
 12. 暗灰色粘土
 13. 黒色シルト～粘土

SP-2114

- 1a. 暗茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 単灰色シルト～砂 (柱痕跡)
 2. 黄褐色シルト塊混じり茶褐色シルト
 3. 黒色粘土
 4. 暗灰色シルト
 5. 黒色シルト～粘土
 6. 暗灰色シルト
 7. 黒色粘土～シルト
 8. 黒色粘土混じり黄褐色シルト



L=9.00m

L=9.00m

SP-2113

- 1a. 暗茶褐色シルト～砂 (柱痕跡)
 1b. 単灰色シルト～砂
 2. 茶褐色シルト～砂
 3. 暗褐色シルト
 4. 黒色粘土ブロック混じり黄褐色シルト
 5. 黄褐色シルト (砂粒混じり)
 6. 黒色粘土
 7. 暗灰色シルト
 8. 黒色粘土
 9. 暗灰色シルト
 10. 黒色シルト～粘土



Fig.18 第21号掘立柱建物柱穴 (SP-2109～2114) 土層断面実測図

6 cm、7.8cm、器高1.3cmを測る。1004はSP-2112から出土した墨書石である。長さ11.4cm、幅9.7cm、厚さ3.6cmを測る重さ532.85gの花崗岩転石の一面に「一切悪日皆成善日 一切悪宿皆成善宿 一切悪曜皆成善曜 一切悪時皆成善時。」の4行の墨書がみられる。09はSP-2113から出土した土師質の土鍋で口径32.3cmを測る。以上のほか、各柱穴からはスサを含んだ焼土塊が出土している。中には径1cm前後の竹の痕跡がみられることから、この焼土塊は礎土と考えられる。

以上から、本建物は桁行7.52～7.77m、梁行5.75m前後の4間×3間の欄柱のS-1.5°-Wの主軸をとる側柱の建物で、15世紀のものといえよう。

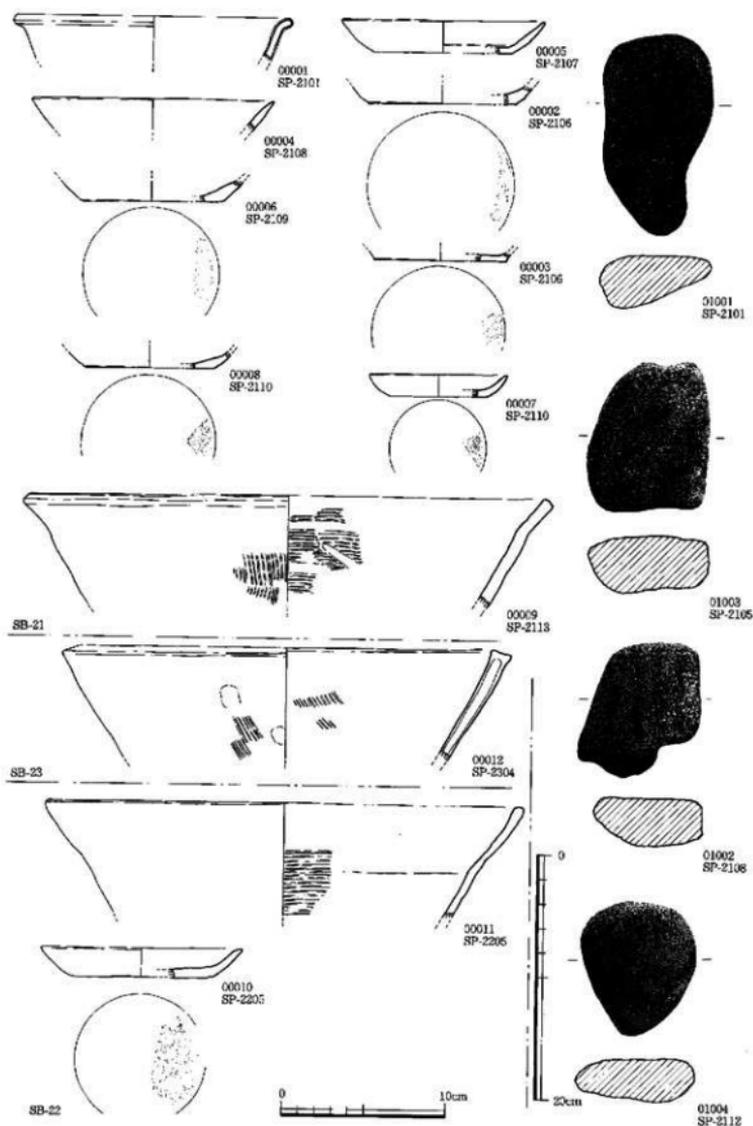
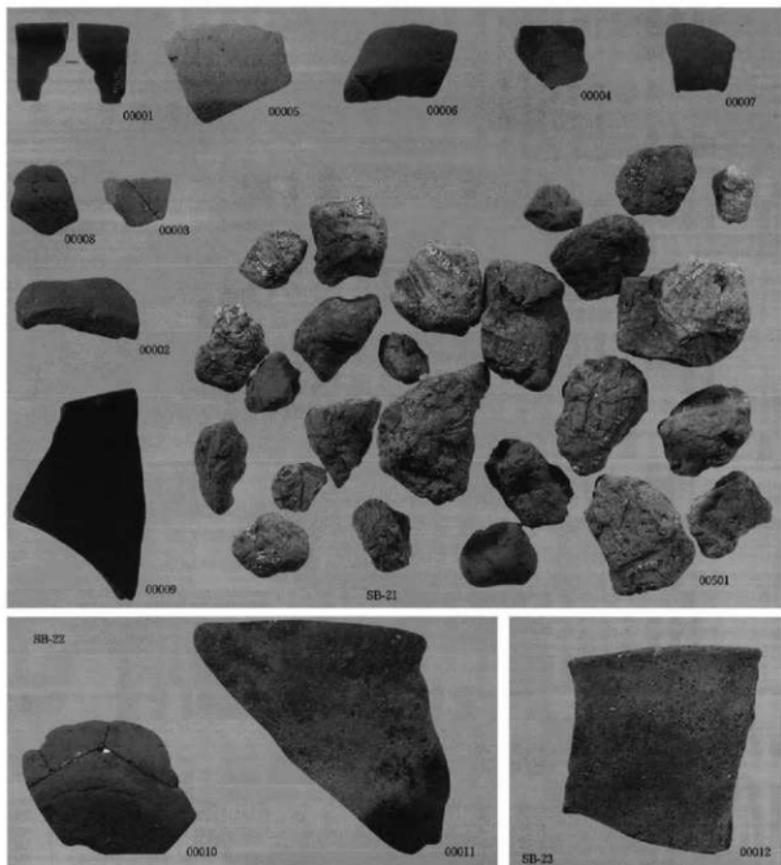


Fig.19 第21～23号掘立柱建物出土遺物実測図



Ph.16 第21～23号掘立柱建物出土遺物

第22号掘立柱建物 (SB-22) (Fig.19・20, Ph.16・17)

本建物は東側建物群の中央部に位置し、第6・7号溝および第23号建物を切り、第21・24・25号建物と切り合い関係にあるが、柱穴の切り合い関係がなく前後関係はわからない。SP-2201～2208の8個の柱穴を検出し、1間×2間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径30～40cmを測る円形を呈し、30～67cm遺存している。柱は柱痕跡を確認できなかったが、柱穴掘り方の形状から径15cm前後の円柱であったと考えられる。柱間は東側桁行が324cm・318cm、西側桁行が302cm・350cmで、北側梁行はSP-2201・2202間の柱穴がなく420cmで、東側梁行は215cm・202cmを測る。なお、SP-2204は横持柱用柱穴と考えられ、東西の柱間は196cm・203cmを測る。

本建物からはSP-2203・2205・2206の3個の柱穴掘り方から遺物が出土した。10・11はSP-2205か

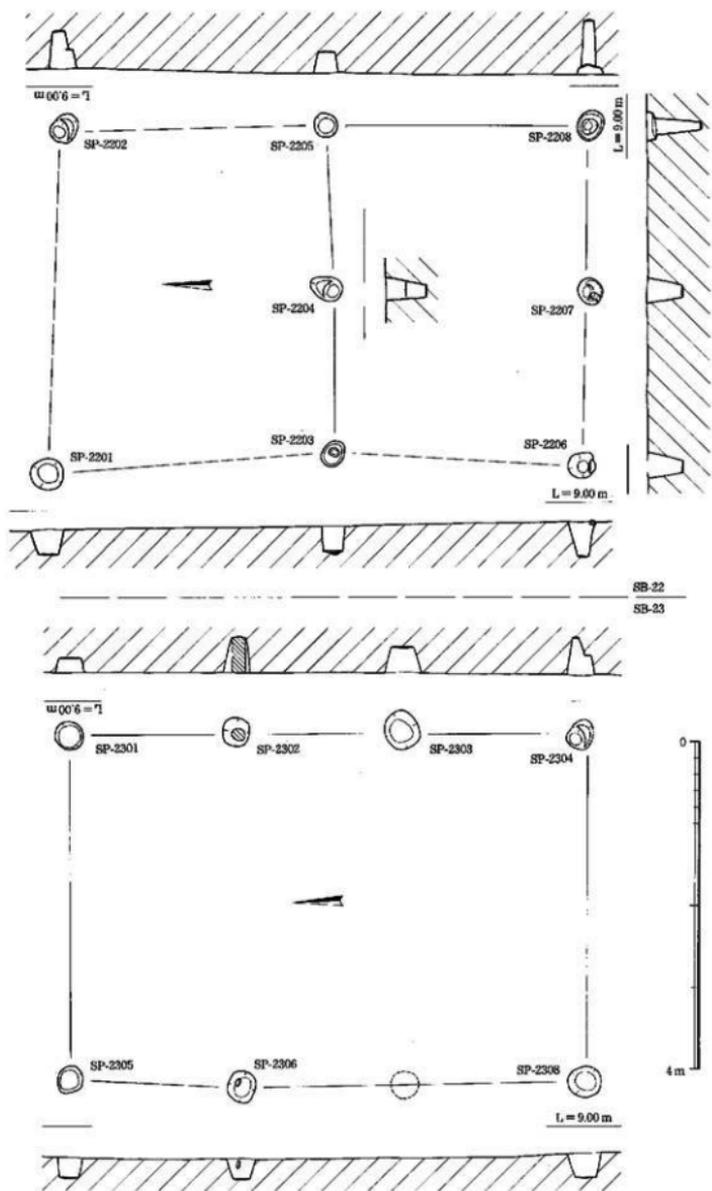
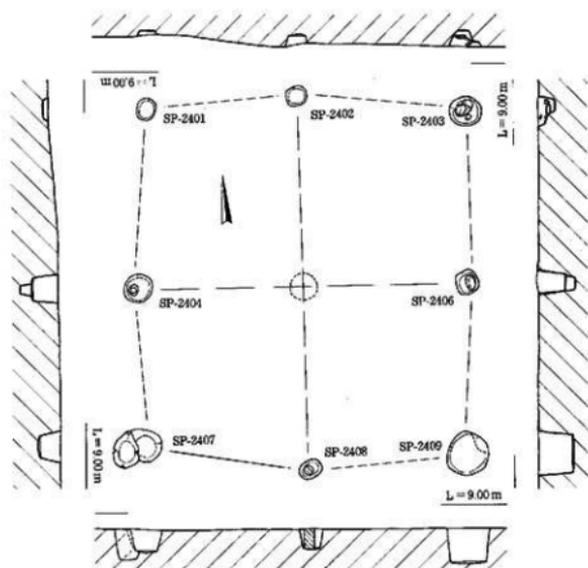


Fig.20 第22·23号掘立柱建物 (SB-22·23) 实测图



SB-24

SB-26

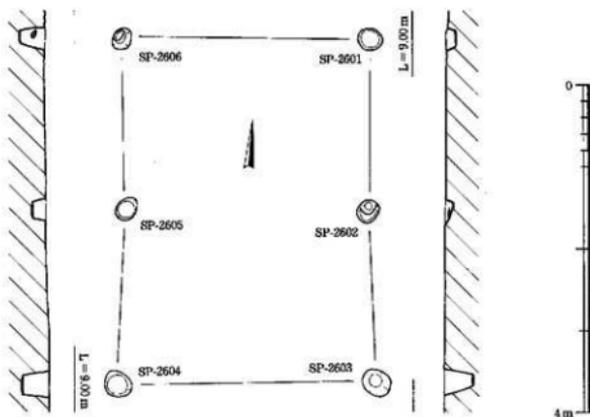


Fig.21 第24·26号独立柱建筑物 (SB-24·26) 实测图

ら出土した土師器で、10は糸切り底の皿、11は土鍋である。口径12.2cm・29.2cm、底径8cm、器高1.8cmを測る。以上の3柱穴からは、糸切り底の土師器の細片が出土した。

SP-2204・2207は棟持ち柱穴と考えられ、N-1.8°-Wの主軸方位をとる桁行6.42m、梁行4.2mの1間×2間の建物で、15世紀のものといえよう。

第23号掘立柱建物 (SB-23) (Fig.19・20, Ph.16・17)

本建物は東側建物群の中央に位置し、第6・7号溝を切り、第22号建物に切られている。第24・25号建物とも切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がなく前後関係はわからない。SP-2301

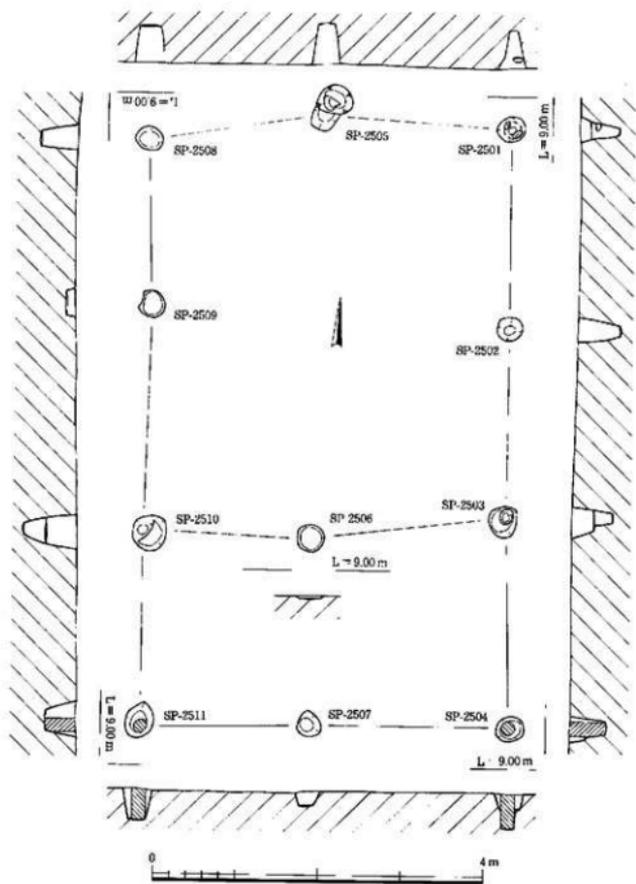
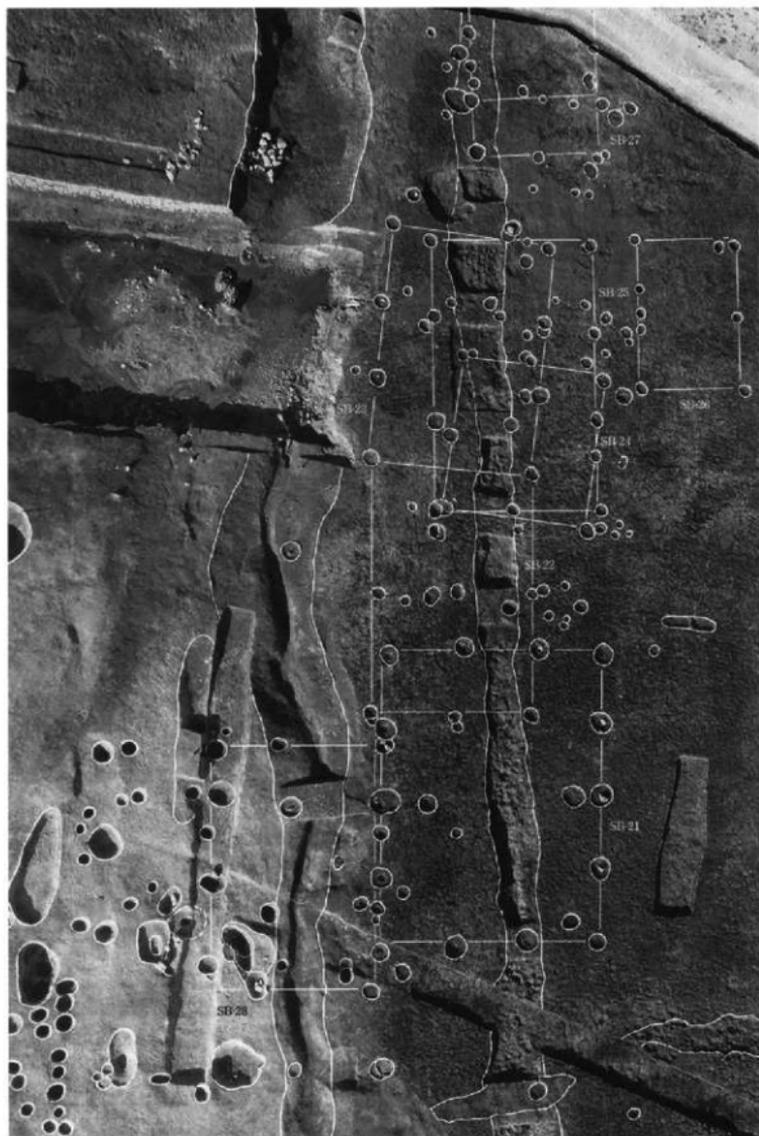


Fig.22 第25号掘立柱建物 (SB-25) 実測図



Ph.17 東側建物群

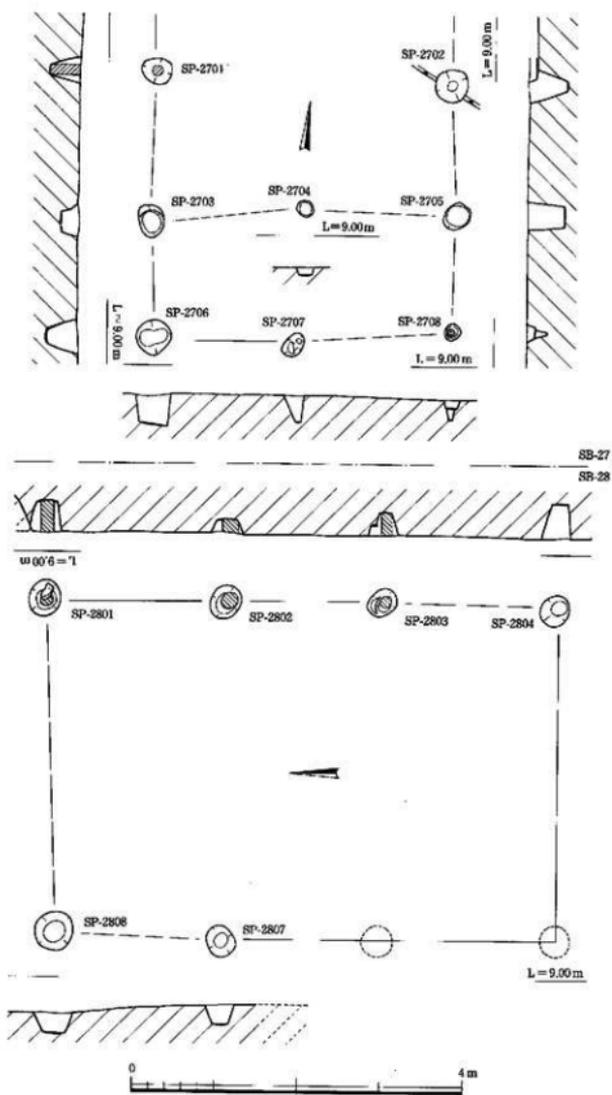


Fig.23 第27·28号掘立柱建物 (SB-27·28) 実測図

～2306・2308の7個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴掘り方は径35cm前後を測る不整円形を呈し、15～43cm遺存している。柱はSP-2302の柱痕跡から径16cm前後の円柱と考えられる。柱間は桁行東側が204cm・198cm・226cm、西側が210cm・198cm・219cmで、梁行北側は420cm、東側は424cmを測る。

本建物からは、SP-2302で土師質の上鍋（鉢か）1点が出土した。口径27.5cmを測る。

以上から、本建物はN-2.5°-Eの主軸方位をとる梁行4.2m、桁行6.28mを測る1間×2間の隅柱の建物で、14世紀から15世紀のものといえよう。

第24号掘立柱建物（SB-24）（Fig.21, Ph.17）

本建物は東側建物群の中央部に位置し、第7号溝を切り、第25号建物に切られている。第22・23号建物と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がないため前後関係はわからない。SP-2401～2404・2406～2409の8個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴掘り方は径25～50cmの不整円形から隅丸方形を呈し、6～45cm遺存している。柱間は東側桁行が214cm・212cm、西側が223cm・193cm、梁行北側が184cm・206cm、南側が196cm・191cmを測る。本建物の各柱穴から遺物は出土しなかった。

本建物は、N-4.5°-Eの主軸方位をとる梁行4.1m、桁行4.5mの2間×2間の建物であるが正方形に近く、総柱の倉庫と考えられる。室町時代のものか。

第25号掘立柱建物（SB-25）（Fig.22, Ph.17）

本建物は東側建物群の中央に位置し、第7号溝および第24号建物を切っている。第22・23号建物と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がなく、前後関係はわからない。SP-2501～2511の11個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴掘り方は径30～40cmの不整円形を呈し、12～65cm遺存している。柱は柱痕跡から径15～19cmの円柱を用いたと考えられる。柱間は桁行東側が243cm・230cm・258cm、西側が210cm・266cm・239cm、梁行北側が214cm・278cm、南側が204cm・242cmを測り、南側1間に東柱穴があり、SP-2506・2507間は226cmを測る。本建物のSP-0041から黒曜石削片1点が出土したのみで、時期を決定できる遺物は出土しなかった。

本建物はN-3.7°-Wの主軸方位をとる梁行4.46m、桁行7～7.15mの2間×3間の南隅1間の間仕切りをもつ建物で、14～15世紀のものといえよう。

第26号掘立柱建物（SB-26）（Fig.21, Ph.17）

本建物は、東側建物群の北側の第25号建物の東に位置している。SP-2601～2606の6個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴掘り方は径25～35cmの不整円形を呈し、10～36cm遺存している。柱間は桁行東側が204cm・214cm、西側が214cm・212cm、梁行北側が302cm、南側が314cmを測る。SP-2605からは土師質土鍋の胴部細片1点が出土したが、図化できなかった。

本建物はN-4.7°-Wの主軸方位をとる梁行3.02～3.14m、桁行4.15～4.25mの1間×2間の隅柱の建物で、室町時代のものといえよう。

第27号掘立柱建物（SB-27）（Fig.23, Ph.17）

本建物は東側建物群の北端に位置し、第6・7号溝を切っている。北へ1間延びると考えられるが、調査対象外であるため確認できなかった。SP-2701～2708の8個の柱穴を検出し、建物としてまとめ

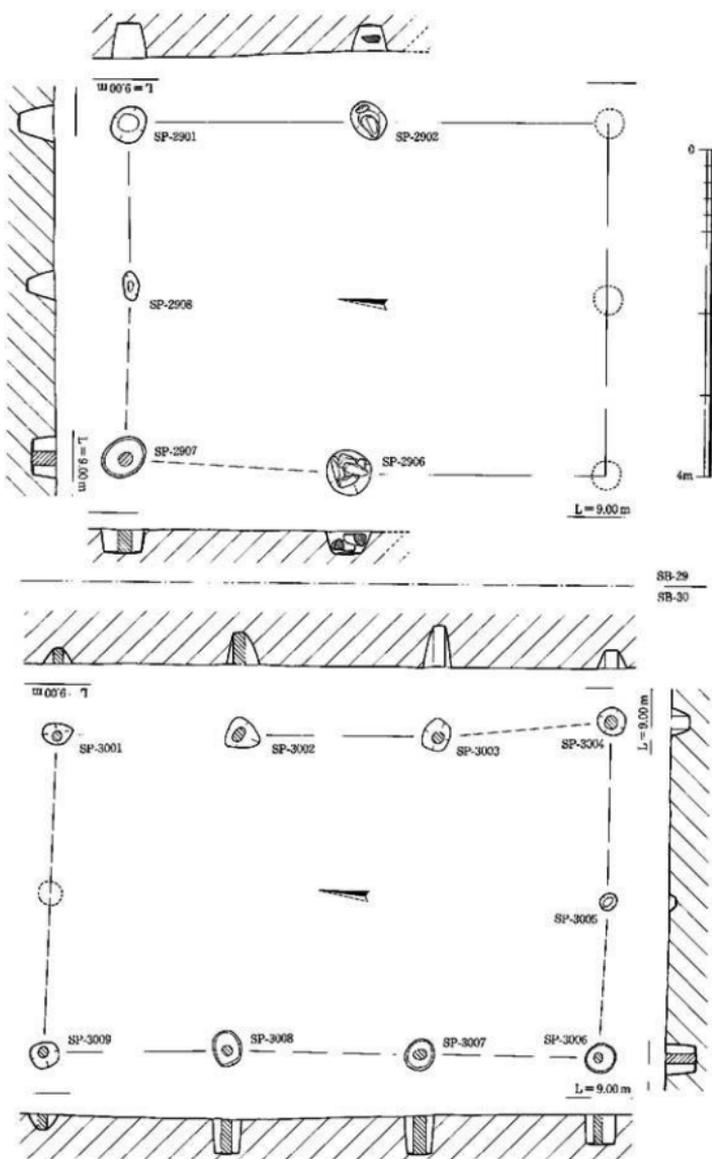
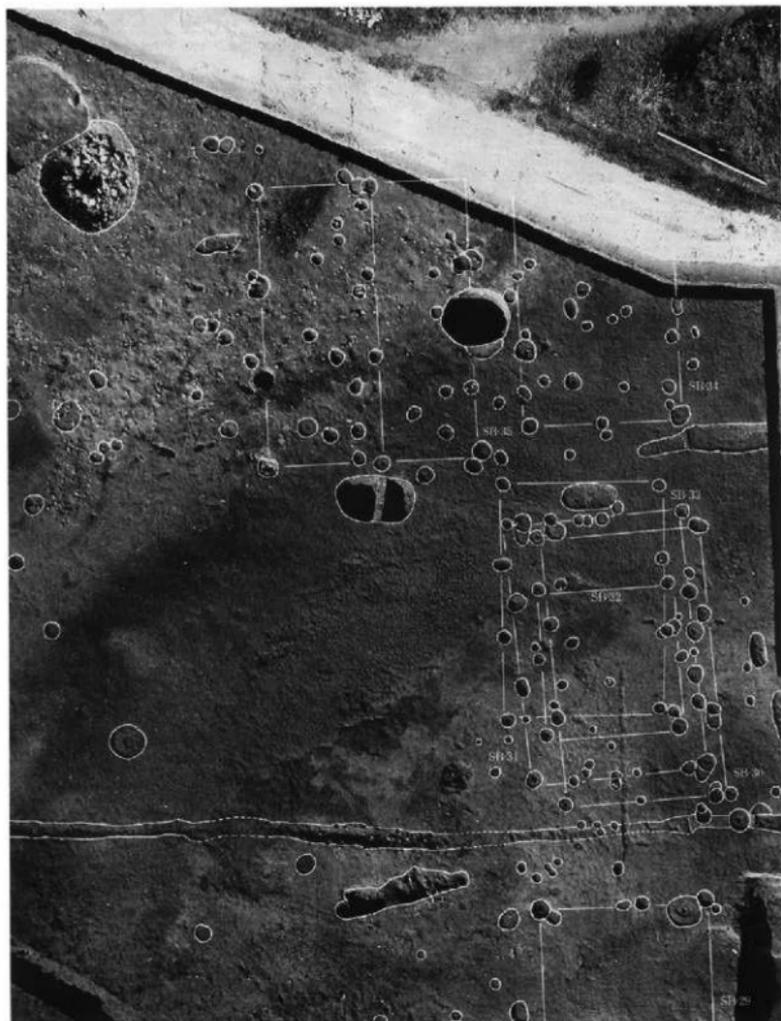


Fig.21 第29·30号掘立柱建物 (SB-29·30) 实测图

た。柱穴掘り方は径20～40cmの円形を呈し、23～48cm遺存している。柱間は桁行東側が160cm・144cm、西側が186cm・144cm、梁行南側が175cm・185cmを測り、南側1間に東柱穴があり、SP-2704・2705間は161cmを測る。

本建物のSP-2702・2704～2706の4個の柱穴からは、少量の遺物が出土した。16はSP-2701から出



Ph.18 西側建物群

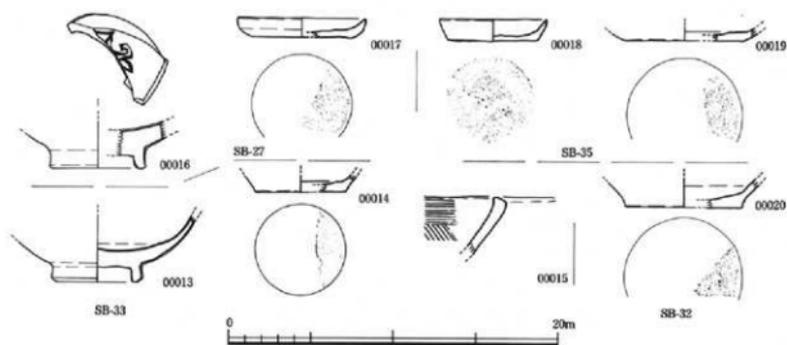
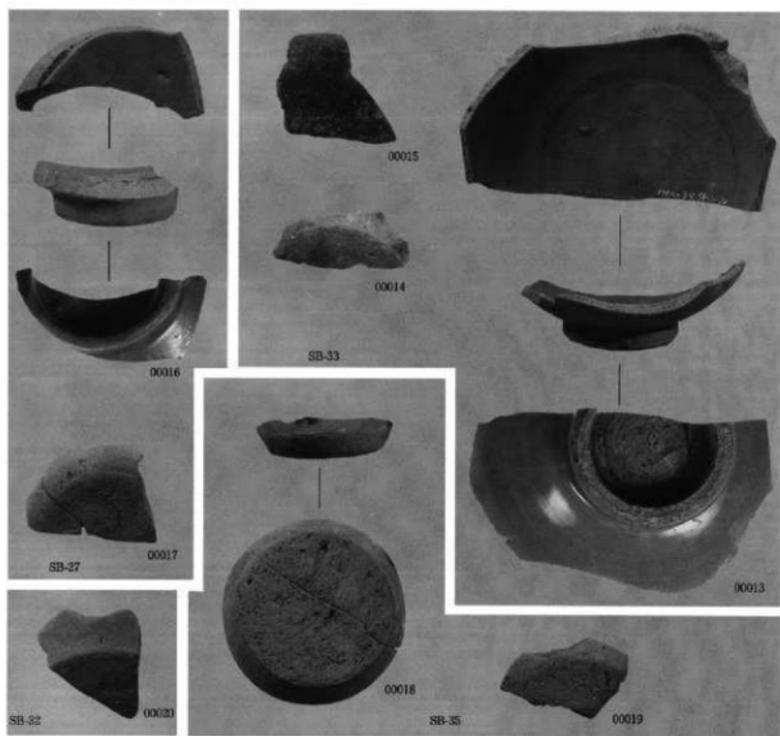
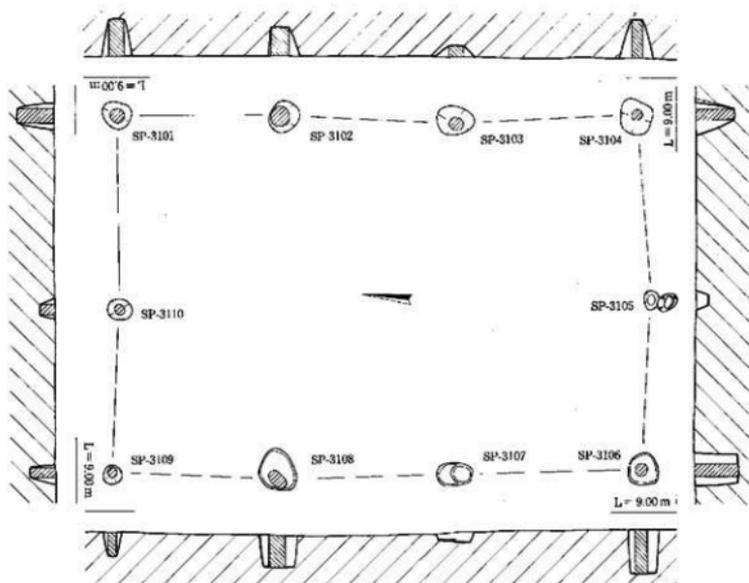


Fig.25 第27・32・33・35号掘立柱建物出土遺物実測図



Ph.19 各掘立柱建物出土遺物



SB-31
SB-32

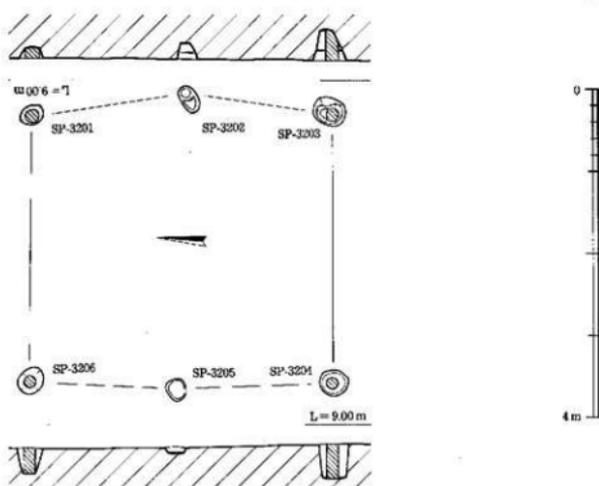


Fig.26 第31·32号掘立柱建筑物 (SB-31·32) 实测网

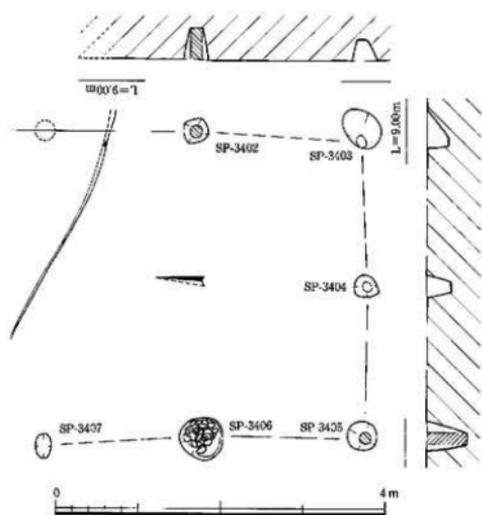
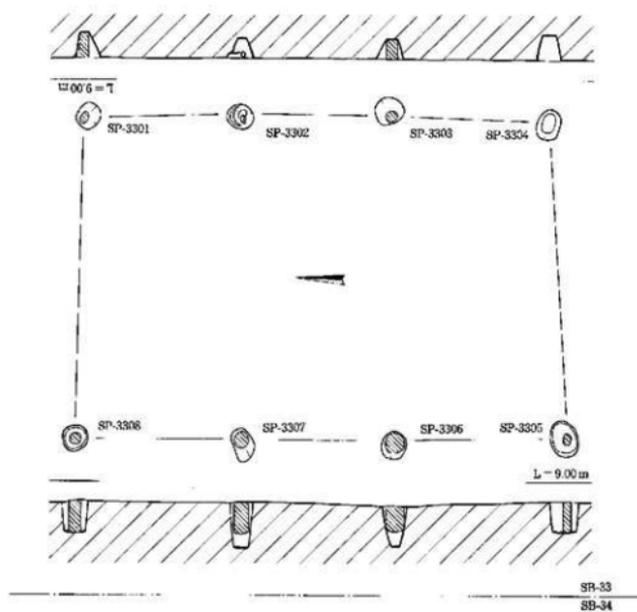


Fig.27 第33・34号挿立柱建物 (SB-33・34) 実測図

土した竜泉窯青磁碗の底部で、見込みに文様がみられる。底径5.8cm。7はSP-2707から出土した糸切り底土師器皿で、口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.2cmを測る。他の柱穴から出土した遺物としては、土師器坏・皿の細片がある。

以上から、本建物はN-6.5°-Wの主軸方位をとり、南側1間に間仕切りをもつ梁行3.6m、桁行4.6m前後の2間×3間の建物で、15世紀のものといえよう。

第28号掘立柱建物 (SB-28) (Fig.23, Ph.17)

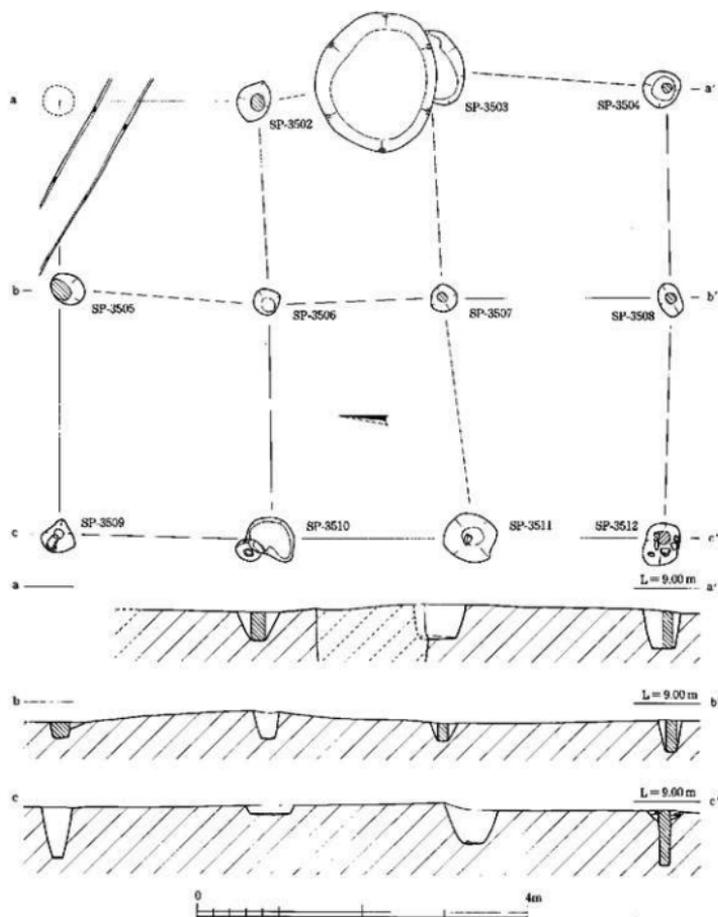


Fig.28 第35号掘立柱建物 (SB-35) 実測図

本建物は東側建物群の南端に位置し、第6・2号溝を切り、西側桁行は攪乱によって削平されている。第21号建物と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がないため前後関係はわからない。SP-2801～2804・2807・2808の6個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱掘り方は径35～45cmを測る円形を呈し、18～42cm遺存している。柱は柱痕跡から径12～18cmの円柱を用いていたと考えられる。柱間は桁行東側が222cm・190cm・210cm、西側が220cm、梁行406cmを測る。本建物の各柱穴から遺物は出土しなかった。

本建物はN-0.5°-Eの主軸方位をとり、梁行4.06m、桁行6.12mの1間×3間の側柱の建物で、他の東側建物群との関連から15世紀頃のものといえよう。

第29号掘立柱建物 (SB-29) (Fig.24, Ph.18)

本建物は西側建物群の南端に位置し、第6号溝を切っている。SP-2901・2902・2906～2908の5個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。本建物南側は第6号溝整地層上に位置しており、調査の不手際から柱穴の確認をしていないが、桁行3間となる可能性が高い。柱穴掘り方は径40～56cm前後の円形を呈し（梁行間柱穴は小さく不整形を呈す）、28～44cm遺存している。柱は柱痕跡から径14cm前後の円柱を用いたと考えられる。第6号溝整地上の柱穴は、柱をのせるために石を置いている。柱間は桁行東側が292cm、西側が272cm、梁行が190cm・210cmを測る。本建物柱穴から遺物は出土しなかった。

本建物はN-6°-Wの主軸方位をとる梁行4m、桁行8.7m前後の2間×3間の側柱の建物で、室町時代のものといえよう。

第30号掘立柱建物 (SB-30) (Fig.24, Ph.18)

本建物は西側建物群の中央部に位置し、第31～33号建物および第9号溝と切り合い関係にあるが、本建物柱穴との切り合い関係がないため前後関係はわからない。SP-3001～3009の9個の柱穴を検出し、建物としてまとめた。柱穴掘り方は径21～38cmの円形・隅丸方形を呈し、10～50cm遺存している。柱は柱痕跡から径10～16cmの円柱を用いたと考えられる。本建物の各柱穴から遺物の出土はなかった。

本建物はN-7°-Wの主軸方位をとる梁行4.1m、桁行6.87mの2間×3間の側柱の建物で、室町時代のものといえよう。

第31号掘立柱建物 (SB-31) (Fig.26, Ph.18)

本建物は西側建物群の中央に位置し、第9号溝を切り、第30・32・33号建物と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がないため前後関係はわからない。SP-3101～3110の10個の柱穴を検出し、2間×3間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径17～45cmの隅丸方形（一部、円形）を呈し、13～54cm遺存している。柱間は桁行東側が197cm・216cm・220cm、西側が218cm・224cm・220cm、梁行北側が198cm・236cm、南側が216cm・208cmを測る。柱は柱痕跡から径14～22cmの円柱を用いたと考えられる。SP-3107から黒曜石削片が出土したのみで、時期決定できる遺物は出土しなかった。

本建物はN-6°-Wの主軸方位をとり、梁行4.35m、桁行6.3～6.4mの2間×3間の側柱の建物で、室町時代のものといえよう。

第32号掘立柱建物 (SB-32) (Fig.25・26, Ph.18・19)

本建物は西側建物群の中央部に位置し、第30・31・33と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合

い関係がないため前後関係はわからない。SP-2201～2206の6個の柱穴を検出し、1間×2間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径24～39cmの円形を呈し、8～41cm遺存している。柱は柱痕跡から径15cm前後の円柱を用いたと考えられる。柱間は桁行東側が189cm・180cm、西側が180cm・190cmで、梁行北側が324cm、南側が326cmを測る。SP-3203からは糸切り底の土師器皿1点が出土した(20)。底径7.2cm。

本建物はN-5°-Wの主軸方位をとる梁行3.25m前後、桁行3.6～3.65mの1間×2間の獨柱の建物で、15世紀頃のものか。

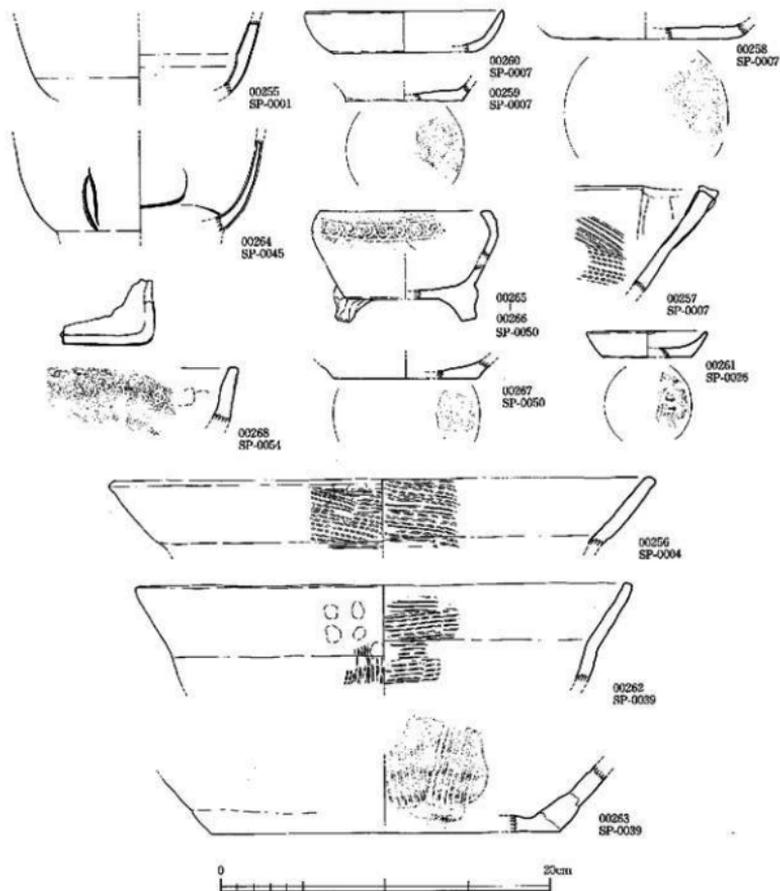
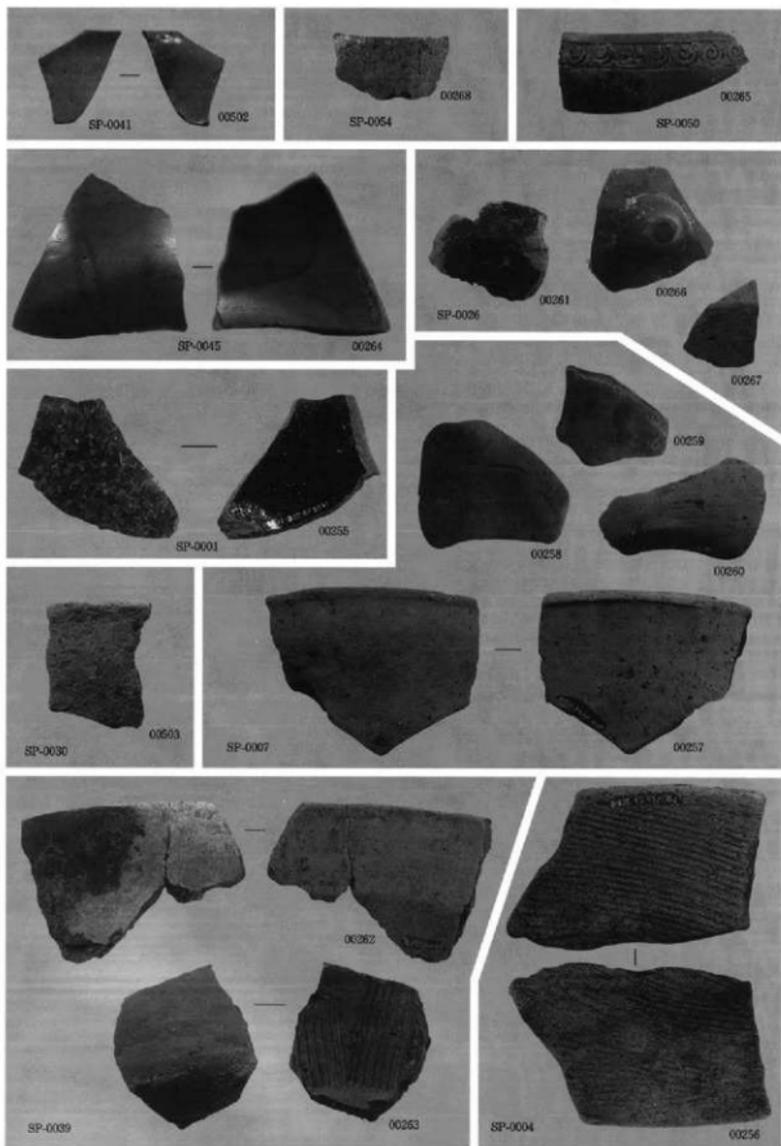


Fig.29 各柱穴出土遺物実測図



Ph.20 各柱穴出土遺物

第33号掘立柱建物 (SB-33) (Fig.25・27, Ph.18・19)

本建物は西側建物群の中央部に位置し、第30～32号建物と切り合い関係にあるが、柱穴間の切り合い関係がないため前後関係はわからない。SP-3301～3308の8個の柱穴を検出し、1間×3間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径24～44cmの不整形円形を呈し、24～56cm遺存している。柱間は桁行東側が193cm・180cm・192cm、西側が209cm・188cm・202cmで、梁行北側が390cm、南側が386cmを測る。本建物のSP-3302・3307の柱穴から少量の遺物が出土した。13～15はいずれもSP-3307から出土したものである。13は竜泉窯青磁碗で、底径5.6cmを測る。14は糸切り底の土師器皿で、底径5.6cmを測る。15は土師質土鍋の口縁片である。

本建物はN-2.5°-Wの主軸方位をとり、梁行3.86～3.9m、梁行5.66～6mの1間×3間の掘立柱の建物で、14～15世紀のものといえよう。

第34号掘立柱建物 (SB-34) (Fig.27, Ph.18)

本建物は西側建物群の北端に位置し、調査対象地外へ延びている。SP-3402～3407の6個の柱穴を検出し、2間×2+ α 間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径18～53cmの不整形円形を呈し、25～48cm遺存している。柱は柱痕跡から径15cm前後の円柱を用いたと考えられる。柱間は桁行東側が202cm、西側が200cm・190cmで、梁行南側は176cm・184cmを測る。SP-3403から石製品が出土したのみで、時期決定できる遺物は出土しなかった。

本建物はN-4°-Wの主軸方位を梁行3.6mの2間×2+ α 間の建物で、室町時代のものである。

第35号掘立柱建物 (SB-35) (Fig.25・28, Ph.18・19)

本建物は西側建物群の北西端に位置し、攪乱によって切られているほか、北東端の柱穴1個は本調査区未掘部に位置するため確認できなかった。SP-3502～3512の11個の柱穴を検出し、2間×3間の建物としてまとめた。柱穴掘り方は径32×60cm前後の隅丸方形を呈し、12～68cm遺存している。柱は柱痕跡から径12～24cmの円柱を用いたと考えられる。桁行東側が140cm・212cm・288cm、西側が258cm・245cm・230cmで、梁行北側が230cm・297cm、南側が257cm・292cmを測る。SP-3505～3508間は254cm・200cm・278cmを測る。本建物のSP-3503から少量の遺物が出土した。18・19は糸切り底の土師器皿で、口径6.6cm、底径5.4cm・7cm、器高1.34cmを測る。以上のほか、土師器土鍋片が出土した。

本建物はN-5°-Wの主軸方位をとり、梁行5.28～5.47m、梁行7.34mの2間×3間の柱柱の建物で、15世紀頃のものといえよう。

その他の柱穴出土遺物 (Fig.29, Ph.20)

SP-0001など31個の建物としてまとめることができなかった柱穴から、それぞれ少量の糸切り底の土師器の薄片を中心とした遺物が出土した。

0255は天目?、0264は竜泉窯青磁碗。0265・0266はSP-0050出土で、同一個体と考えられる瓦質土器の香炉で、口縁下の沈線下に巴文のスタンプがみられる。0268は土師質で香炉と考えられる。0258～0261は糸切り底の土師器皿で、0261は口径7.4cm、底径5.4cm、器高1.55cmを測る。0257は土師質、0263は陶器の鐏鉢。0256・0262は土師質の土鍋で、口径33.5cm・30.4cmを測る。

各柱穴の出土遺物は14～16世紀の遺物で、15世紀後半のものが多く、東西建物群各柱穴出土遺物と一致している。本調査区での集落は、14世紀に形成され17世紀初頭頃まで存在したと考えられる。

2) その他の遺構と出土遺物

第1号井戸 (SE-01) (Fig.30・31, Ph.21・22)

本井戸は本調査区検出遺構の最西北端に位置し、西側建物群の第35号建物の西にあたり、標高8.9m前後の黄褐色砂礫の面で検出した。掘り方は径2.6～2.85mの平面形不整形円形を呈し、皿状をなし、65cm遺存している。径60～70cmを井筒とし、そのまわりに拳大の河原礫を底から25～30cm集積し、その上の20cm前後の角礫を囲むように2～3段積み構築している。他の遺構の遺存状況から、本井戸は50cm以上の削平を受けているとは考えられず、井戸とするより、共同生活用の水場的な性格をもつと考えられる。

本井戸からはごく少量の遺物が出土した。0229は竜泉窯青磁碗で、口径13.6cm、底径4.8cm、器高6.5cmを測る。0228は糸切り底の土師器皿で、底径6cmを測る。以上のほか、糸切り底の土師器細片がある。

以上から、本井戸は共同生活用の水場的な性格をもち、15世紀前後のものといえよう。

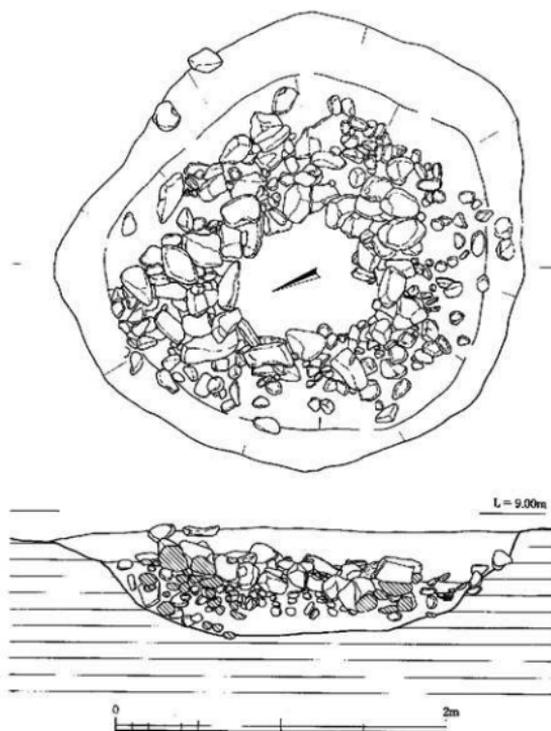
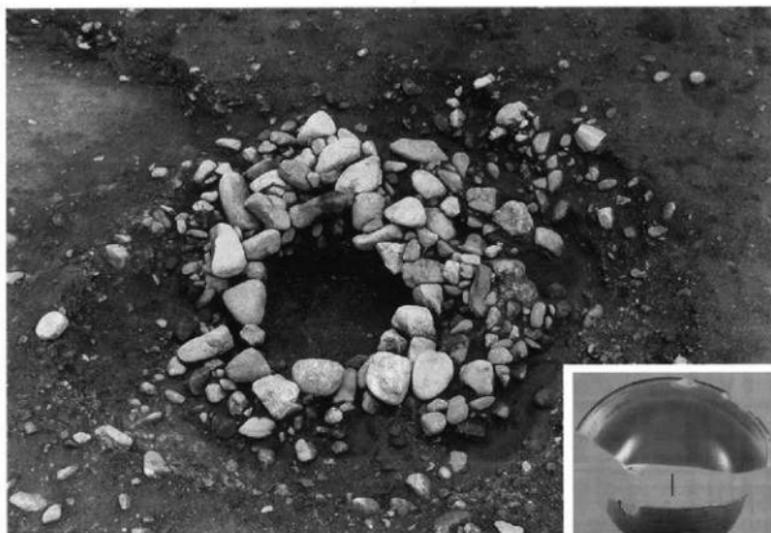


Fig.30 第1号井戸 (SE-01) 実測図

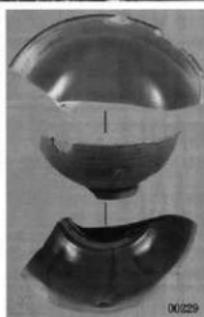


Ph.21 第1号井戸完掘状況

土壌 (SK) と出土遺物 (Fig.31~36, Ph.23~25)

本調査区では中世の土壌18基を検出したが、ここでは各土壌と出土遺物を簡単にみていく。

第2号土壌 (Fig.31, Ph.25) 本土壌は、I区中央部から東寄りの第1号溝の北側に第1号溝と平行した形で検出した。本土壌からは少量の遺



Ph.22 第1号井戸出土青磁

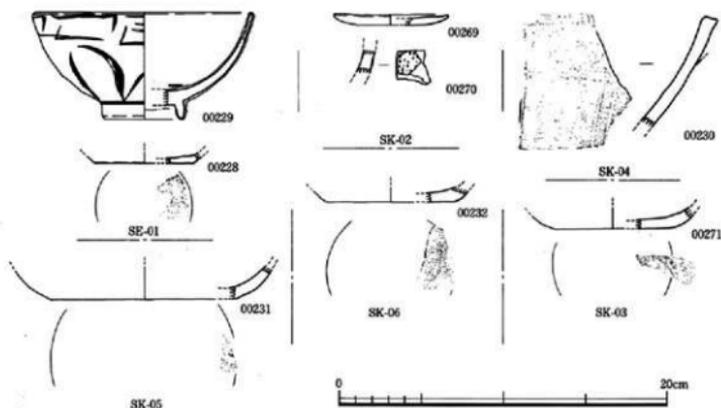


Fig.31 各遺構出土遺物実測図 (1)

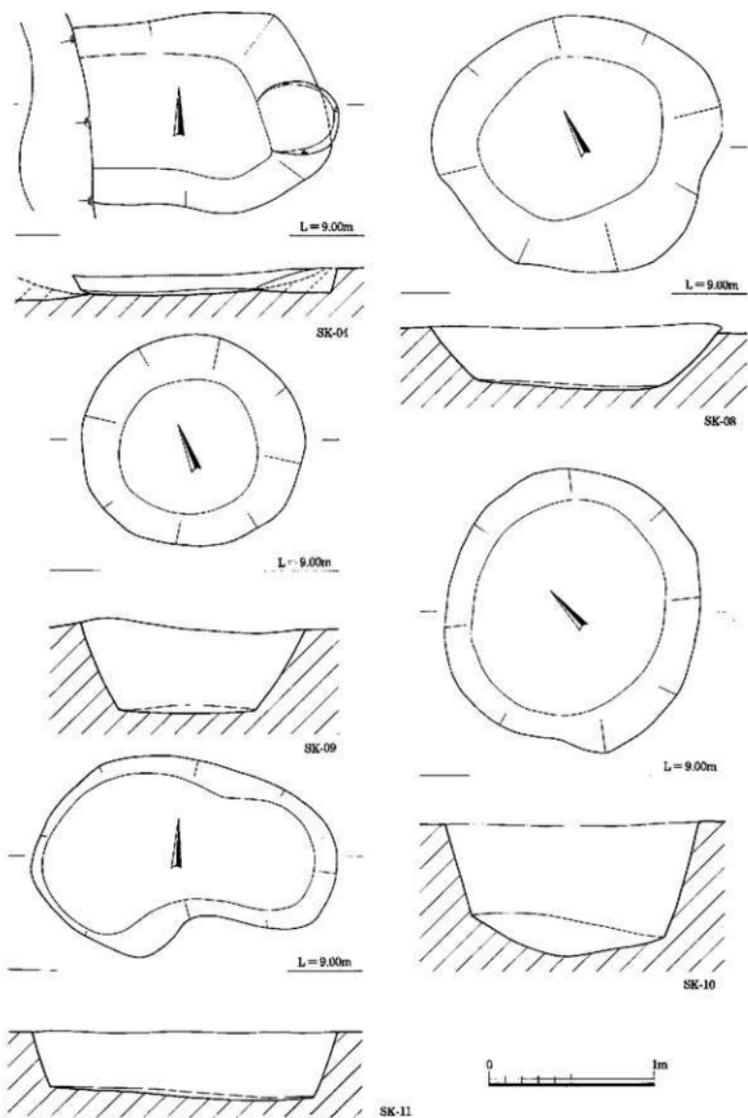


Fig.32 第4·8~11号土坑 (SK-04·08~11) 实测图

物が出土した。0269は土師器皿で口径7cm、器高0.6cmを測る。0270は粉粒沙器の細片で碗か。

第3号土壙 (Fig.31) 本土壙はI区中央部から東奇りに位置し、長軸1.7m、短軸1mの不整形を呈し、皿状をなす土壙で、少量の遺物が出土した。0271は糸切り底の土師器皿である。

第4号土壙 (Fig.31・32, Ph.25) 本土壙はI区中央部に位置し、第2号溝を切っているが、調査の不便で逆に掘削を行なった。長軸2m弱、短軸1.1mの平面形隅丸長方形を呈し、15cm前後遺存している。土壙墓状をなし、少量の遺物が出土した。0230は土師質の土鍋、0579～0581は青花の白磁碗、0582は褐釉陶器である。

第5号土壙 (Fig.31) 本土壙はI区中央部南側の第28号建物と重なる位置で検出し、少量の遺物が出土した。0231は糸切り底の土師器皿片である。

第6号土壙 (Fig.31, Ph.25) 本土壙は本調査区南側の第6号溝上に位置し、長軸2.7m、幅0.8mで溝状をなし、少量の遺物が出土した。0232は糸切り底の土師器である。

第7号土壙 (Fig.33・34, Ph.23・24) 本土壙は、I区中央部南の第6号溝整地層上に位置している。長軸1.3m、短軸1.1mの不整形の平面形を呈し、30cm遺存し、皿状をなしている。床より少し上に、20cm²前後の角礫をL字状に配列している。石は抜きさらされた可能性が高く、本来は方形または長方形に囲って配置されていたと考えられる。本土壙からは、少量であるが副葬とも考えられる遺物が出土した。0223は灰釉陶器小壺の完形品で、口径2.6cm、底径3.5cm、器高2.82cmを測る。0234は糸切り底の土師器小皿で、口径8.05cm、底径7cm、器高1.5cmを測る。0235は瓦経本磚で、長さ6.8cm、幅6.6cmの破片で、厚さ1.9cmを測る。

本土壙は墓と考えられるが、心礎的なものも可能性もある。15～16世紀のものか。

第8号土壙 (Fig.32・36, Ph.25) 本土壙は、I区中央部南側の第6号溝整地層上に位置している。径1.6m前後の不整形を呈し、40cm遺存し、床はほぼ平坦で、断面形は鉢状をなしている。本土壙からは少量の遺物が出土した。0236は土師器皿で、外底は回転ヘラケズリが施されている。口径13.6cm、底径9.1cm、器高2.1cm。0237は土師器杯で、口径13.2cmを測る。この2点は第6号溝の遺物が上がったものと考えられる。0238は土鍋片である。

第9号土壙 (Fig.32) 本土壙はI区中央部に位置し、第3・6号溝を切っている。径1.3m前後の円形を呈し、53cm遺存している。床面はほぼ平坦で、断面は鉢状をなしている。

第10号土壙 (Fig.32) 本土壙は、I区中央部の第6号溝整地層面で検出し

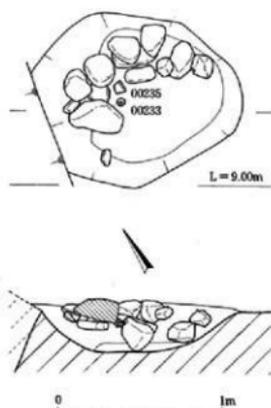
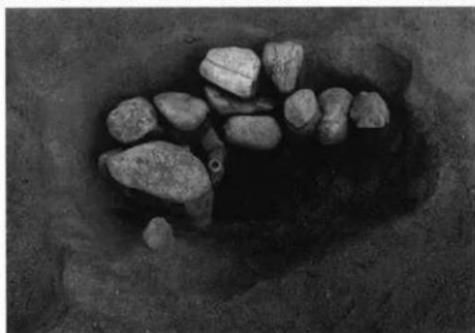


Fig.33 第7号土壙 (SK-07) 実測図



Ph.23 第7号土壙遺物出土状況

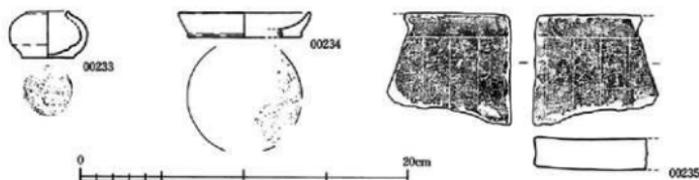


Fig.34 第7号土壌出土遺物実測図



Ph.24 第7号土壌出土遺物

た。径1.6m前後の円形を呈し、80cm強遺存している。床近くは湧水が激しく、井戸とも考えられる。本土壌からは、少量の糸切り底の土師器細片が出土した。

第11号土壌 (Fig.32・36, Ph.25) 本土壌は、本調査区中央部の第6号溝整地層面で検出した。長軸1.8m、短軸1.2m前後の不整楕円形を呈し、42cm遺存している。床面はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立上っている。本土壌からは少量の遺物が出土した。0239～0241は糸切り底の土師器皿で、0240・0241は口径6.8cm・8.4cm、底径4.2cm・6cm、器高1.65cm・1.6cmを測る。0241は内底・外底から焼成後3個の穿孔が行われており、小形の土面状をなすか。

第12号土壌 (Fig.35) 本土壌は調査区中央部北側の西側建物群 (第30～33号建物) の東に、建物群に沿った形で位置している。長軸0.9m、短軸0.35mの長楕円形を呈し、9cm遺存し、皿状をなしている。建物の雨落ち溝とも考えられる。

第13号土壌 (Fig.35・41) 本土壌は、I区西側中央に位置している。径85～90cmの円形を呈し、33cm前後遺存している。断面は鉢状をなし、床密着の形で土師器甕1点 (0242) が出土した。中世の土壌として扱ったが、土器に傷みがなく、覆土も他の土壌と異なることから古墳時代の土壌とも考えられる。

第14号土壌 (Fig.35・36, Ph.25) 本土壌はI区中央部に位置し、第6号溝を切っている。長軸1.53m、短軸1.2mの楕円形を呈し、65cm遺存している。床面は平坦で、壁は開き気味に立ち上がっている。本土壌からは少量の遺物が出土した。0243は青白磁皿で、口径13.4cm、器高2.2cmを測る。0244は同安楽青磁碗で、0245は糸切り底の土師器皿である。0245は口径7cm、底径6cm、器高1.25cmを測る。

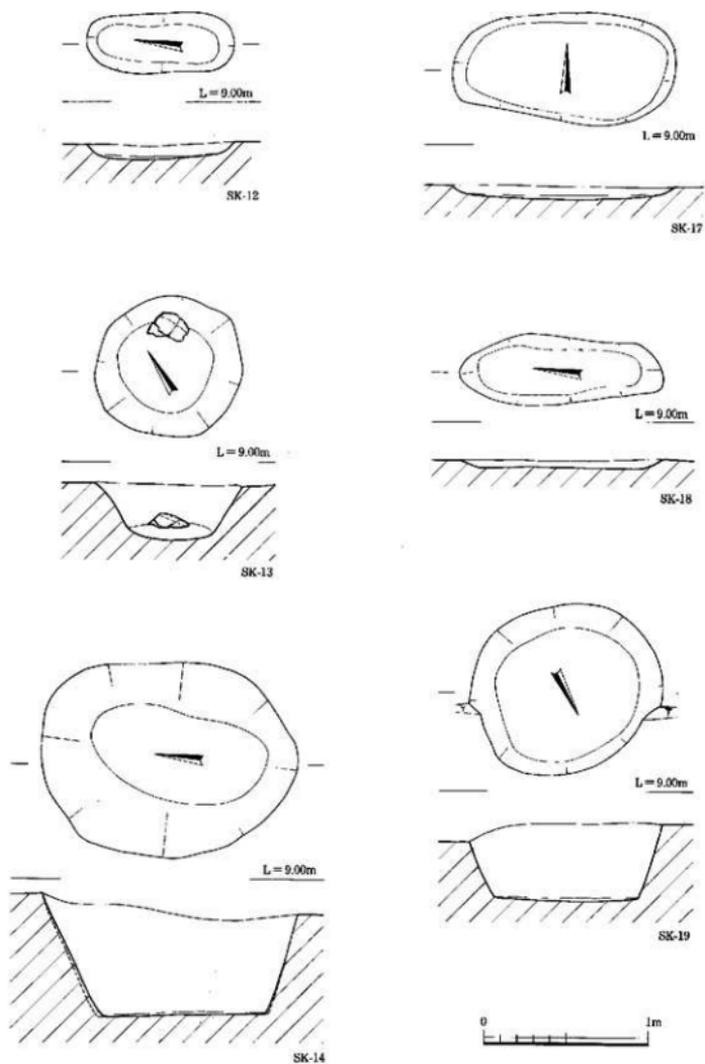
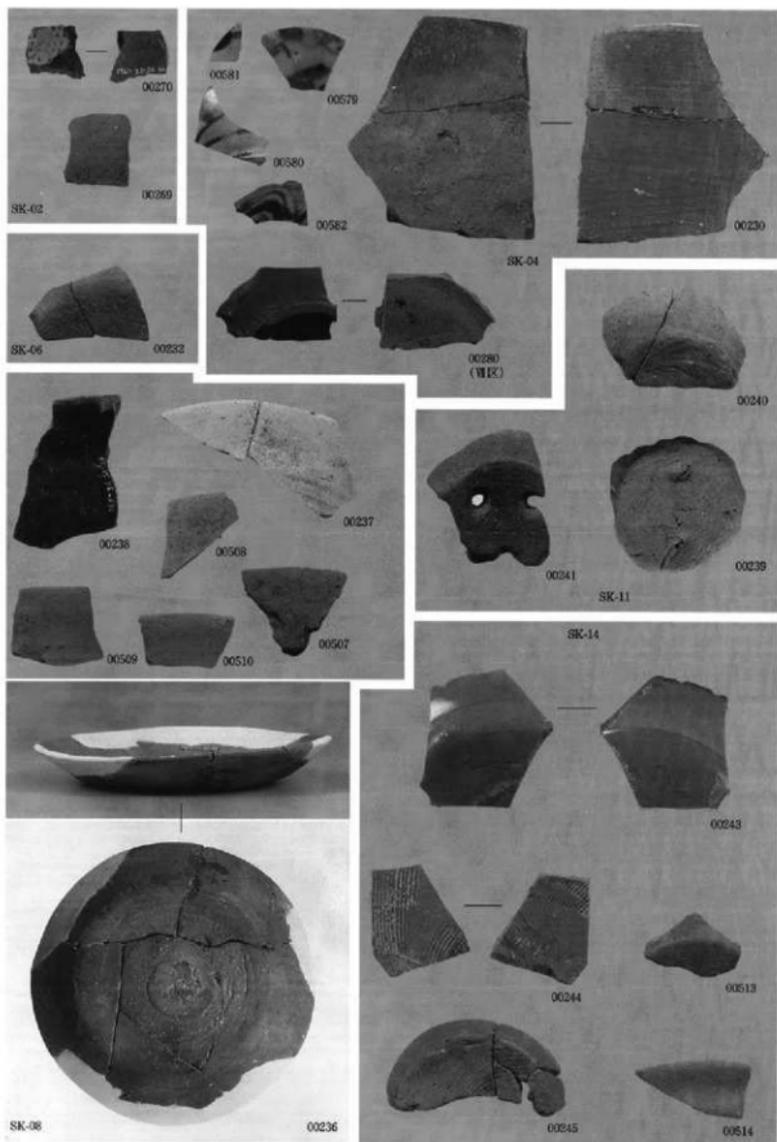


Fig.35 第12~14・17~19号土坑 (SK-12~14・17~19) 实测图



Ph.25 各土坑出土遺物

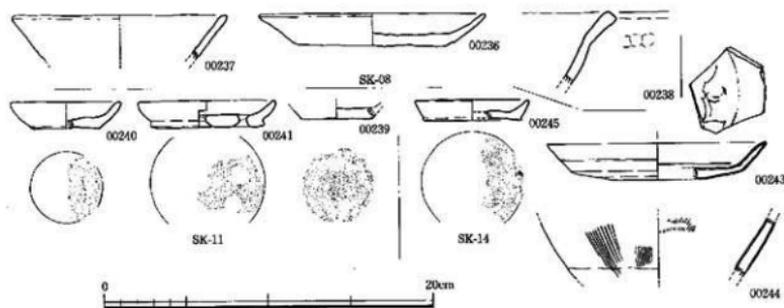


Fig.36 各遺構出土遺物実測図 (2)

第17号土壌 (Fig.35) 本土壌は、西側建物群の第33号建物の北側梁行の内側に位置している。長軸1.3m強、短軸0.65mの楕円形を呈し、6cm遺存している。第33号建物に関連する付設土壌か。

第18号土壌 (Fig.35) 本土壌は、西側建物群 (第30～33号建物) の東に沿った形で位置している。長軸1.2m、短軸0.44mの楕円形を呈し、6cm遺存している。建物の雨落ち溝か。

第19号土壌 (Fig.35) 本土壌は、I区中央の第6号溝敷地層面で検出した。径1.2m弱の円形を呈し、47cm遺存している。床はほぼ平坦で、壁はやや開き気味に立ち上がっている。

以上の土壌は、第13号を除き、糸切り底の土師器細片を出土しており、建物群とはほぼ同時期のもの、14世紀から17世紀初頭にかけてのものといえよう。

溝 (SD) と出土遺物 (Fig.6・37, Ph.26)

本調査区では、東西・南北方向を基調とした溝7条を検出した。

第1号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は、I・II調査区境を東流する農業用水の4～6m北側に並走する形で、標高7.7m～7.8mの黒褐色火山灰層の面で検出した。SP-0003に切られ、第7号溝との切り合い関係は試掘調査溝によって削平を受けているため確認できなかった。第7号溝の西へ本溝は延びていないことから、ほぼ直交する形で分流していたとも考えられるが、本溝は西へ浅くなってきており、削平のため、第7号溝の西に延びていないとも考えられる。本溝は、検出面では西側が0.6m、東側が1.2m前後の幅で西側が浅くなり、10cm前後東側が全体的に深くなり、70cm前後遺存している。溝底は起伏があり、横断面形は逆台形状をなすところが多いが、場所によってはV字状をなしている。本溝では掘・井堰等の枕列はみられなかったが、東側には長軸1.8m、短軸1.2mで深さ60cm前後の第20号土壌などぬめりに使用されたと考えられる付設土壌がみられる。水稲耕作用の用水か。本溝の掘土は砂を基調とし、粘土・シルト・砂・粗砂の互層となっており、東側は黄灰色から黒灰色シルト～粘土が上部に厚く堆積しており、整地されたといえよう。

本溝からは少量の遺物が出土した。21は竜泉窯、22は同安窯の青磁碗で、口径17.8cm・14.4cmを測る。23は朝鮮半島系の粉粧沙器の瓶 (壺) か。24は土師質の土鍋で、口径29.2cmを測る。25は土師器皿で、口径7.6cm、底径5.4cm、器高7.6cmを測る。

本溝はN-87.5°-Eの流路をとる横断面形逆台形溝で、13世紀頃掘削され、23・25など東側上部の整地層中から出土した遺物から、少なくとも16世紀には廃棄されていたと考えられる。また、本溝は

流路方位から早良平野の条里に関連する区画用水溝と考えられ、Ⅰ・Ⅱ調査区境に現存する農業用水に切り換えられた可能性が高いといえよう。

第2号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は本調査区中央部に位置し、第6号溝を切り、第28号建物・第4号土壇・SP-0018等に切れ、調査区中央部北の現代の溜折によって一部削平を受けている。調査区北側は、標高8.65m前後の第6号溝廃棄地層である黒褐色土面で、南側は標高8.75m前後の黒灰色土・シルト・砂面で検出した。検出面南側では1m前後、北側は3mの幅をもち起伏はあるが、南側が15cm前後、北側が50cm前後遺存している。埋土は暗褐色～黒褐色粘質土～シルトで、南側は砂が混じる。人為的に埋められたものか。横断面形は逆台形状をなしている。

本溝からは少量の遺物が出土した。26・27は竜泉窯青磁碗で、26は口径15cm、27は底径5.3cmを測る。28は白磁で、皿と考えられ口径8.6cm、器高2.6cm + α を測る。29は糸切り底の土師器皿で底径7.6cm。30は瓦質土器の火舎か。

本溝はN-3.5°-Wの流路をとる逆台形溝で、第1号溝とはほぼ直交する形であり、第7号溝と同時期と考えられることから、幅4m前後の道路の側溝とも考えられる。13世紀頃掘削され、15世紀頃には廃棄されたと考えられる。

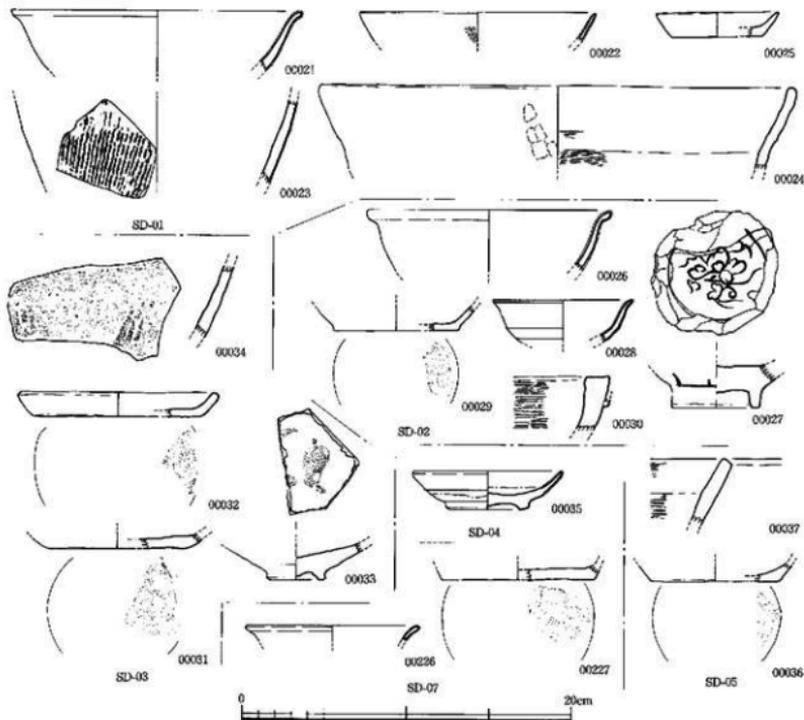
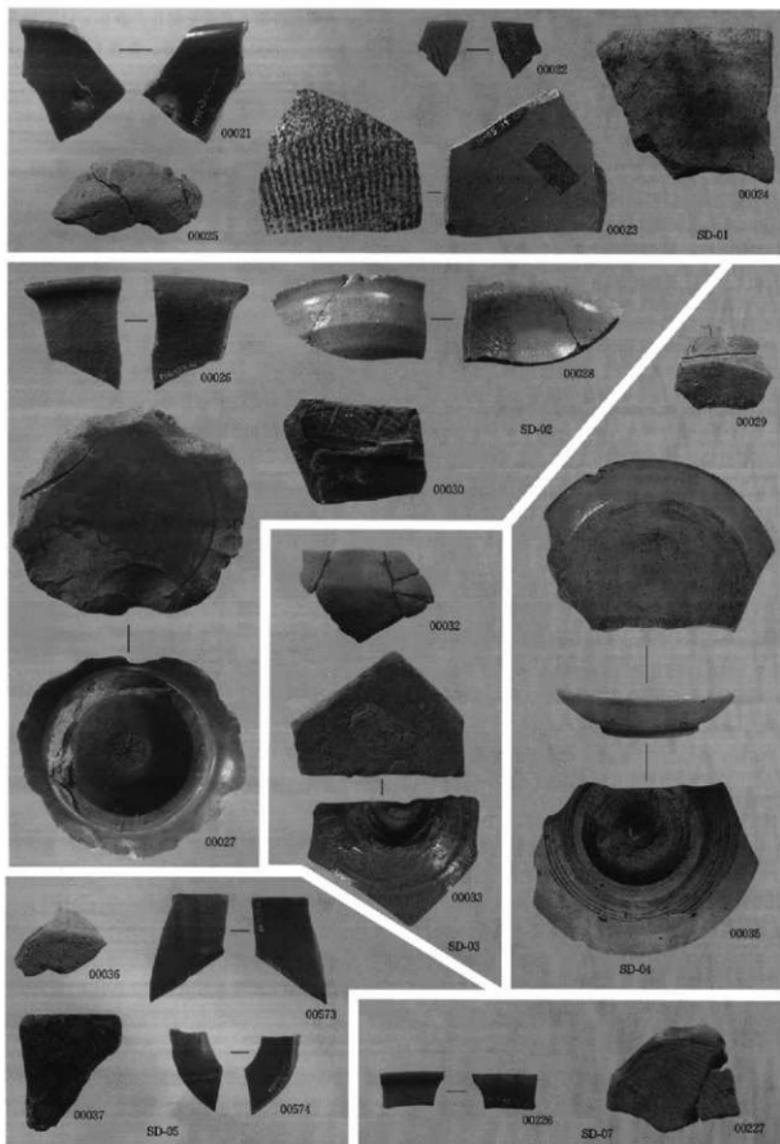


Fig.37 第1～5・7号溝出土遺物実測図



Ph.26 各溝出土遺物

第3号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は本調査区の中央に位置し、第6号溝を切り、第9・11・19号土壌に切られている。第2号溝の西10m前後に位置し、並走し、西に折れている。集落を区画する溝か。検出面では、幅2m前後で横断面形は逆台形を呈し、8～30cm遺存している。

本溝からは少量の遺物が出土した。33は白磁皿、34は土師質の襦鉢で、31・32は糸切り底の土師器皿である。32は口径12.2cm、底径10.2cm、器高1.5cmを測る。

第4号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は調査区の中央から西側にかけて位置し、第9号溝や柱穴に切られている。2.5m前後の不整形を呈し、皿状に30cm前後遺存する第15号土壌を源とし、南走し、直角に折れて東走している。検出面では幅20～50cmで5～10cm強遺存し、横断面形はU字形から逆台形を呈している。

本溝からは数点の遺物が出土した。35は白磁皿で、口径9.2cm、底径5cm、器高2.38cmを測る。以上のほか、本溝からは糸切り底の土師器細片が出土した。

本溝は、砂礫面に位置する第15号土壌が湧水地源と考えられ、南走して直角に折れ、N-87.5°-Eの流路をとる逆台形溝で、集落区画溝と考えられる。また、本溝は第1号溝同方位をとっており、第I・II調査区境界に現存する農業用水と27m前後の間隔をもっていたことになる。本溝は出土遺物から15世紀前後と考えられ、本溝を集落区画溝とすると、東西建物群からなる集落は早良平野の条里の影響を受けていることとなる。

第5号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は、調査区中央北側の第6号溝整地面に位置している。幅70cm前後で、横断面形は皿状をなし、10cm前後遺存している。本溝からは、糸切り底土師器皿 (36)、土師質土鍋 (37) など少量の遺物が出土した。

第7号溝 (Fig.6・37, Ph.26) 本溝は調査区中央に位置し、第21～25・27号建物やSP-0045などの柱穴に切られている。検出面では幅0.7～1.5m前後の幅をもち、横断面形は逆台形状をなし、12～25cm遺存している。第2号溝と同様の黒褐色～黒灰色粘土・シルトを埋土としており、人為的に埋められ廃棄された可能性が高いといえよう。

本溝からは少量の遺物が出土した。0226は白磁皿で、口径10.6cmを測り、0227は糸切り底土師器皿で、底径9.4cmを測る。

本溝はN-4.5°-Eの流路をとる逆台形溝で、第1・2号と同時期のものと考えられる。

以上、本調査区検出の中世溝6条について概観してきた。いずれも南北・東西に流路をとる溝である。第1・2・7号溝は出土土器・埋土から同時期のものと考えられ、第1号溝はN-87.5°-Eの流路をとり、N-4.5°-Wの流路をとる第7号溝からほぼ直角に分岐したものとといえよう。第2号溝はN-3.5°-Wの流路をとっており、第7号溝と流路方位に少しずれがあるが、両溝ともやや蛇行しており、道路側溝とするのに問題はないと考えられる。第2・7号溝間は、早良平野の条里にのった幅4m前後の道路と考えられる。第1・2・7号溝および道路は、13世紀前後に築造され、東西建物群からなる集落が形成された15世紀頃に廃棄されたものとといえよう。第4号溝も第1号溝と同じ流路方位をとっているが、集落と共存しており、第3号溝と同様、集落区画と関連ある溝と考えられる。

I区出土の中世遺物 (Fig.38・39, Ph.27)

本調査区のI区では、遺構検出時に中世から近世初頭にかけてのままとった遺物が出土した。

0302～0305・0307・0308・0327・0328・0384は竜泉窯青磁碗で、0304・0305・0308は口径12.4cm・13.8cm・15.4cmを測る。0330は同安窯青磁碗で、口径17cmを測る。0306・0311・0320・0326も青磁碗で、0311は口径12cmを測る。0309は白磁碗、0318は天日碗である。0322は青花磁器碗

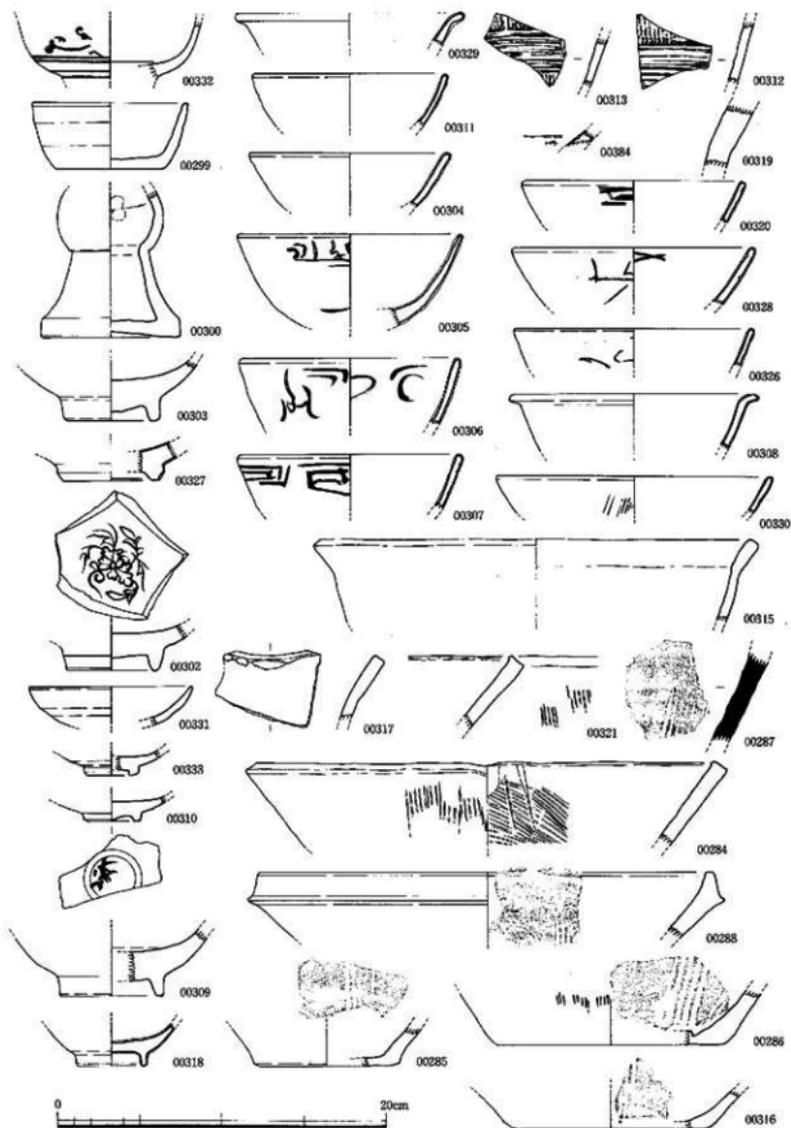
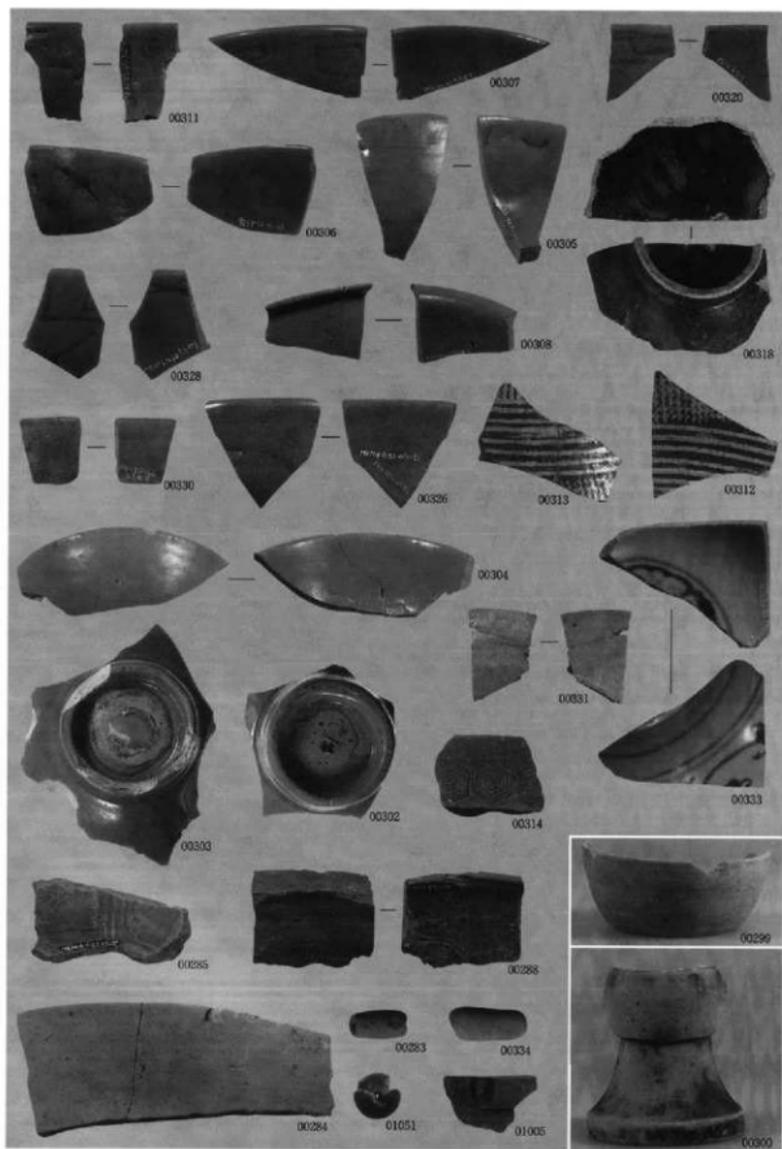


Fig.38 I区出土中世遺物実測図(1)



Ph.27 I·II区出土中世遺物

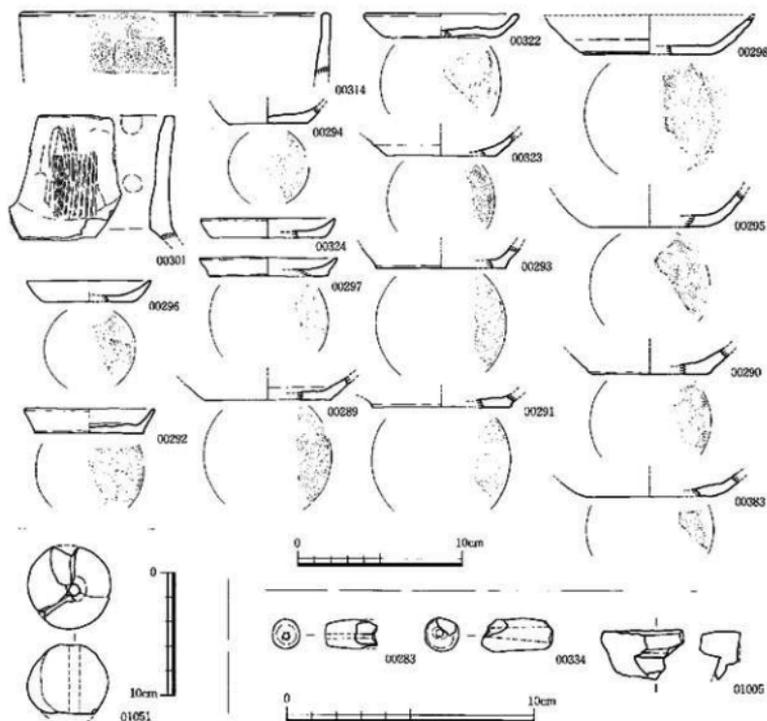


Fig.39 I区出土中世遺物実測図 (2)

で、近世のものか。0329は竜泉窯青磁皿で、口径14cmを測る。0310・0311・0333は白磁皿で、0310の外底には(圖)の墨書がみられる。0319は黒褐釉陶器壺(甕か)、0312・0313は韓半島系の粉粧沙器の甕か。

0299は土師質の鉢で、口径9.6cm、底径6.5cm、器高4cmを測る。0300は瓦質土器の仏器。0299・0300は近世のものか。0287・0288は須恵質の挿鉢で、0288は口径27.8cmを測る。0285・0286・0316は土師質の挿鉢。0317は瓦質、0284・0321は土師質の片口で、0284の口径は29.4cmを測る。0315は土師質の土鍋で、口径27.4cmを測る。0314は土師質の釜で、口径19cmを測る。0295・0298は糸切り底の上師器坏で0298は口径(12.8cm)、底径8.2cmを測る。0289~0291・0293・0294・0296・0297・0322・0323・0384は糸切り底の土師器皿で、0296・0297・0322は口径7.4cm・8.4cm・9.5cm、底径5.4cm・7.2cm・6.75cm、器高1.3cm・1.1cm・1.45cmを測る。0292・0324は土師器皿で口径8cm・8.2cm、底径6.6cm・7cmを測る。1051はガラス玉で、重さ5.42gを測る。0283・0334は土鉢で、1005は硯で赤潤石裂か。0301は瓦質製品である。

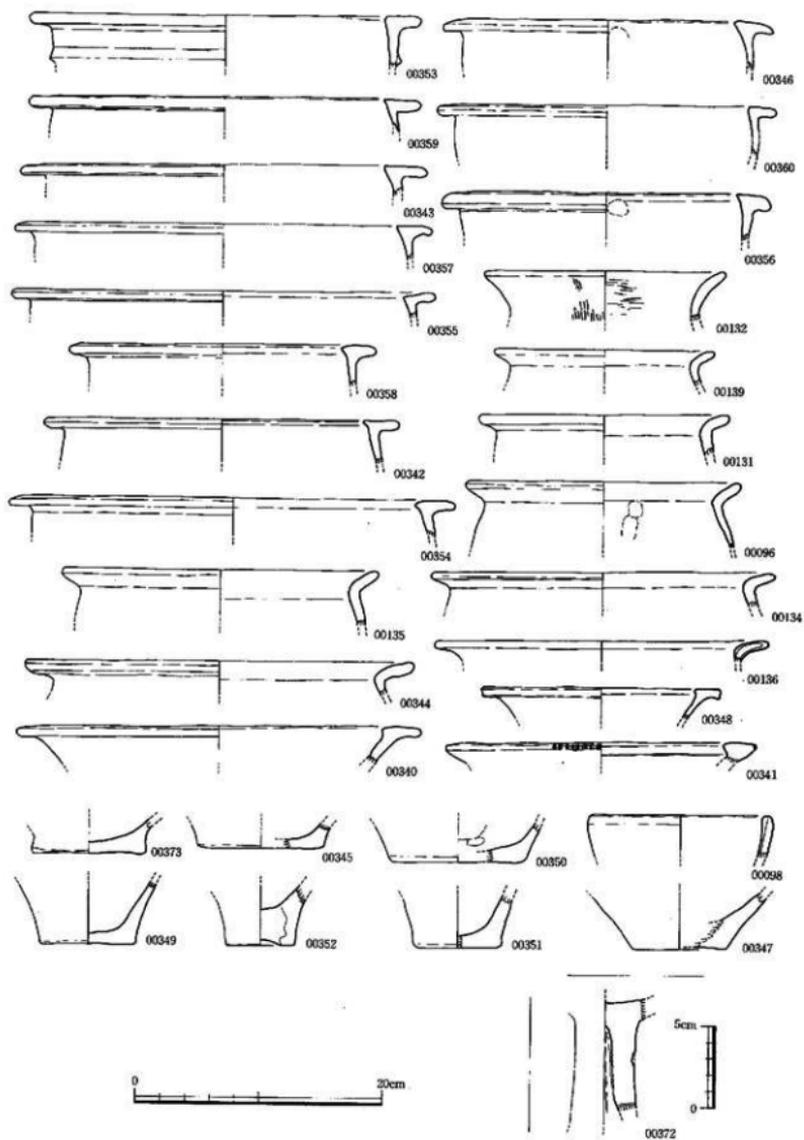


Fig.40 I · II 区出土弥生土器实测图

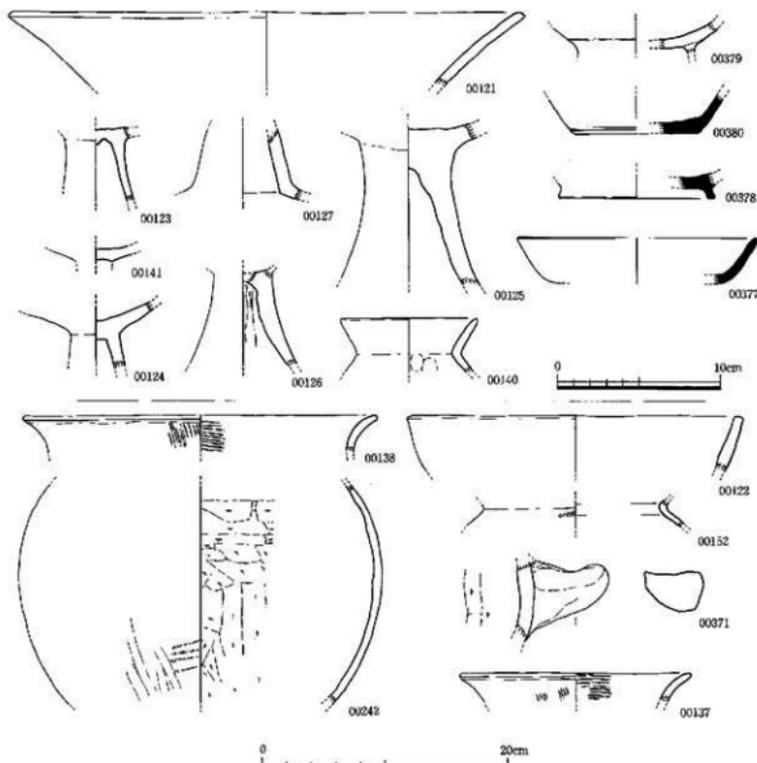


Fig.41 I区出土土師器・須恵器実測図

4. I・II区出土のその他の土器 (Fig.40・41)

本調査区では古代・中世の遺構を検出し、遺構に共伴した当該時期の遺物について前節まで紹介してきた。ここでは、遺構検出時および古代・中世遺構に混入していた弥生土器、古墳時代から古代にかけての須恵器・土師器についてみていくことにする。

弥生時代の弥生土器からみていくと、くの字状口縁をなす甕 (96など)、逆L字状口縁をもつ甕 (0342・0355など)と突帯文土器甕の底 (0373)、高坏 (0372)、鋸状口縁をもつ甕がある。

古墳時代の土師器としては、甕・壺・高坏・小形丸底甕 (0140)がある。

古代の遺物としては、須恵器の皿 (0377)、有高台坏 (0378)、無高台坏 (0380)、土師器甕の把手 (0371)、内黒の黑色土器 (0379)がある。

5. Ⅲ～Ⅶ区の調査概要 (Fig.5・42・43, Ph.28・29)

次郎丸高石遺跡第3次調査Ⅲ～Ⅵ区(以下、本調査地とする)は、平成3年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、古墳時代の溝などの遺構が検出され、本調査が必要であると決定し免Ⅱ要本調査地とした地区にあたる。この地区は、賀茂三丁目391・394・396～398・400のⅠ・Ⅱ区境をなす幅5mの道路と幅2mの水路から東に北流している金屑川までの間にあたる。この間の道路建設幅は42m前後で130m前後の長さとなる。

調査にあたっては全面的な調査をめざしたが、南北隣接地が水田であり、南北方向の農業用水4条が使用されているため調査対象から除外し、この農業用水を利用しⅢ～Ⅶ区の調査区を設定した。Ⅲ区の北側には幅5mの道路があり生活道路のため、これも調査対象から除外した。また、Ⅲ区西側の105m²前後についてはⅢ区に遺構が確認できなかったことと、残す必要がある畦畔があったため調査を断念した。さらにⅢ区北側の道路北側の147m²については、本調査区調査終了時まで未買収のため調査できなかった。

調査は、Ⅲ区の現代水田耕土をバックホーで除去することから始めた。その結果、Ⅲ区では30cm前後の水田耕土を除去すると、淡黄褐色粘土～シルトの面(標高8.9m)となったが、遺構は確認できなかった。Ⅲ区は北側に幅2mの調査溝を設定し深掘りした結果、標高8m前後で灰色砂礫層を確認して調査を終了し、Ⅳ～Ⅵ区の廃土置き場とした。

Ⅳ区は現代水田耕土を除去した標高9m前後の灰色および黄褐色シルト面で、黒色シルトを埋土とする2条の溝を検出したため精査した。溝1条は、幅1～1.5mで最大30cmの深さ遺存し、蛇行しながら北流している。本溝からは土師器・縄文土器・石鉄各1点が出土したのみである。古墳時代後期頃の水田用水か。他の1条は、北に向かって大きく広がりがりながら深くなっている自然の浅い谷頭と考えられるが、遺物の出土はなかった。

Ⅶ～Ⅷ区は現代水田耕土を除去した標高8.6m～9mの灰色砂～シルトおよび黄灰色粘土～シルト



Ph.28 次郎丸高石遺跡全景(東から)



1) IV区完掘状況



2) V～VII区完掘状況

Ph.29 IV～VII区全景

面で、土壌・溝などの遺構を検出した。V～VII区検出遺構は水稲耕作に伴う水利遺構と考えられ、一連のものであることから、本節ではV～VII区検出の遺構および出土遺物について述べていくことにする。

検出遺構は、調査地は各区ごとに遺構番号を付し、遺物も各区ごとの遺構番号で取り上げた。ここでは、V～VII区検出遺構は通し番号を付し述べていくことにする。

出土遺物は、I・II区と同じ方法でI・II区からの連続番号を付して登録番号とし、本文中は4桁で表示していくことにする。

6. 検出遺構と出土遺物

1) 第3号溝 (SD-03) と出土遺物 (Fig.43～46, Ph.30～33)

本溝はV～VII区の北端部に位置し、第1号溝を切り、VII区からVI区にかけては東西方向の流路で、VI区北東端ではほぼ直角に折れ調査対象地外へ延びている。標高8.5m～8.85mの黒色～黒灰色シルトの面で検出した。検出面では幅6m前後を測り、溝底は凹凸はあるものの1.6m前後遺存している。横断面形は逆台形を呈し、粗砂を基調とし、粘土・シルトをレンズ状に挟むものの粗砂と砂を埋土としており、一気に埋没したと考えられる。

本溝のコーナーには長軸8m、短軸6m前後の不整形を呈する付設土壌があり、1.2m強遺存している。本土壌の下部は砂・シルト・粘土の互層となり、上部は本溝と同様、砂・粗砂が堆積している。本土壌は底から0.6m前後は徐々に埋まり、その上は本溝埋没時に廃棄されている。

VI・VII区の本溝の南側には4ヶ所不整形の張出しがみられ、本溝との境には杭列および杭列の痕跡があるものがあり、水田が割平を受け、排水溝（取水溝の可能性もある）が遺存したものと思われる。



Ph.30 第3号溝検出状況



1) V区第3号溝付設遺構土層堆積状況(南から)



2) VI区土層堆積状況(東から)

Ph.31 第3号溝土層堆積状況

出土遺物 (Fig.44~46, Ph.32・33)

本溝からは弥生時代の弥生土器、古墳時代の須恵器・土師器がまとまって出土したほか、杭や流木が出土した。出土弥生土器は磨耗しており混入再堆積遺物と考えられることから、ここでは古墳時代遺物についてみていくことにする。なお、最上層で青花文白磁が数点あるが、古墳時代遺物が多量あり磨耗がみられないことから、本溝の時期を示すものではないと考えられる。

坏蓋 (Fig.44, Ph.32) 0167は土師器で、坏身受けの造り出しはない。比較的天井は高く3.85cmを測る。器面はナデ調整が施されている。口径14.4cm。他はすべて須恵器である。0157・0161・0162・0166・0173・0176・0186は身受けの造り出しをもたない蓋で、0162は壺蓋と考えられるほかは坏蓋といえよう。0173・0186は天井と口縁の境に段を残し、口縁端はつまんで丸く仕上げている。口径14.6cm・10.6cmを測る。0157・0166は天井が高く、木碗状をなし、天井は回転ヘラケズリが施され他の器面はヨコナデ調整で仕上げている。0157の天井にはヘラ記号がある。口径12.6cm・11.8cm、器高4cm・4.2cmを測る。0161・0176は口径13.6cm・12cmを測る。0168・0171・0178・0277は、坏身受けの造り出しをもつ有返の坏蓋である。0160も同様か。0160・0171の回転ヘラケズリを施した外天井にはヘラ記号があり、他の器面はヨコナデ調整で仕上げている。0171は口径11.4cm、器高3.3cmを測る。0168・0178・0277は口径10cm・11.75cm・13.6cmを測る。0168は赤焼き。

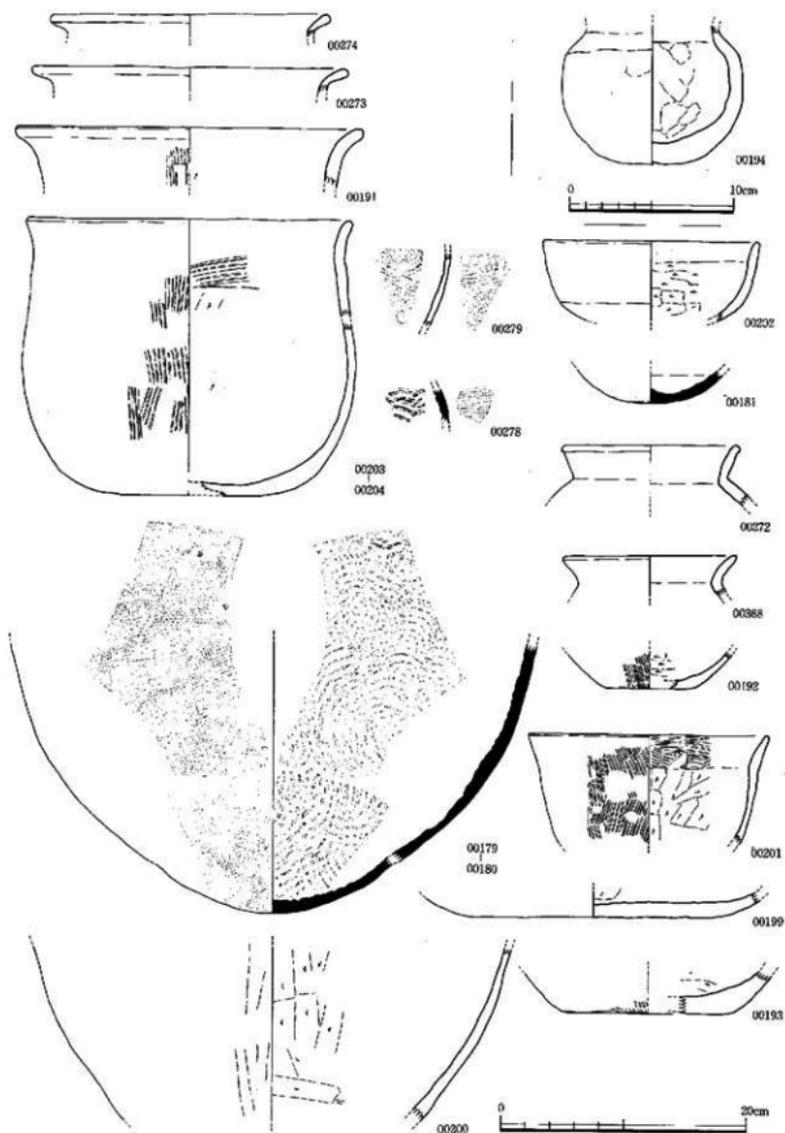
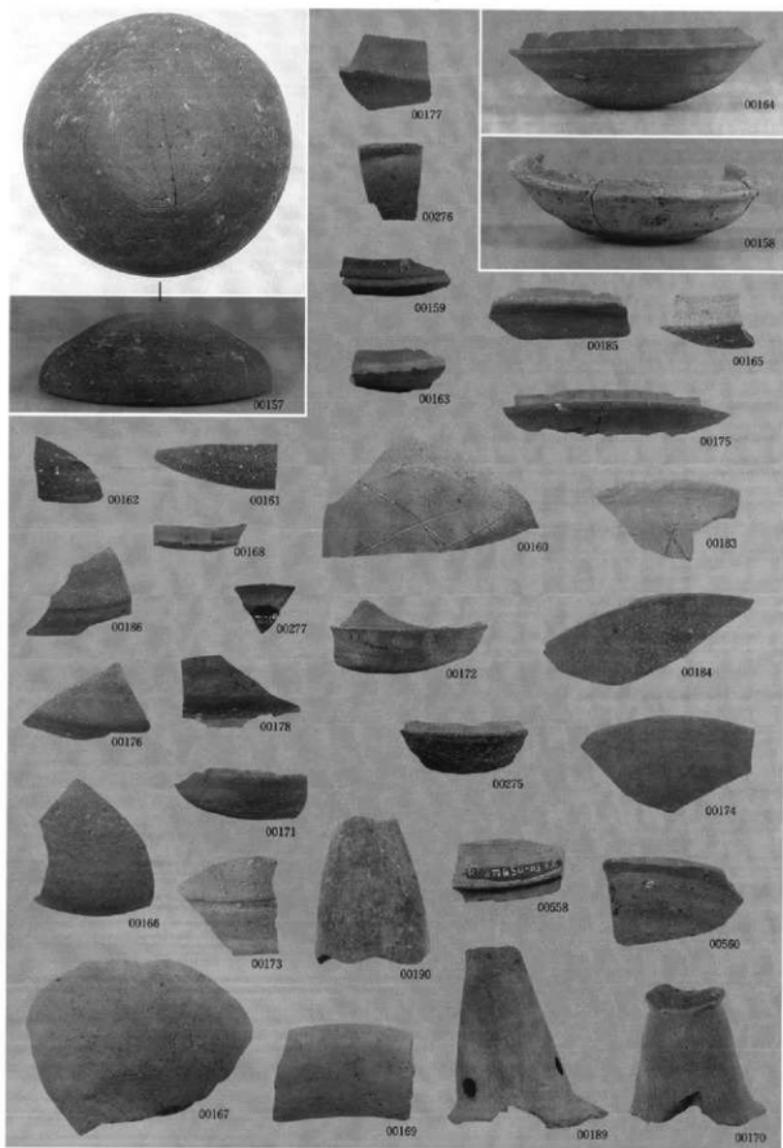


Fig.45 第3号溝出土遺物実測図 (2)



Ph.32 第3号溝出土遺物 (1)

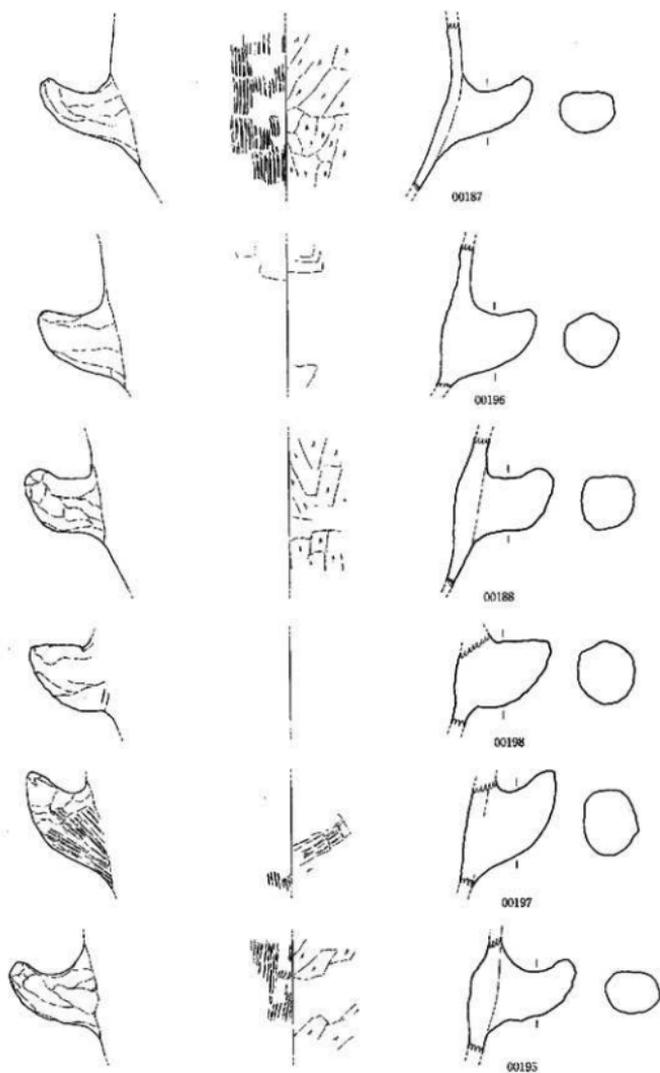
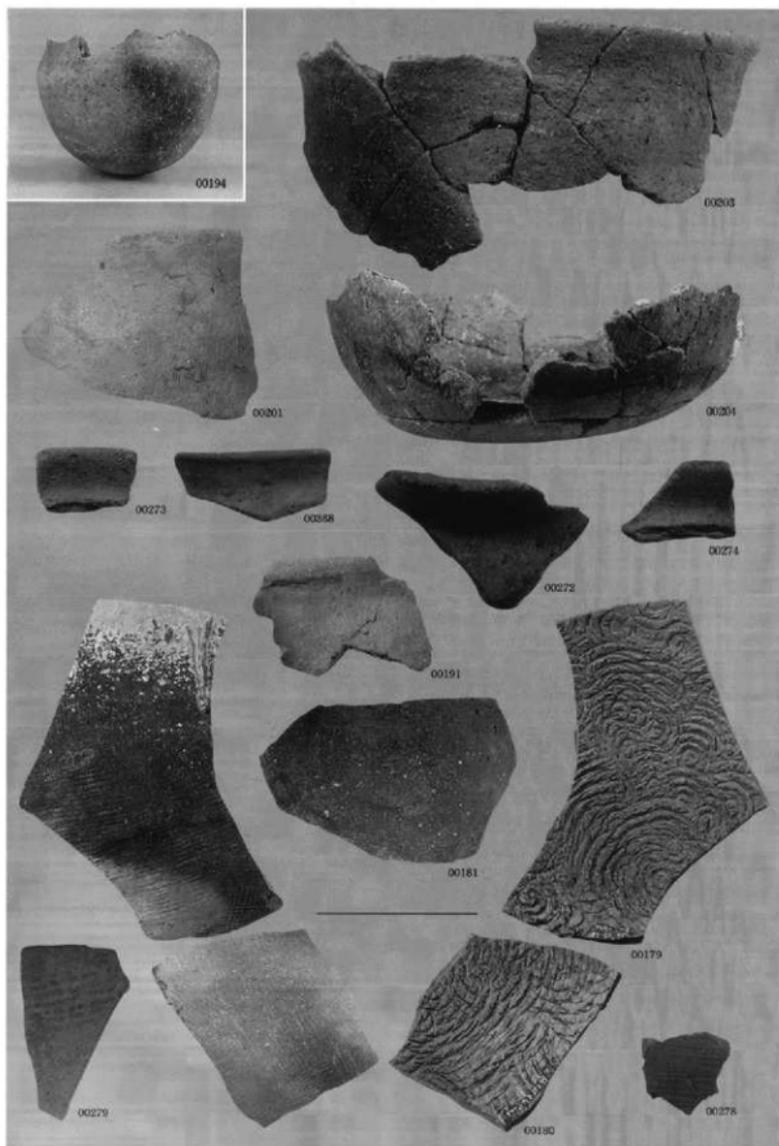


Fig.46 第3号沟出土遗物实测图 (3)



Ph.33 第3号溝出土遺物 (2)

坏身 (Fig.44, Ph.32) すべて須恵器で、蓋受けの造り出しをもっている。いずれも外底は丸みもち回転ヘラケズリが施され、他の器面はヨコナデ調整で仕上げている。0164の内底には当て具痕が残っており、0183の外面にはヘラ記号がある。0165・0172・0177は見受け造り出しから口唇までが比較的高く、口径10.8cm・11.6cm・12.2cmを測り、0172は器高4.5cmを測る。0158・0175・0183・0185・0275は見受け造り出しから短く内傾し口縁となり、口径10.8cm・9.8cm・11cm・9.7cm・12cmを測る。0158・0275の器高は3.8cm・4cmを測る。0159・0163・0164・0174・0184は口径14.4cm・11.2cm・11.8cm・10.4cm・11.1cmを測り、0164の器高は4.3cmを測る。0182も坏身。

皿・高坏 (Fig.44, Ph.32) 0169は土師器皿(高坏?)で、口径19.6cmを測る。0170・0189・0190は土師器の高坏脚で、0189は焼成前穿孔の透かしをもっている。

鉢・甕 (Fig.45・46, Ph.33) 0202は土師器の鉢で、内面口縁下は横方向のヘラケズリが施され、他の器面はナデ調整が施されている。口径19.8cmを測る。0278・0279・0179・0180は須恵器甕で、外面は叩き後カキ目が入り、内面は同心円当てで具痕が顕著に残っている。0187・0188・0191～0193・0195～0201・0204・0272～0274・0368は土師器甕で、0368は口径14.2cmを測り最小で、0201は口径19.8cmを測る。0203・0204は同一個体と考えられ、口径26.8cm、器高22.6cmを測り、下ぶくれで、平底に近い底部をもっている。口径30cmを越えたと考えられるものもあるが、小破片のため図化しなかった。なお、0187などの把手をもつものは甕の可能性もある。

壺 (Fig.45, Ph.33) 0194は土師器の小形丸底壺、0181は須恵器壺。

以上から、本溝は自然流路というより人工的な逆台形溝で、水稲耕作用水と考えられ、6世紀後半頃堀削され、8世紀前半頃洪水によって埋没し、廃棄されたものといえよう。

2) その他の遺構と出土遺物

V区検出第4号土壙 (SK-04) (Fig.47)

本土壙は最東端に位置し、一部のみの調査であるが、北流する溝(自然流路)の可能性が高い。本溝からは少量の遺物が出た。

0281は土師質陶器の鉢?で、口径14cmを測る。0280は青磁碗。

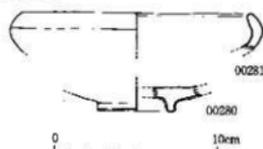


Fig.47 V区第4号土壙出土遺物実測図

V区検出第7・8号土壙 (SK-07・08) (Fig.48・49)

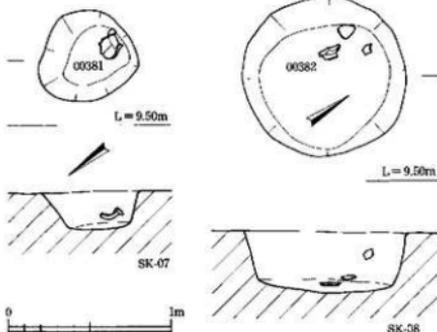


Fig.48 第7・8号土壙 (SK-07・08) 実測図

両土壙はV区
の南西端で検出
した。第7号土
壙は長軸60cm、
短軸55cmの不整
形を呈し、25cm
弱遺存し、床近
くから1点の土
師器甕が出た。
0381は丸みも
つ弱から屈曲
して開き口縁
となる甕で、内
面屈曲下はヘラ

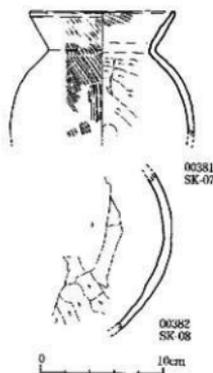
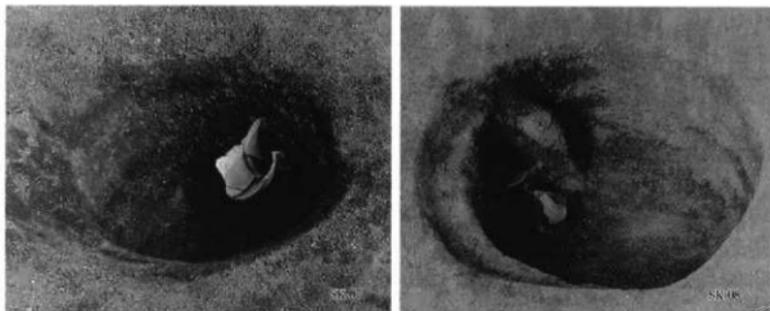
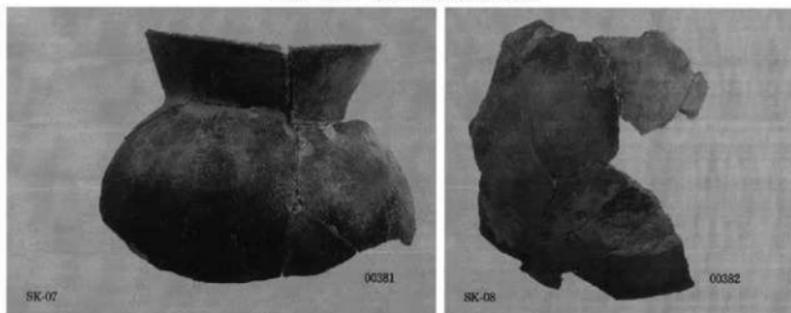


Fig.49 第7・8号土壙出土土器実測図



Ph.34 第7・8号土壇遺物出土状況



Ph.35 第7・8号土壇出土土器

ケズリが施され、口縁はヨコナデ調整、外面はハケ目調整が施されている。口径12cmを測る。

第8号土壇は径1mの円形を呈し、40cm遺存している。本土壇からも0382の土師器甕1点が出土した。丸みをもつ胴片で、内面はヘラケズリ、外面はナデ調整が施されている。

以上の両土壇は、2mの間をもち柱穴の可能性もあるが、調査区内では建物としてまとめることはできなかった。出土土師器は、ほぼ同時期といえ古墳時代前期のものか。

7. IV～VII区出土のその他の遺物 (Fig.50～52)

0325は白磁碗。0282は蓋受けの造り出しをもつ須恵器坏で、口径14cmを測る。0370は土師器高坏。

0112～0120・0335～0339・0361～0367・0369・0376は、第3号溝などから出土した弥生土器である。0112～0116・0118～0120・0335～0339・0362・0367は甕で、逆L字状をなす口縁をもつものが多く、T字状口縁・くの字状口縁をなすものが少量ある。0117・0361は壺である。0369は支脚の完形で、天井に焼成前の穿孔があり、

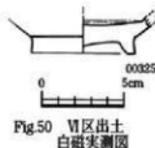


Fig.50 VII区出土白磁実測図

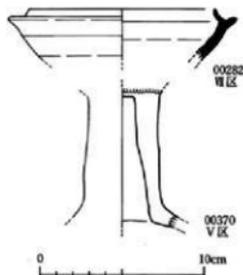


Fig.51 V・VII区出土古墳時代遺物実測図

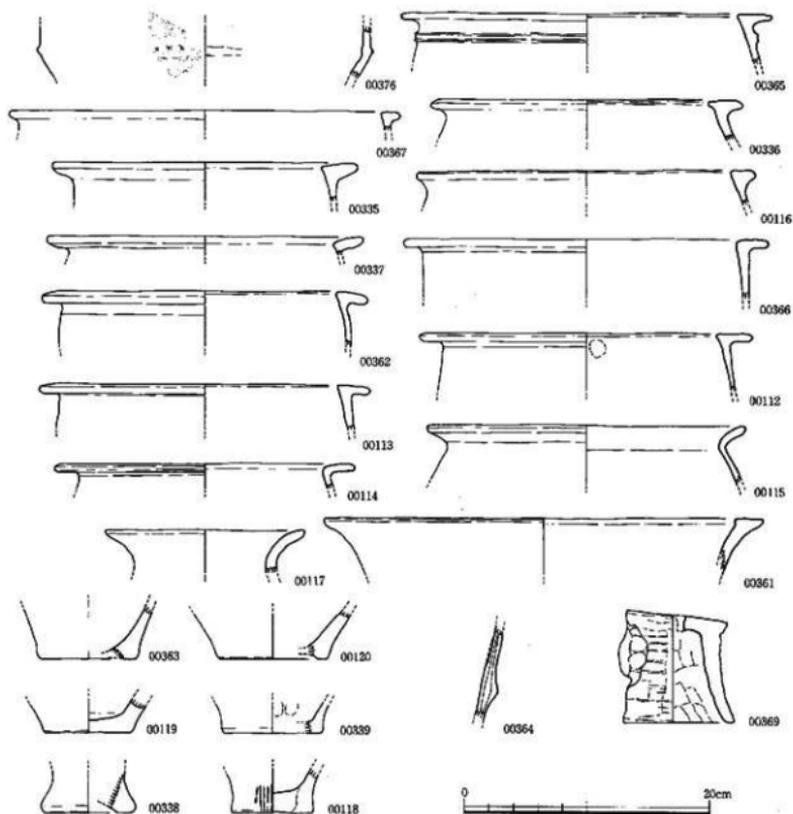


Fig.52 IV～VII区出土弥生土器実測図

器外面はタキ痕が顕著で、器内面はシボリ後ナデ調整を加えている。底径10.5cm、器高8.1cmを測る。

8. 本調査出土縄文時代遺物 (Fig.53・54, Ph.36)

本調査地では、I区の第6号溝や遺構検出中に縄文時代と考えられる石器や剥片・削片が、IV～VII区の遺構検出中に石器と土器数点が出土した。

1006～1017は打製石鏃で、1006・1007・1009・1010・1012・1016は漆黒の黒曜石製、1013は乳白色の黒曜石製で、1011はハリ質安山岩製、他は古銅輝石安山岩製である。1006は寸詰まりの剥片を素材とし、素材打面を切断し、表裏から2次加工によって挟りを入れ基部とした剥片鏃で、重さ1.66gを測る。先端は使用時の欠損か。1007・1009は表裏から丁寧な2次加工を加え、横断面凸レンズ状になるように仕上げ、基部は大きく挟り込んでいる。1007の左脚は製作時から短く、1009の

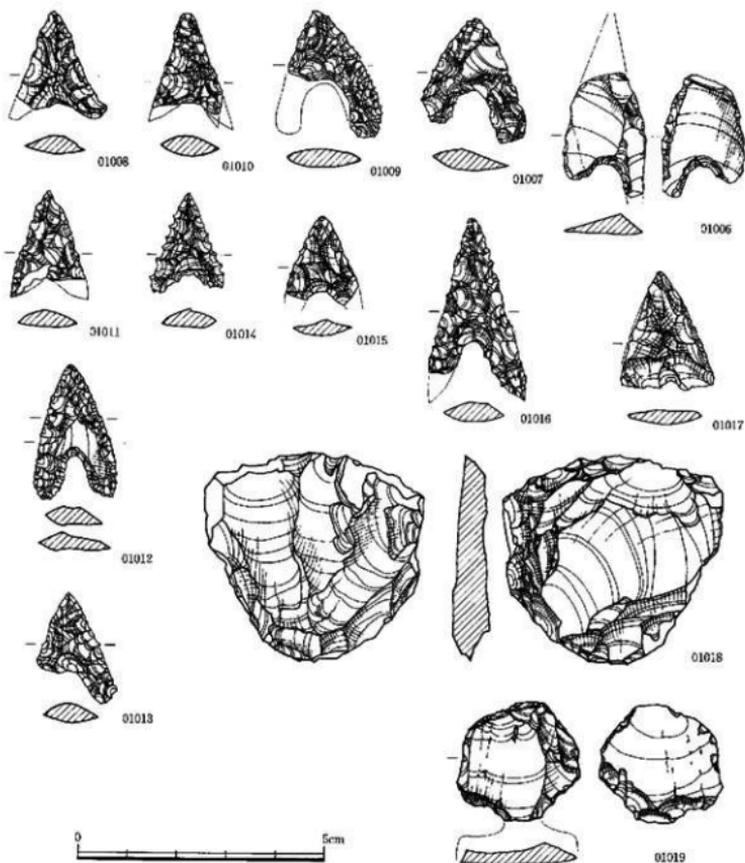
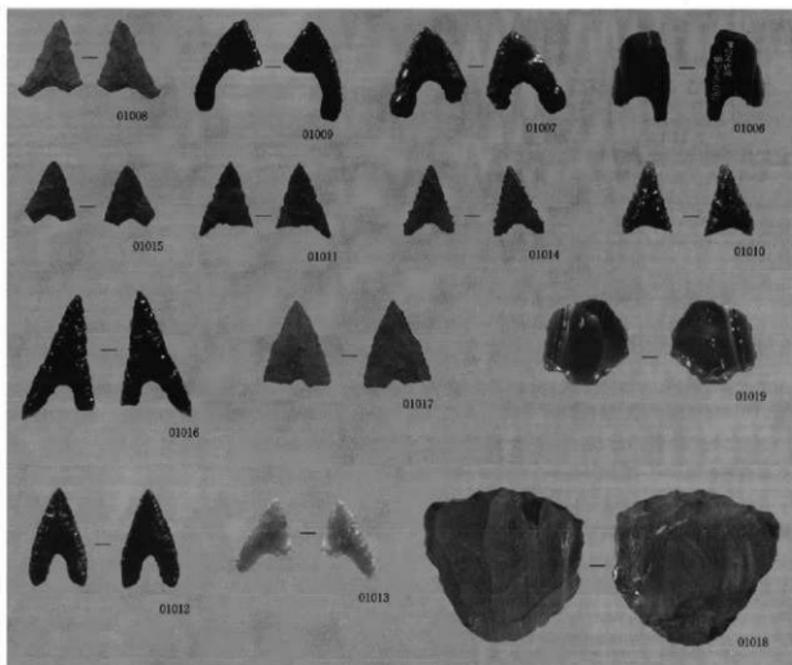


Fig.53 出土石器実測図

左脚は使用時の欠損と考えられる。重さは1.37g・1.17gを測る。1010・1011は表裏から丁寧な2次加工を加え、横断面形レンズ状に仕上げ、抉りを少し入れ基部としている。重さは0.86g・0.64gを測る。脚は使用時の欠損か。1008も比較的丁寧な2次加工を表裏に加え、横断面形レンズ状に仕上げ、脚はやや外開きとなっている。重さ1.09gを測る。1013は表裏から丁寧な2次加工を加え、片脚で横断面形レンズ状に仕上げている。重さ0.68gを測る。1014は丁寧な2次加工によって横断面形レンズ状にし、両側は有刺状をなし、基部は少し抉りを入れている。重さは0.67gを測る。1015は重さ0.63g + α。1016は表裏から丁寧な2次加工を加え、基部はやや深めに抉り込んでいる。重さ1.8gを測り、左脚端は使用時の欠損か。1017は粗い2次加工を表裏から加え二等辺三角形に仕上げ、重さ1.37gを測る。1012は不定形剥片を素材として、縁辺に丁寧な2次加工を加えているものの主要剥離



Ph.36 出土石器

面・素材剥離面を残している。重さ1.01 g。01018は漆黒の黒曜石製の石核で、表面には縦長剥片の剥離がみられ、裏面は不定形剥片の剥離がみられる。器面はローリングを受けている。01019は縦長剥片の両側に表裏加工を加え、切断したいわゆるつまみ形石器である。

以上の石器は、01018が先土器時代ナイフ形石器文化期のものの可能性があるほか、01006・01019が縄文時代後期のものと考えられる。他の石鏃は、その器形から縄文時代早期から同時代前期にかけてのものといえよう。縄文時代早期から前期にかけての石鏃は、磨耗がなく、下山正一氏の指摘どおり、遺構検出面の黒色～暗灰色火山灰層は同時期の遺物包含層だった可能性が高いといえよう。

Ⅳ区からは数点の縄文土器が出土した。いずれも混じり込みで、小片である。0374は精製土器で、外面は横方向の研磨の後、浅い凹線を施し、暗茶褐色を呈す。内面はナデ調整で茶色を呈す。2 mm大の砂粒を含むが胎土は細かく、金雲母が目立つ。曾畑系の土器か。0375は4本以上の沈線がみられる。1 mm大の砂粒を多く含み、灰褐色を呈す。後期の精製深鉢か。0386は粗製の鉢の口縁部である。外面は削りの後ナデ調整を施し、黄灰色を呈す。内面は横方向に丁寧にナデ調整を施す。内外面とも細かな気泡がみられる。2 mm大までの砂粒を含む。

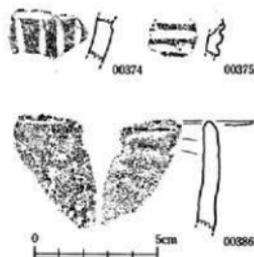


Fig.54 出土縄文土器拓影

9. まとめ

位置と土地

福岡外環状道路は早良平野の中央部を横断する幅40～60mの都市計画道路で、試掘調査を実施した結果、新たな遺跡の存在や遺跡の広がりが確認された。次郎丸高石遺跡第3次調査地も、新たに広がった遺跡の一つである。

本遺跡は、室見川支流の金屑川中流域西岸の標高10m前後の低位段丘上に位置している。I・II区では標高8.7m～9mの暗灰色～黒色火山灰層の上面で、V～VII区では標高8.6m～9.1mの黒色～灰色砂シルトおよび黄灰色～淡黄褐色シルト～粘土の上面で遺構を検出した。

調査成果—古墳時代から古代—

I・II区で第6・8号溝、V～VII区で第3号溝の3条の溝（自然流路を含む）を検出した。II区検出の第8号溝は、古墳時代前期頃浸蝕によってできた金屑川の支流と考えられる自然流路で、8世紀頃埋没し、同時期に第6号溝が浸蝕によってでき、第6号溝は11世紀頃整地によって廃棄されている。V～VII区検出の第3号溝は6世紀後半頃掘削された逆台形溝で、8世紀前半頃埋没し廃棄されている。これらの溝にはぬるめの機能を果たしたと考えられる土壌や取・排水溝が取り付けられており、水稲耕作の用水で、古墳時代から古代にかけては、本地域は水田が営まれていたと考えられる。

これらの各溝出土の土器に傷みがなく、量的にまとまっていることから、水田地域であると同時に南側周辺地に集落の存在が予想できる。特に第6号溝出土の「城司」など墨書土器の出土は、官衙的な集落の存在が予想できる。

調査成果—中世—

第2・7号溝は、N-4°-Wの方位をとる幅4m前後の道路溝溝と考えられ、これにはほぼ直交する形で第1号溝を検出した（N-87.5°-E）。この道路および第1号溝は13世紀前後に掘削され、15世紀前後に廃棄されている。主軸方位および出現から廃棄までの時期から、この道路・溝は早良平野の条里遺構といえよう。

本調査においては、15棟の建物・井戸・土壌・溝からなる15世紀前後の集落を検出した。建物はいずれも南北棟である。集落形成時には、第2・7号溝からなる道路は廃棄されている。しかし、建物はこの廃棄道路と近い主軸をもっており、東側建物群と西側建物群は平行しており、東西建物群間に道路がつけ変えられている可能性が高いといえる。とすると、本調査検出の建物群は道路に沿った集落であるため、南北方向の主軸方位をとることになったといえよう。

第21号建物の4隅の柱穴から出土した「一切悪日皆成善日 一切悪宿皆成善宿 一切悪曜皆成善曜 一切悪時皆成善時」の墨書石は、15世紀当時の建物建設にあたっての風習を考えるうえで参考となろう。

第4章 発掘調査の記録

—免遺跡第2次調査—

遺跡調査番号 9261

遺跡略号 MEN-2

分布地図番号 083-0318

調査地地籍 早良区賀茂二丁目地内

調査実施面積 2,543m²

調査期間 1993年1月6日～1993年9月21日

利保心寶與藥效 李惠壽

— 藥效學之藥理研究 —

利保心寶 藥效學研究

李惠壽 著

利保心寶 藥效學

李惠壽 著

利保心寶 藥效學

李惠壽 著

利保心寶 藥效學 藥理研究 李惠壽 著

1. 調査の概要 (Fig.55, Ph.37)

本調査地は免Ⅲ要本調査地と決定した地区にあたり、南北幅45mで、金屑川から東120mに所在する幅8mの道路までの間にあたる。調査対象地の東側には使用されている用水があるため、用水を含む幅50cmをまず調査対象外とするともに、用水を境として、西側をⅠ区、東側をⅡ区とした。調査対象地南東部は、道路計画地南の民有地の生活道路などとして利用されているため調査対象地からははずした。西側は、金屑川があること、試掘調査の結果、遺構遺存状態が悪いことから、金屑川から25~40mの引きをとった。北東部の盛土された民有地隣接地は5~10mの引きをとり、北西部および南側の水田・畑地隣接地については1.5~4mの引きをとり調査区を設定した。

調査は、盛土および現代水田耕上を重機を使用し除去することから始めた。その結果、Ⅰ区では標高9m前後の青灰色粘土~シルトの面で、Ⅱ区は標高9.2m前後の青灰色シルトおよび黒灰色砂の上面で溝などの遺構を検出した。Ⅱ区では中世末から近世の溝のみしか確認できなかったため、Ⅰ区の調査に重点をおいた。Ⅰ区検出遺構は北流する溝のみであったため、調査区中央に幅3mのベルトを東西方向に残し、掘削し、精査した。測量・実測は調査区に6m方眼を設定し、地形実測など1/50以上については平板を用い、1/10・1/20の詳細図は画板を用いて行なった。

Ⅰ区では弥生時代から古墳時代の溝6条を検出し、Ⅱ区では中世末から近世にかけての溝5条を検出した。Ⅰ区検出の第1号溝には、槽1・井堰1・護岸と井堰が一体となったアーチ状井堰3の付設遺構が構築されていた。第3・6号溝でも槽・井堰の付設遺構がみられるほか、密集抗群も検出した。また、本調査地においてはアカホヤ火山灰の純層が検出され、その上下層から縄文時代の遺物が出土した。

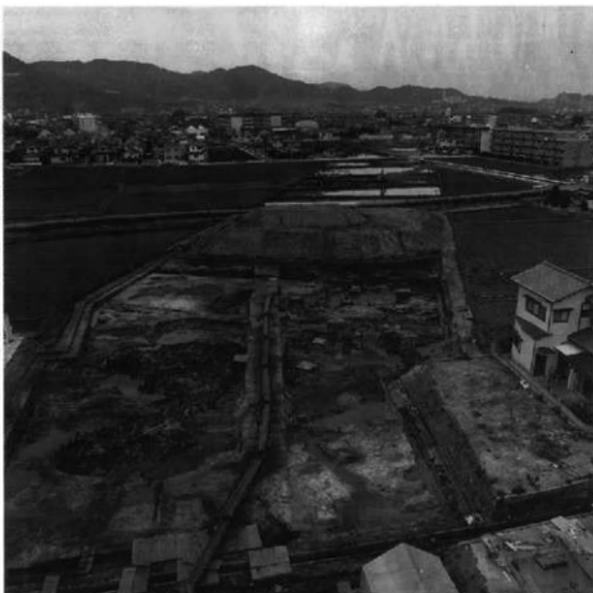
本調査の出土遺物は、縄文時代前期・晩期の土器・石器、弥生時代の土器・石器・木器、古墳時代の土師器・須恵器・木器、中世から近世にかけての輸入陶磁器・土師器がある。



Fig.55 免遺跡第2次調査地形実測図

本書中においては、遺構については遺構名を用いて述べていく。
例 第1号溝第1井堰
(挿図・図版中ではSD-01第1井堰)。

遺物については、遺跡調査番号を頭に5桁の番号を付して登録番号としているが、本文中では下桁で述べていく(挿図・図版は5桁で表記)。



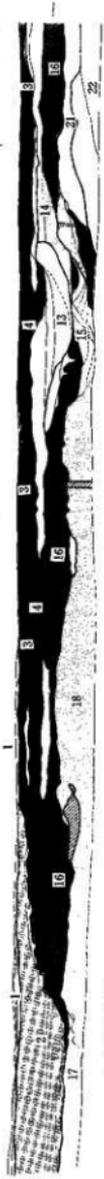
Ph.37 免遺跡第2次調査I区全景

層位 (Fig.57~59)

調査区の東半分は盛土により1mほど高くなっているが、西半分は水田で耕作土、床土直下で遺構面に達する。現在の田面が標高9.4mほどで、遺構面は高いところで9.2m、おおむね8.9m前後である。ただし、I区では調査区の大部分を河川堆積が占めるため、安定した堆積がみられるのは、SD-01の左岸と右岸のSD-03までの範囲である。Fig.57~58は調査区の南・北の壁および中央に残したベルトの土層図である。大部分が河川堆積で、おもに粗砂とシルト層が細かく互層となる。土層名称は煩雑さを避けるため層群ごとに記述した。Fig.57南壁7の付近で層位を確認すると、現表土の下は、順にI青灰色粘土、IIアカホヤ火山灰層、III・IV・V灰色系の粘質土、VI暗青灰色砂質シルト、VII締まった青灰色砂となり、この間に部分的に粗砂が入っている。VIIの上面で8.2mである。SD-01を始めとする遺構は、おおむねこれらの灰色系の粘土・シルトを肩としてとらえることができた。さらに標高8m以下のSD-01の底のレベルになると青灰色の砂礫層が広がり、全城の基盤となる。この層にも倒木等の有機物が入る。北壁 (Fig.58-4付近) でもほぼ同様であるが、標高8.0m~7.5mには小枝、葉等の有機物を多く含んだ黒色粘土層が第4井堰付近まで広がる。

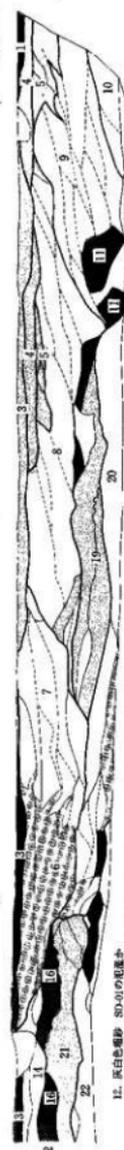
また、SD-01とSD-03間の北半は、青灰色の地山は見られず、北壁の15・21層のように黒色粘土・シルトが堆積する。これらはSD-01をはじめとする遺構の地山になるが、流木等の有機物、若干量の縄文土器を含んでいる。

L=9.50m



1. 切掛作らぬ土等
2. 黒灰色シルト
3. 赤褐色土 砂層を多く含む層である
4. 灰、暗灰色粘質シルト、対目層構造上にある
5. 灰色シルト下の粗砂層と、煤
6. 暗褐色シルト層の境層 Pg.59の2層と対応
7. 灰白色粗砂 一部粘分状層 6層とクミナ子状に相当する
8. 灰白色粗砂 粗砂を多く含む層
9. 灰白色粗砂 7より粗が強い
10. 煤の粗砂の高濃度 炭分状層
11. 暗褐色粘土アロクタ
- 6-11層はSD-01質土

L=9.50m



12. 灰白色粗砂 SD-01の程度か
13. 黒褐色粗砂 SD-06 質土 クミナ子状で煤れがある
14. 灰褐色粘質シルト SD-01の層 此より厚山
15. 上部は粘質土、下部粗砂 炭分状層 煤の境層と等えられるの不確定
16. 黒褐色粘土 砂を多く含む Pg.59 30層に对应
17. 灰白色粗砂
18. 黒褐色粘土
19. 黒褐色粘質シルト
20. 灰白色粘土
21. 灰白色シルト
22. 灰褐色粗砂
23. 暗褐色粘土
24. 黄褐色アガキ平火山灰層
25. 黄褐色粘質土
26. 黒褐色粘質土
27. 黄褐色粘土
28. 黄褐色粘質土
29. 黒褐色粘土
30. 暗褐色粘質シルト (粗砂層を非常に多く含む)

L=9.50m



- 粗砂
- ▨ シルト (灰色が薄い)
- ▧ 砂質土
- 粘土

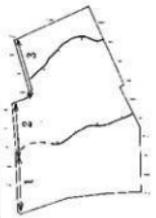


Fig.58 調査区北壁土層断面実測図 (1/80)



1. 盛り土? 水田等の掘削によるものか
後の掘削も含む
2. 層の厚さ 3cmまでの粗砂がレンズ状の自然堆積
調査区内の最厚部の厚さ 850-046
3. 1層中に伴う塊砂 層内にシルト・有機物が混入
中や硬く小さな塊の層内に混入
4. 3層に対応する1つの層を形成
5. 堆積色の粘質の強い塊砂
6. 5から10mm程度の粗砂 薄いシルト層が混在している
上部は透しなりの付着で最長の塊砂
7. 層の1層、2層の9層に対応し、この間を航行する
8. 7. 1層厚が薄くもれたあとの層より 灰色から茶褐色を基す
9. 粗砂がレンズ状に堆積
10. 各2層にとりなり認めが明瞭したあとの粘土の層より
各2層が混在する
- 11-13は井筒の周辺に堆積



11. 粗砂がレンズ状に堆積
下部には粘土がコア状に混入する
12. 粗砂層に薄いシルト層が混入している
13. 層1層厚さ 2層が混入した500-010の塊砂
14. 粗砂がレンズ状に堆積 層下にシルト・粘土が入る
15. 比較均一な粗砂
16. 粗砂がレンズ状に堆積
15-17は調査1層厚が混在したシルトを交互に含む層
17. 白色、灰色粗砂が混在したシルトを交互に含む層
18. 粗砂がレンズ状に堆積
層下にも粗砂が混入
19. 粗砂がレンズ状に堆積
層下の粘土が混入
20. 層の厚さが異なる 調査上の層砂
21. シルト層で塊砂物も多く含む
22. 20に近い
23. 層2層が混在 砂質土
24. 下部は堆山か
25. 下部は層まであり堆山か
26. 6-11の層
27. 粗砂とシルトが混在し互層になる
28. 小塊状の粗砂
29. 粗砂がレンズ状に堆積
層下の粗砂が混入
30. 層の厚さが異なる 調査上の層砂
31. 混入する粗砂が塊砂土 層下部に混在された堆山
32. 青灰色シルト
33. 灰色青灰色砂



- 粗砂
- ▨ 灰色粗砂
- ▩ 粘土
- ▧ シルト (灰色が薄い)
- 粘土

Fig.59 中央ベルト南壁土層断面実測区 (1/80)



1) 西半



2) 南半

Ph.38 中央ベルト土層 (南から)

2. 縄文時代包含層と出土遺物

調査終了間際、第四紀学会の巡検が当調査地点で行われ、古墳時代の遺構面に見えかくれている黄褐色の層が火山灰であるとの指摘を受け、その後、この火山灰はアカホヤ火山灰であることが判明した。

河川調査中にも少量ながら縄文時代の石器、土器が出土しており、火山灰との関係付けができる資料が期待されるため、火山灰層の堆積する範囲を中心に包含層の調査を行なった。

古墳時代の河川の遺構面は青灰色粘土層上面であるが、2ヶ所で下層の火山灰層が露出している。そこで、Fig.60に示した地点で火山灰層の範囲を中心に掘り下げ、遺物の検出を試みた。

南西側のSD-01西岸の地点では、Fig.57に見られるような火山灰層の広がりが見られた。火山灰は5cmから厚いところで10cmの堆積で、SD-01への緩やかな斜面に堆積している。間に粘質な部分がある。低い部分に溜まり、再堆積を含めて削平をまぬがれたものと考えられる。この上に乗る青灰色粘土と下層の青灰色粘土を掘り下げたが、遺物を検出することはできなかった。



Ph.39 包含層調査区全景 (北西から)

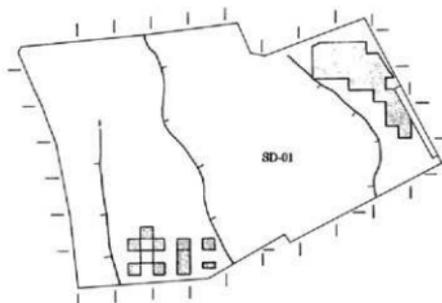


Fig.60 縄文時代包含層調査区 (1/800)

北東側、SD-01の東岸の地点ではFig.61の溝状の落ちの部分に火山灰の広がりが見られた。この図のコンタは火山灰を除去した面のものである。浅い溝状のくぼみに火山灰が堆積したことがわかる。厚いところではFig.62b-b' (Ph.40)に見られるように厚さ25cmにもおよぶ。火山灰層も細かく分層することができ、再堆積したことがうかがえる。この地点では、ほぼ全体にSD-01の氾濫の粗砂層が被っており、その下から掘り下げたところ、2層(火山灰)の上・下層から土器・石器が出土した。上層の1層は暗灰色の粘土層で後世の流路で削られ、東側でやや厚いものの、薄くしか残っていない。このためか遺物(石器)を検出したのは東側の部分のみである。A1グリッドでは1cm大の礫と炭化物が約1m×2mの範囲に集中して散乱する部分があった。この部分での遺物の出土はない。下層の3層は暗青灰色粘土で薄く全体に広がり、黒曜石が1点出土した。4層は灰色の粘土混じりの粗砂層で木片、種子等

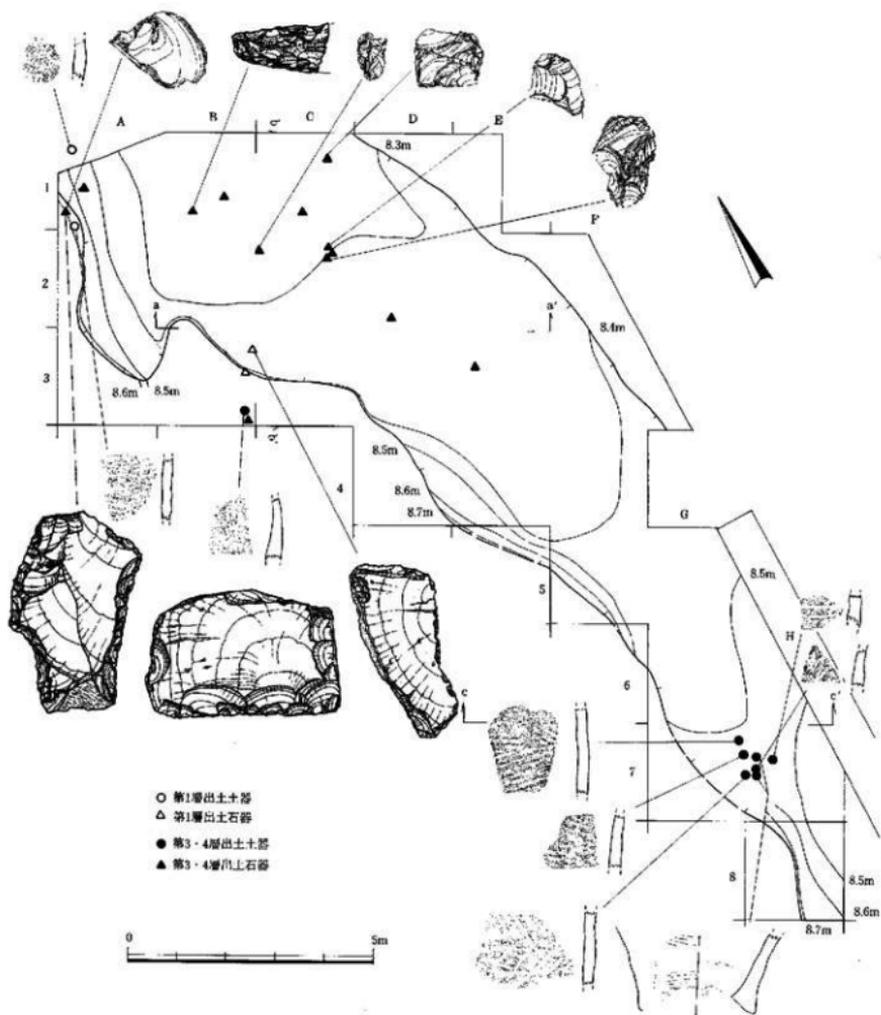


Fig.61 包含層遺物出土狀況 (1/100)

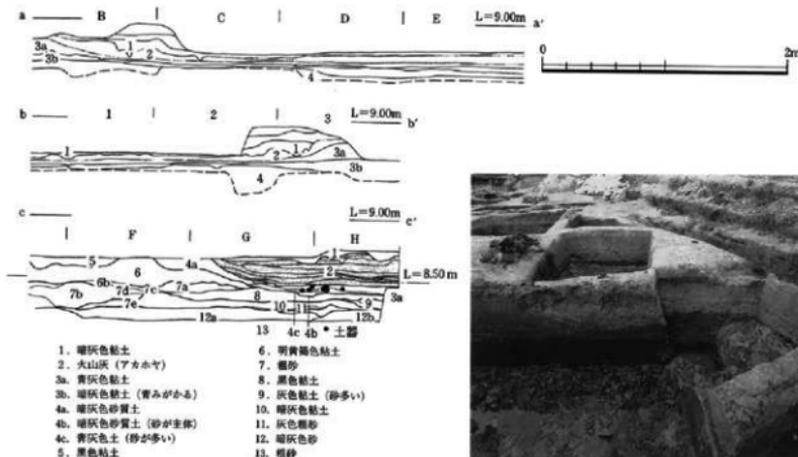


Fig.62 包含層土層断面実測図 (1/40)



ph.40 包含層土層 (c-c')

の有機物が混ざる。北側を中心に石器、7Hグリットで土器が出土した。

1) 包含層出土土器 (Fig.64, Ph.41)

1209～1214は1層からの出土である。1209は内外面とも条痕を施す。外面が調整による粘土の動きにより器面が粗れているのに対し、内面はナデ調整により平滑である。薄手で2mmまでの砂粒を多く含む。1210の外面には植物繊維によるナデ調整が見られ、内面と外面の半分は粗れているが平滑。1211は内外面ナデ調整。1212は外面は丁寧なナデ調整で淡灰色、内面は指おさえを施し暗灰褐色を呈す。細砂粒を含む。1213、1214は薄手で内外面ともナデ調整で1mm大砂粒を含む。

1215～1221は火山灰層下の3、4層出土である。1215は深鉢の平底の底部で、1/3からの復元である。外面は2枚貝による横方向の条痕の後軽くナデしており、指おさえ痕が見られる。内面には削り状の調整痕が一部見られるが全体にナデている。細砂粒を含み、胎土はきめ細かい。カクセン石を含み、茶色を帯びた灰色を呈す。1216は1217と同一個体で外面に横、斜方向の貝殻条痕、内面はナデで横方向の砂粒の動きが見られる。1217は植物繊維束などによる横方向の削り調整の後に2mm幅の沈線（沈線）を施す。沈線は、拓本の右上から右下、次に右上から左下という単位で施している。器面は灰茶色でくぼんだ部分は暗褐色を呈す。内面は器面が粗れている。ナデ調整か。2mm大の砂粒を少量含み、胎土はきめ細かい。1218は1217と同一個体と思われる。内面に植物質による擦過痕が見られる。1219は1217と同一個体と考えられる。外面は条痕、内面は粗れている。1220は外面は2枚貝条痕、内面は刷毛目状の擦痕が見られる。色調、胎土から1215と同一個体と考えられる。1221は器面が粗れており詳細不明。

アカホヤ直下の条痕文土器については、塞ノ神式の範疇か義式の初期のもので見解が分かれている。今回出土した土器には1215のような平底の条痕文土器が見られ、アカホヤ直前とされている土器群に近いものと考えられる。問題となっている隆帯文はないが、鹿児島や大分と類似した状況が早良平野でも予想され、今後この時期を意識した遺物包含層の調査が必要である。

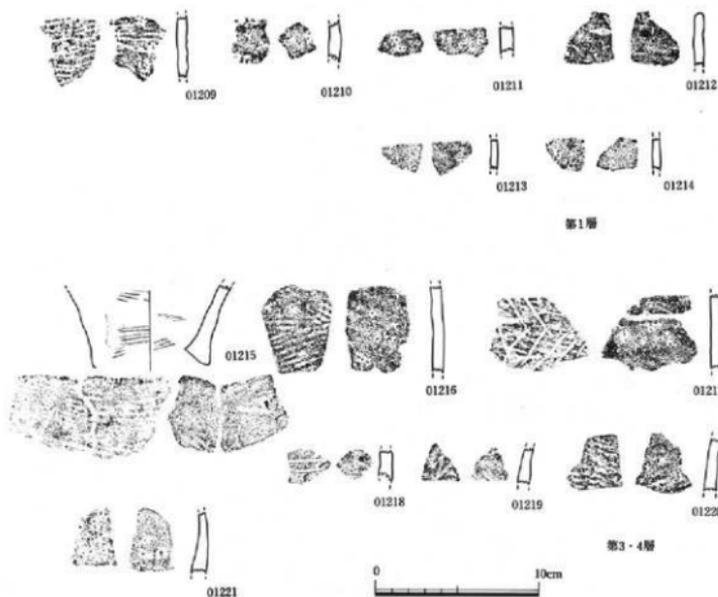
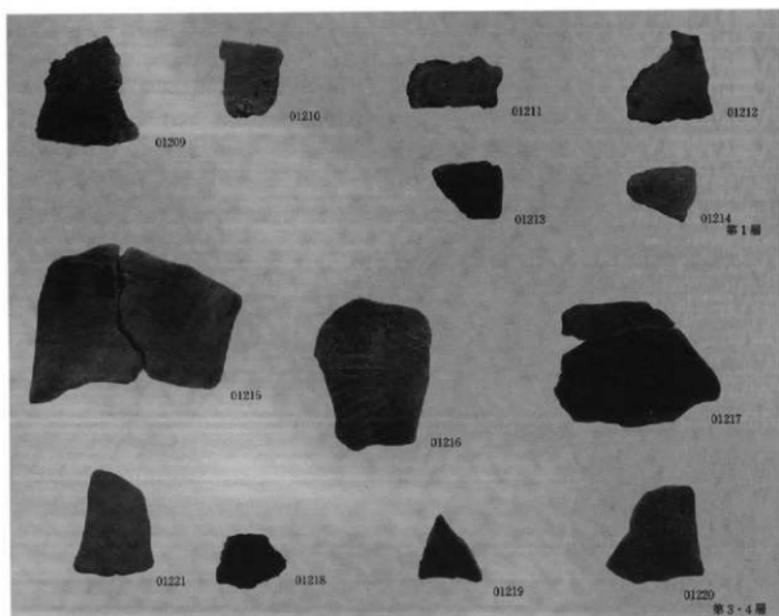


Fig.63 包含層出土土器実測圖 (1/3)



Ph.41 包含層出土土器

2) その他の出土土器

(Fig.64)

1178～1224は各流路からの出土である。1178は瓶製の深鉢の口縁部である。横方向に8mm幅の調整痕が残り内面は擦痕が見られる。外面黄白色、内面暗褐色を呈し焼きは硬い。1222～1224は浅鉢である。1222は内外面とも研磨調整を施し灰茶色を呈す。黒川式併行期。1223・1224は摩耗し詳細不明。刻目突帯文に伴うものか。

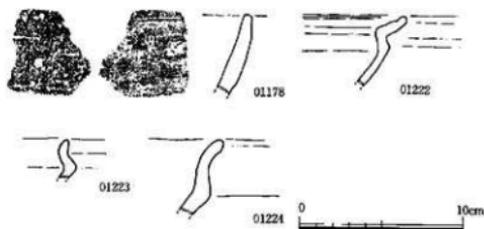


Fig.64 採集土器実測図 (1/3)

3) 出土石器 (Fig.65～68, Ph.42・43)

本調査では、アカホヤ火山灰層（以下、Ahとする）を挟んだ上下の層から石器および剥片・削片が出土した。ここでは、この包含層出土石器と遺構検出時および弥生時代以降の各時期の遺構から出土した縄文時代と先土器時代の石器についてみていくことにする。

2023～2025はAh上位層出土で、2023は黒曜石を、他は古銅輝石安山岩を素材としている。2023は、表皮を残す不定形剥片の先端に主要剥離面から抉りを入れる形で2次加工を加えている。2024は不定形剥片の素材打点を残し、右縁辺は表裏から、左縁辺は主要剥離面に2次加工を加えた削器である。2025は幅広の横割ぎ剥片を素材とし、縁辺に2次加工を加え、長方形に整形した削器で重さ46.86gを測る。

2016～2022はAh下位層出土で、2016は瑪瑙、2017は古銅輝石安山岩、他は黒曜石を素材としている。2016は一見フリント様の縦長剥片を素材とし、素材打面・表皮の残る先端を残し、両側縁に主要剥離面から2次加工を加え鋭い刃部を造り出している削器で、重さ54.91gを測る。2017は石匙か。2022は不定形剥片を素材とし、2次加工により基部を造り出している石銚？で、6.32gを測る。2021は不定形剥片を素材とし、素材打面と一縁辺を残し主要剥離面から2次加工を加えた台形石器状の剥

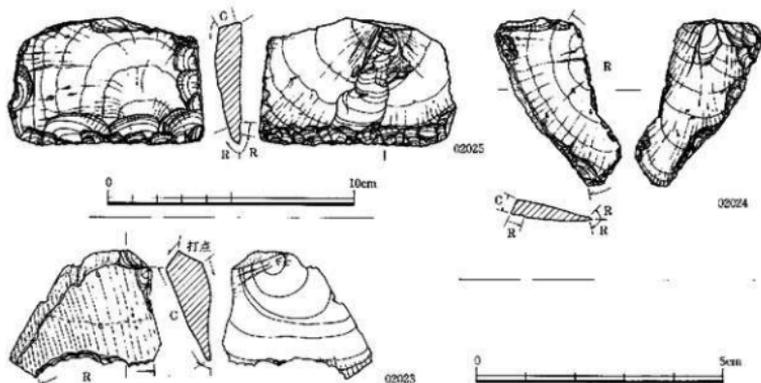
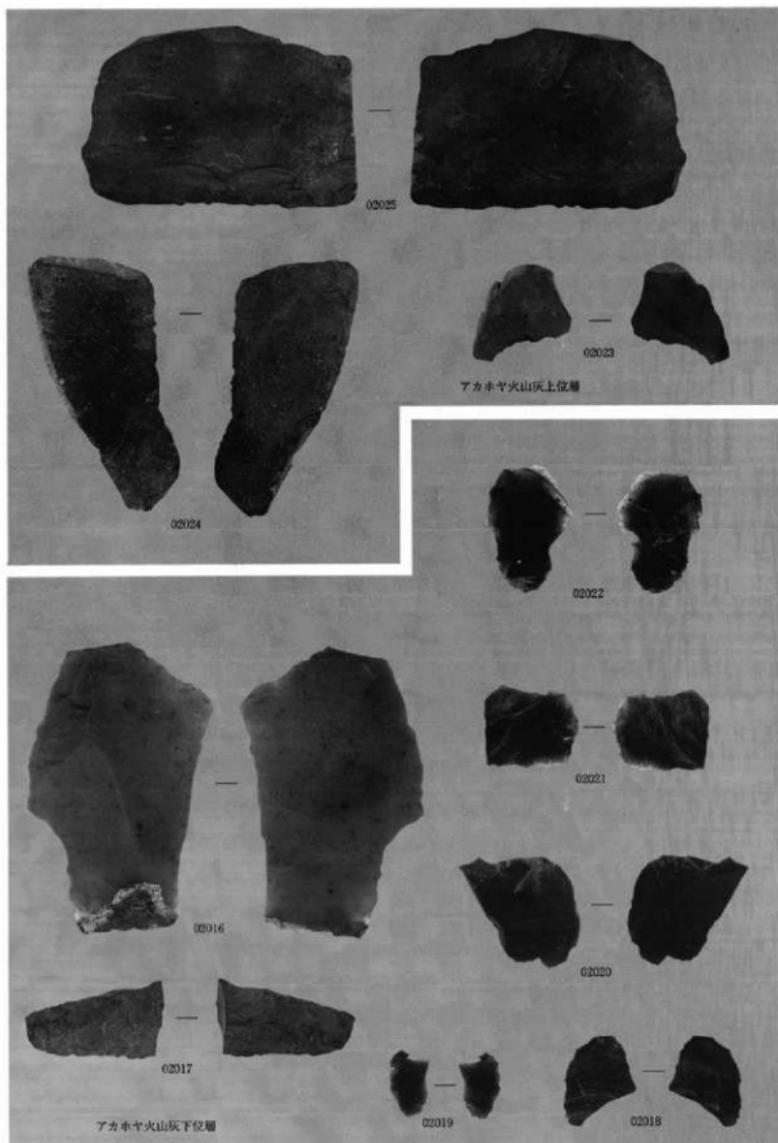


Fig.65 第1層（アカホヤ火山灰上位層）出土石器実測図



Ph.42 包含層出土石器

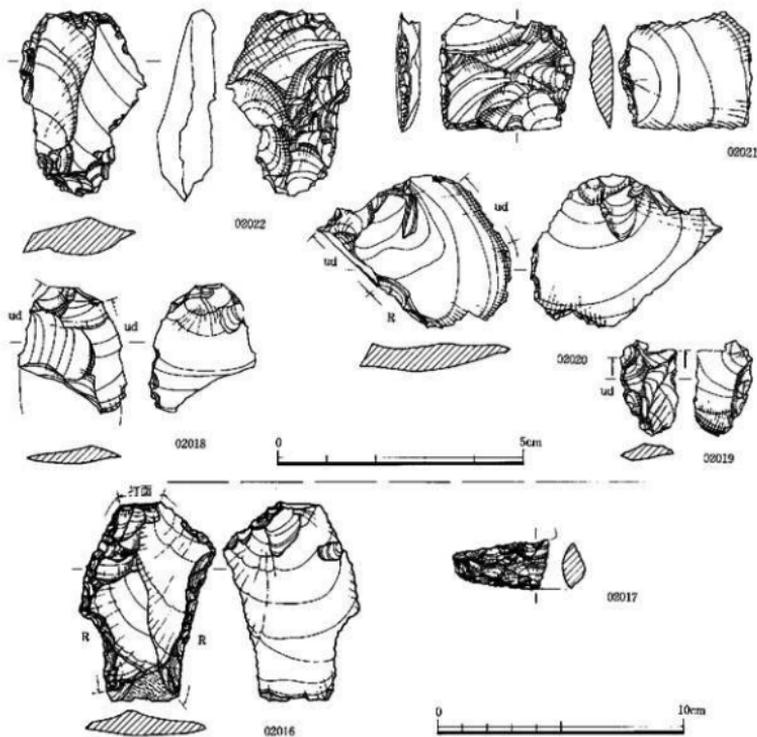


Fig.66 第4層（アカホヤ火山灰下位層）出土石器実測図

片石器で、重さ3.11gを測る。2018～2020は縁辺に刃こぼれがみられる。

2026は、黒曜石製の不定形剥片を素材とした先上器時代のナイフ形石器で磨耗している。2007～2010は黒曜石、2015は石英、他は古銅輝石安山岩を素材としている。2007～2010は打製石鏃で、重さ2.04g・3.07g・1.83g・0.94gを測る。2012・2014は石匙で、前者は重さ20.94gを測る。2004は槍先形尖頭器か石匙であろう。重さ21.16g。2005・2006・2013は削器で、2005は重さ31.8gを測る。2011は礫器（搔器？）で重さ274.6gを測る。

以上の出土石器はナイフ形石器を除き、各石器の形態・製作技法から縄文時代前期前半のものといえよう。

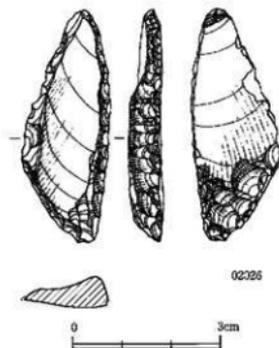


Fig.67 出土ナイフ形石器実測図

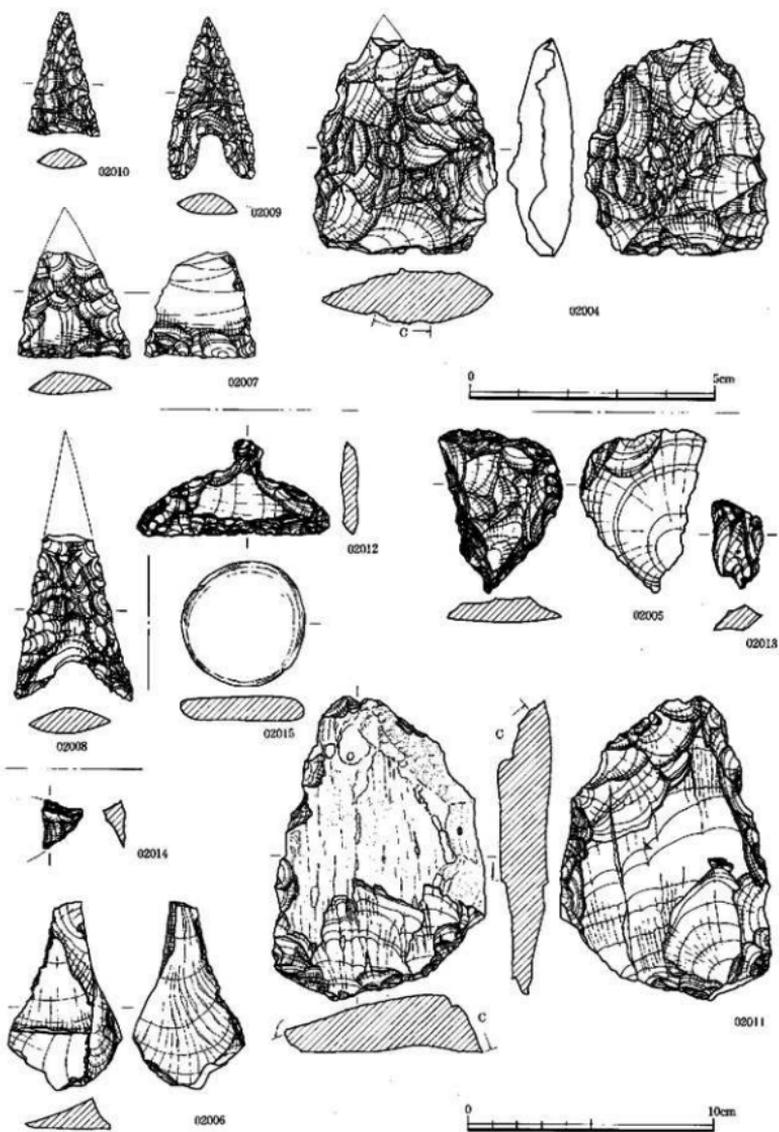
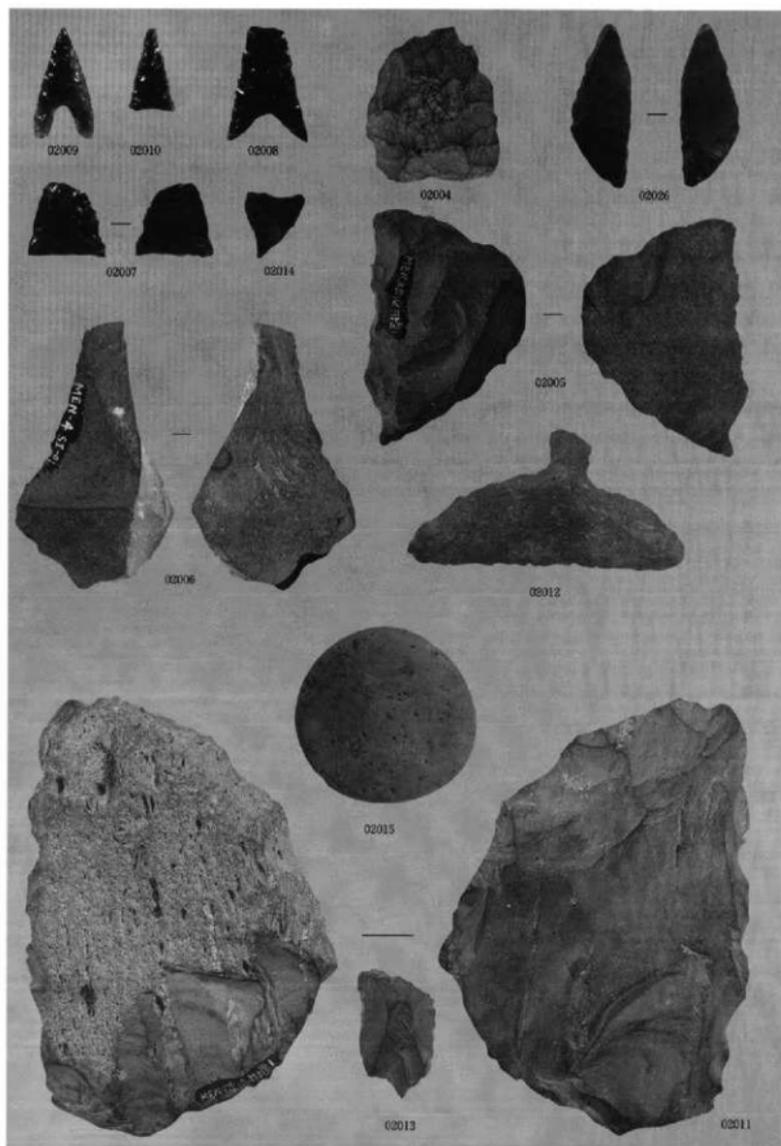


Fig.68 出土石器实测图



Ph.43 採集石器

3. 第1号溝 (SD-01) と出土遺物

1) 第1号溝および第1井堰 (Fig.69～72, Ph.44～46)

I区の東側の大部分を幅約25mの北流する河川堆積 (SD-01) が占める。これは幾重にも重なりあった河川によって形成されたもので、井堰が作られ複雑な堆積を示す。井堰は、最上流には最大幅20m程でアーチ形を呈す第1井堰、河川の護岸となる第2欄、第2欄の最上流部にアーチ形に作られた第3井堰、第1井堰の下流の第4・5井堰がある。SD-01は南壁の屈曲する部分で2mほど途切れており、少なくとも2本の溝の切り合いがある。途切れた部分では流れに直交する段落ちもあり、重なる複雑さを物語る。このうち把握できる溝・河川をSD-01a～01dの4本に区別して記述する (Fig.69)。

SD-01aは幅2.5m、深さ0.7mの溝で、粗砂で一度に埋まった感がある。軽く蛇行し、南壁の32層から中央壁の2層、北壁の7層に至る。無遺物である。SD-01bは第2欄に伴うもので、中央壁で11・12層にあたる。南壁・北壁でどれにあたるかはっきりできていない。SD-01aに切られる。幅4.5m、深さ0.7mほどの規模で、須恵器が出土し、6世紀後半の埋没と考えられる。SD-01cは幅3m程で粗砂で埋まる。南壁の15層からかなり蛇行しながら第1井堰の最鞍部付近、中央壁の6層、北壁の9層に至る。SD-01dの流れの最終段階か。SD-01dは、第1井堰に伴う流れで幅9～10mを測る。この流れに第1井堰が作られる。SD-01はさらに細分できよう。

幾重にも重なる杭、矢板の列からなる井堰で変形したアーチ形を呈す。アーチの弦の部分では10m



Ph.44 第1井堰全景

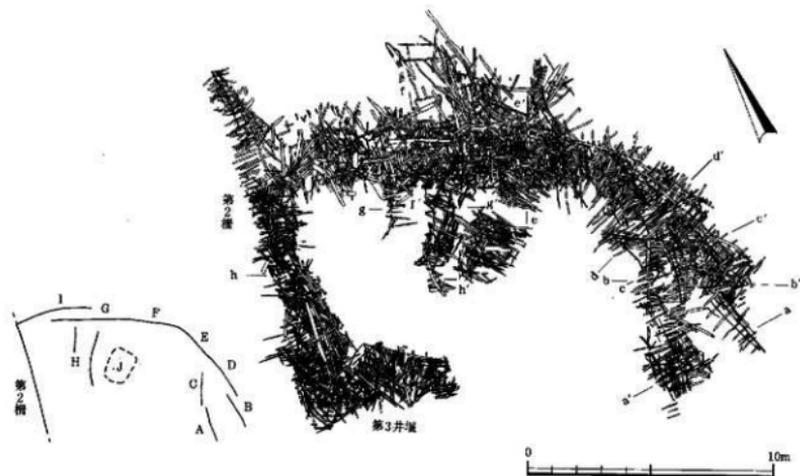


Fig.70 第1井塚平面図 (1/200・1/400)

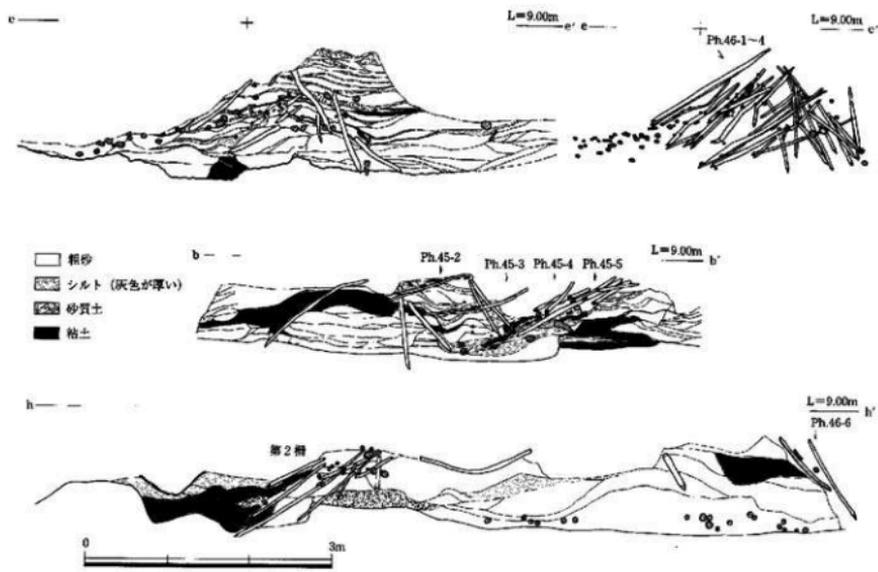


Fig.71 第1井塚土層図 (1/60)



を測る。しかし、この形も度重なる作り足しによって形成されたもので、当初からのものではない。杭は径6~7cmほどのものが多く、長いもので2.5mを測る。先端は加工し尖る。

調査は、河川の上流から見える部分から掘り進み、また、井堰の解体を行なった。杭は複雑に打ち込まれたなかにも、杭の種類（矢板等の形状、太さ）、長さ、高さ、角度、杭の間に入る横木等によって同時に打ち込まれた単位を確認できるものがある。解体にあつては極力この単位の把握に努め、平面図、レベルの記録、樹種サンプルの採集を行なった。調査時にはA~Jのブロックに分けて進めた (Fig.70)。

右岸端のA・B・Cブロックは4・5段階の構築が行なわれているが杭の密度は薄い。杭または矢板を3、4mの単位で横に並べ、その頭の下に径10~12cmの太めの横木を枕木状に敷いたり、幾本もの径2~3cmの細い横木を覆うように並べて一つの単位をなす。単位の間は粘土、粗砂が重なる。このように単位のわかるものは、多少は打ち込まれてはいるものの、並べるという意識のもとに配されている (Fig.71a-a'・b-b'・c-c', Ph.45-2~5)。

これが、D・Eブロック (Fig.71d-d') になると杭間が密になり、単位は不明瞭になる。杭の先端のレベル、太さ、細い横木等によってある程度は把握することができる。

F・G (Ph.46-1~4) ブロックの井堰の中央部分では、横にも前後にも密になり、打ち込む角度



Ph.45 第1井堰構築状況 (1)

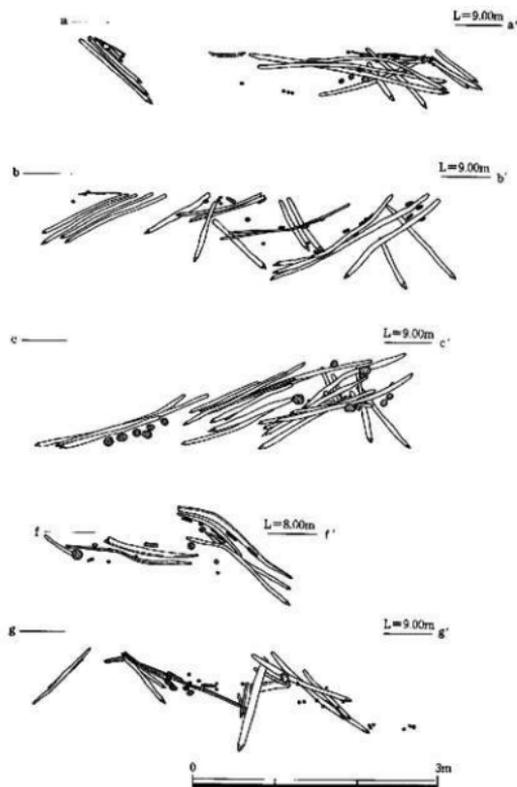
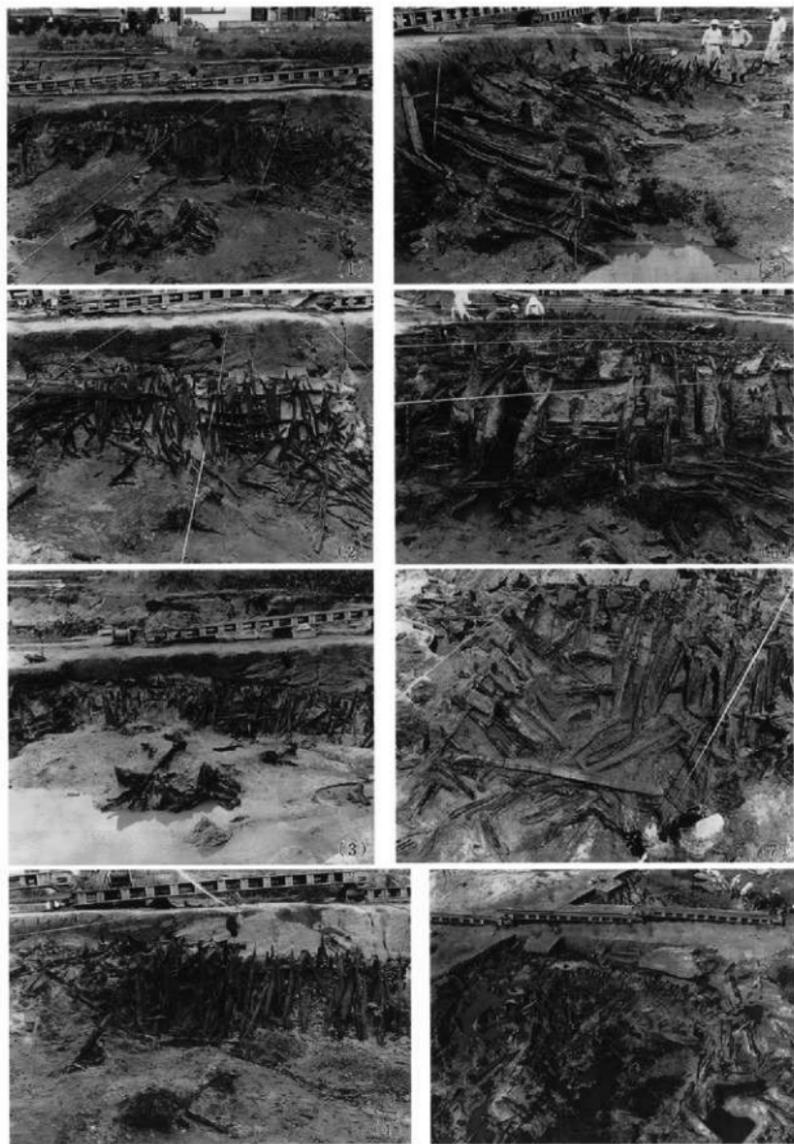


Fig.72 第1井堰断面見通し実測図 (1/60)

クとIブロックで様相が変わる。IブロックではPh.46-1の中央付近にみられるように地山のレベルが上がり、杭や、横木の単位もPh.46-3から4のように途切れる。断面f-f'で見られるように、I群では杭・矢板の角度は浅くなり、量的にも極端に少なくなる。特に下流側の構築開始段階でG群との違いは顕著である。(Ph.46-5手前がI群、奥の立った杭がG群)アーチ形の西側の翼を成す部分(H群)は他の部分と比べると小規模である。矢板、杭列を確認できるのは5mほどで、しかもPh.46-6のように疎らで、南北方向に2列のみである。後ろの列はFig.71のように塗られた堆砂・粘土の層に打ち込まれ、前列も高い位置にある。後列はI群に直行し(Ph.44-7左斜め方向がH、横方向がI)、杭の切り合いから新しい。前列下部の横木の密集(Ph.44-6)はG群の数段階目に対応する同様の横木に続き、また、その接合部には杭が小さな弧を描きながら打たれており同時期とみられる。このことから、井堰の最終段階より前に形成されたものと考えられる。さらにこの部分にはFig.71g-g'で見られ

も愈になる。これらの杭は、他の部分でも同様であるが、下流側から作られ上流側に補強、追加を行なっている。この部分では、まず流れの方向に径10~15cmの長い材を置き、流れに直行した径15cmほどの丸太を枕に径13~15cmの太めの杭を並べる。さらに下流方向に径10cmほどの杭が打たれる。この下流方向への立杭は他の個所でも下流側に多い。さらに、上流側にはPh.46-1~4のように杭、横木を絡めて厚く構築していく。その途中の段階で、横方向の材がFig.71e-e'の上流から下流に上がっていく個所がある。平面的にはPh.46-2の右下端部分の斜めに横たわる一群に当たり、補強、かさ上げ等の機能を果たすものか。これは井堰の前面中央に横たわるJブロックに続くものと考えられる。Jブロック部分はほぼ水平であるが、井堰部分では井堰の杭に従ってレベルをあげる。また、e-e'断面の2m東が井堰の最終部になり、杭の現存する頭8.4mを測り、c-e'部分より低い。最終部から第2欄にぶつかるまでの部分は、Gブロック



Ph.46 第1井堰構架狀況 (2)

るように河川の流れの方向に埋められた木があり、この部分の杭以前に上盛りのみの構築があった可能性もあろう。

次に各井堰の構築順序である。前後は切り合いや重なりで比較的分かるが、横との先後は単位のレベルでははっきりといえない。ただブロックのレベルではある程度のことと言えよう。まず、A・Bブロックは杭の単位の重なりが少なく本体部分なしには機能しない。拡張してつけ加えられたものという感が強い。Hブロックも先に見たようにGブロックのある時期に形成されている。ただし、この部分には土盛りによる岸があった可能性がある。こうすると、まず、やや高い位置にI群が築かれ、河川の中心に向かってG・F群が築かれる。I群はG・F群とはまったく別物の可能性もあるが、低い位置に築かれ補修が多くなされたG・Fとは異なった様相を示しているのかも知れない。こうしてみると当初は、直線的もしくは緩い弧を描く半月形を呈していたのと考えられる。これに少なくともH群が築かれた段階には、この部分は盛土がなされ、I群は機能していない。そして、H・C・B・A群が順次築かれ、U字形の井堰が形作られたものと考えられる。次に、2号井堰との関係であるが、Fig.71g-g'の土層ではっきりと先後関係はでないが、堆積は第1堰側から西へ堆積しており、2号堰の後出が推測される。また、I群は第2橋に切られる。

遺物は土器の他、三又鉞、堅杵等の木製品が井堰の杭の中やHブロック西、南の盛り土の中から出土している。

出土土器 (Fig.73~75・78, Ph.47・48・50)

第1井堰からはFig.73~75のように刻目突帯文土器から土師器が出土した。量的には弥生中期が最も多く前半のものが目立つ。壺・鉢も出土しているが、甕がほとんどである。しかし、破片が小さく、器面が摩耗しており器面調整等は不明である。周辺からの洗い出しによると考えられる。これに対しFig.75の土師器は摩耗していない。第1井堰の時期に、4世紀代におさまるものと考えられる。C"の測定では、第1井堰の杭にB.C.380という値がでているが考え難い。ただし、河川の流れ自体は古くからあってもおかしくはない。1023・1076・1087・1088は刻目突帯文土器で、中でも新しい時期と考えられる。いずれも1mm大の砂粒を多く含み、小片で摩耗を受ける。01024は弥生前期の甕で口唇部の下端に刻目を施す。器面は刷毛目をナデ消している。土師器は、鉄分の沈着等で変色しているものも多いが、刷毛目も残りあまり風化していない。1060は井堰の最低鞍部付近の杭に挟まれた状態で出土した丸底甕である。風化が少なく残りがよい。外面は縦方向の刷毛目を軽くナデ消し、4mm幅をおいて縦方向に暗文を施す。内面は横方向の刷毛目のはっきり残る。

第2橋からはおもに弥生中期から6世紀代の須恵器が出土している。(Fig.75・78)やはり、弥生土器は摩耗が著しく、遺物の時期を定めない。中期中頃から後半のものが出土している。1089は台形底を呈し、若干の上げ底である。刻目突帯文の甕の底部と考えられる。1081から85は須恵器の坏である。いずれも小片で径にはやや疑問が残る。1086は完形の坏身で第2橋の中ではもっとも新しい。天井部は回転へう割りが残り、2本の平行する浅いへう記号が施される。1077は須恵器の甕で外面は平行叩き痕が施され、内面は当て具痕がナデ消されている。

第3・4井堰からは土器は出土していない。

第5井堰からは1090の土師器の短頸甕が完形で出土した。2次焼成を受けておりところどころ器面がはげ、煤が付着する。外面体部は斜め方向の粗い刷毛目、頸部はナデ調整を施す。

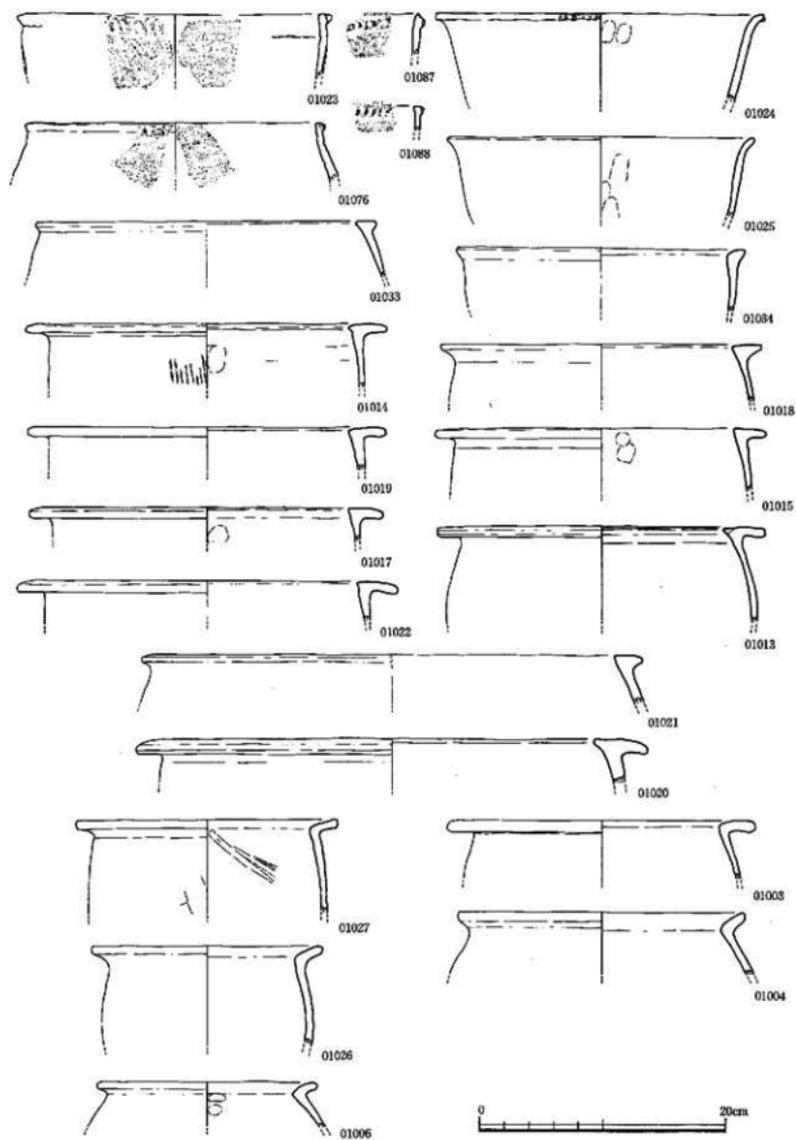
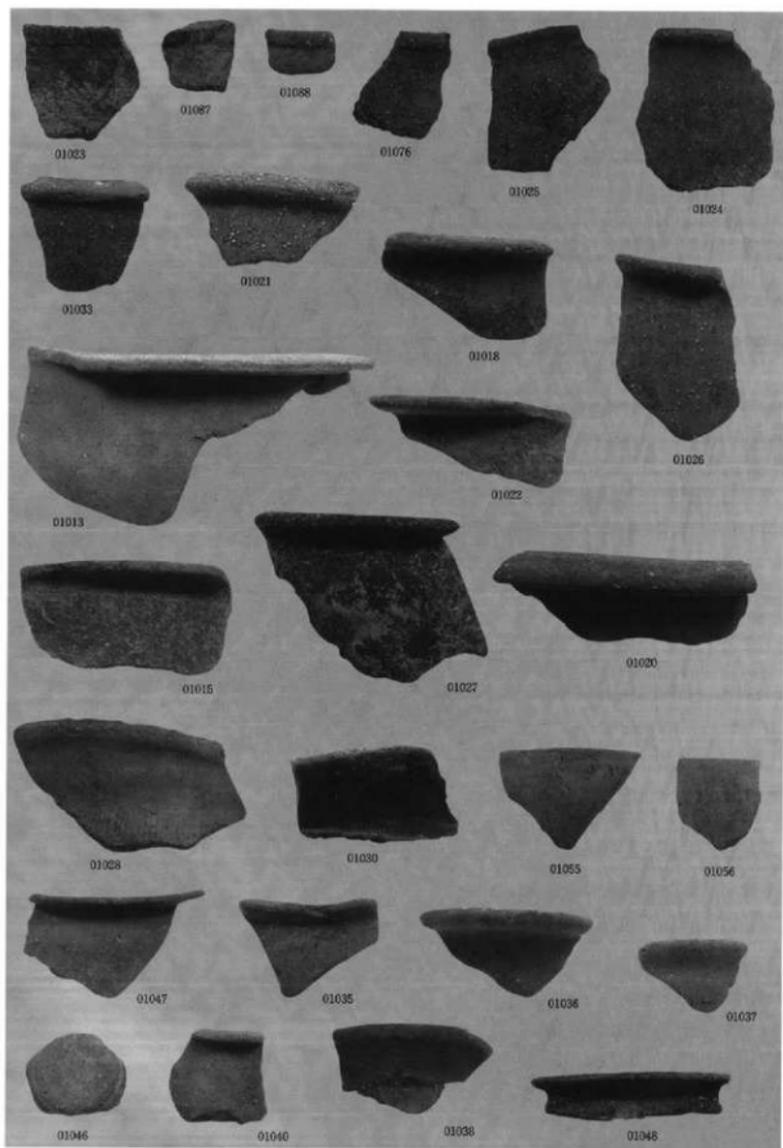


Fig.73 第1号溝および第1井堀出土弥生土器実測図 (1)



Ph.47 第1号溝出土弥生土器

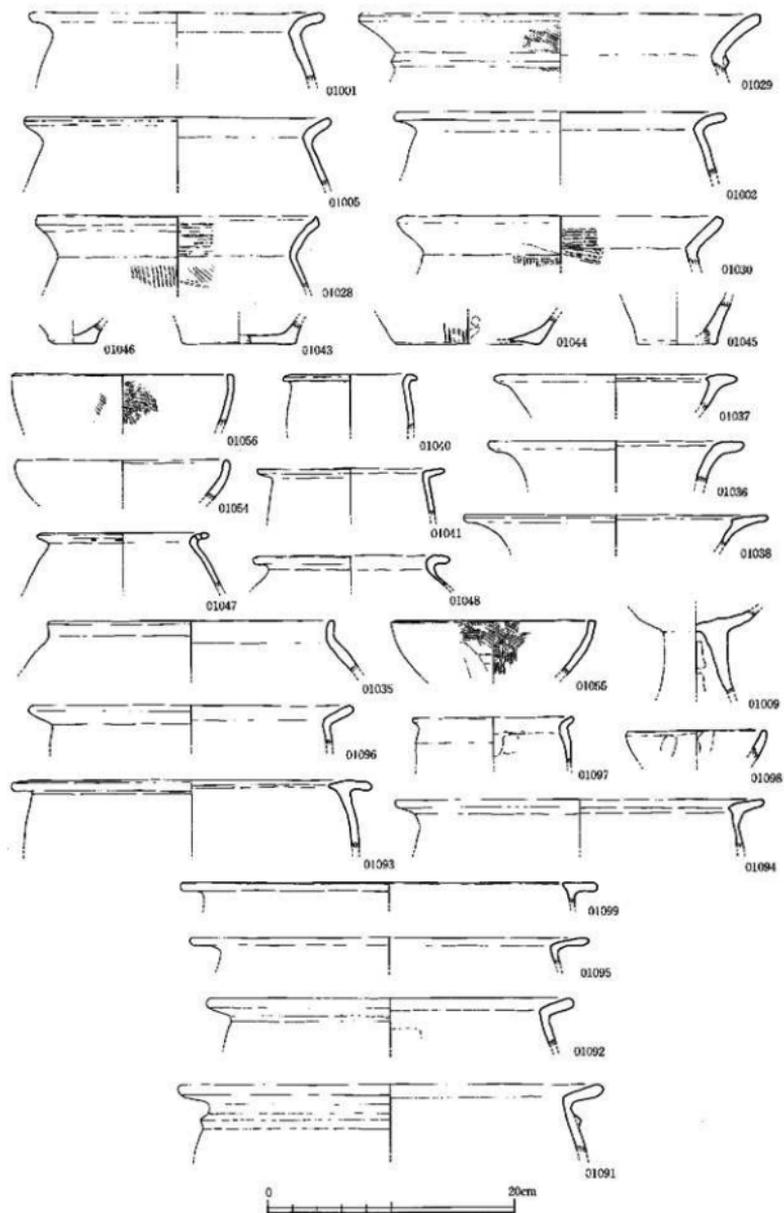


Fig.74 第1号溝および第1井塚出土弥生土器実測図(2)

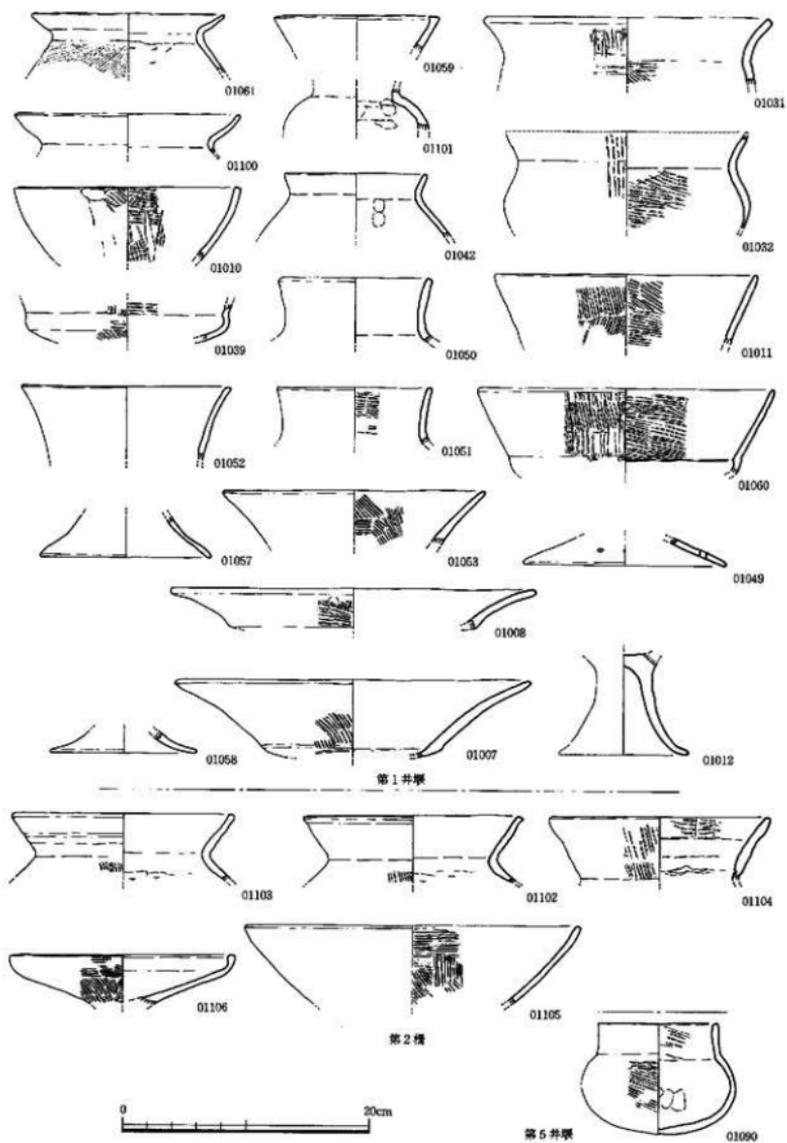
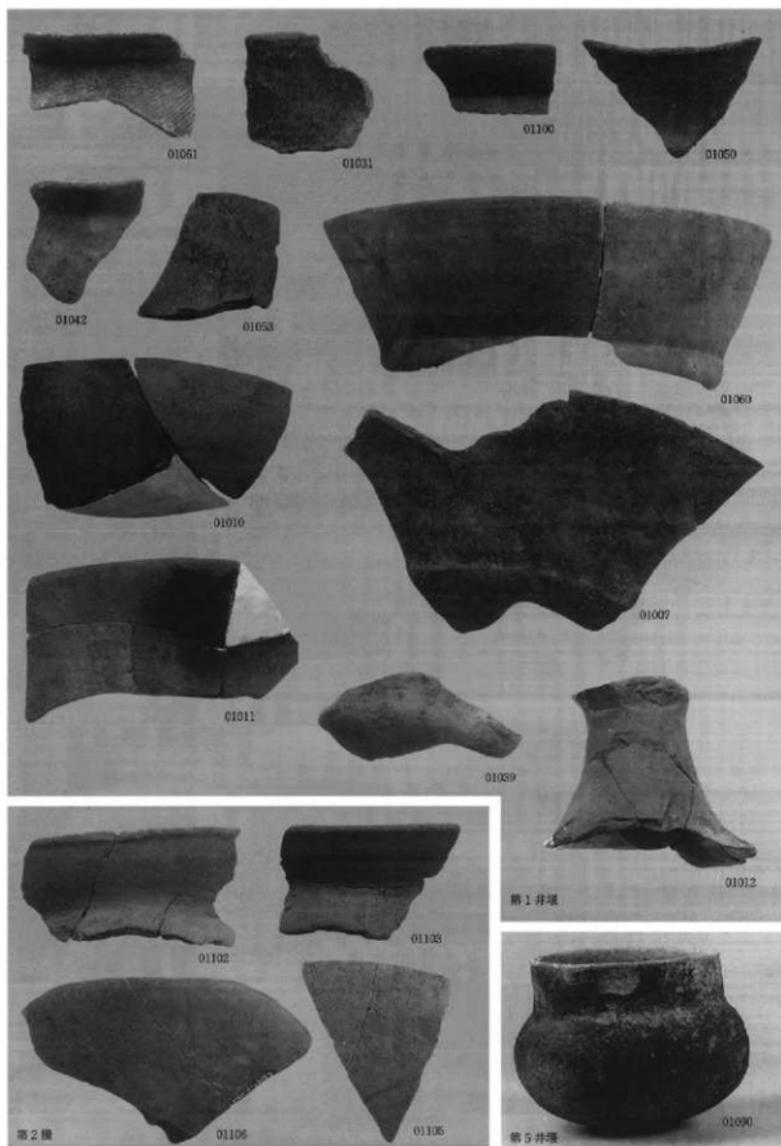


Fig.75 第1号溝第1・5井層および第2層出土土器実測図



Ph.48 第1号溝出土土師器

2) 第2柵 (Fig.76 · 77, Ph.49)

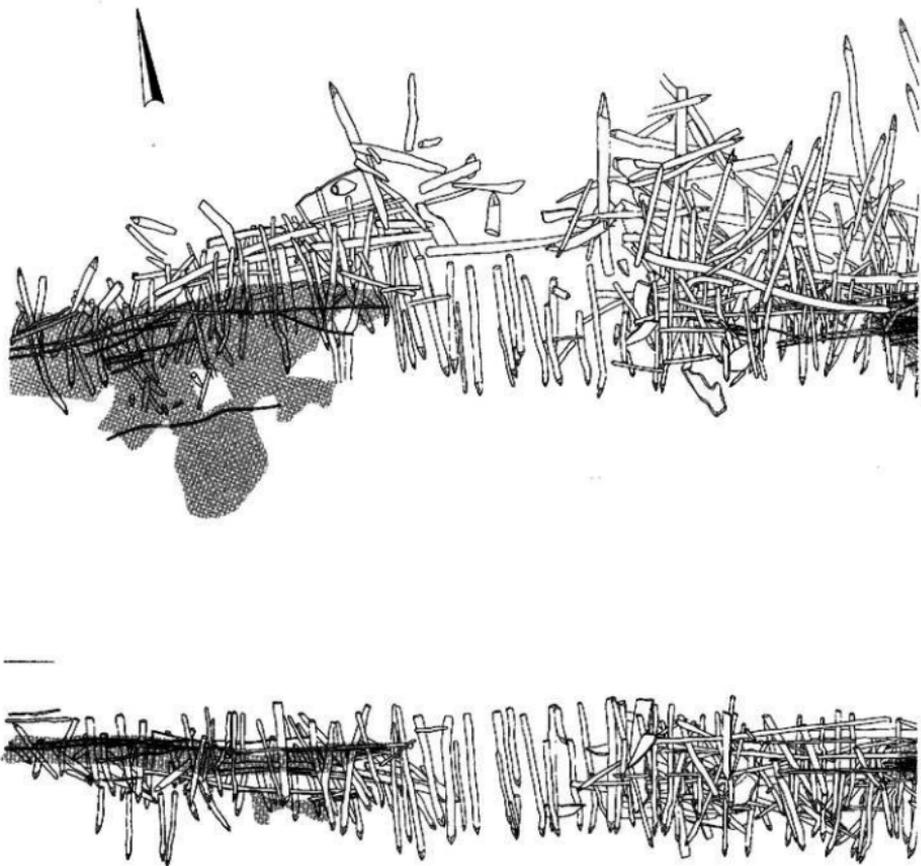
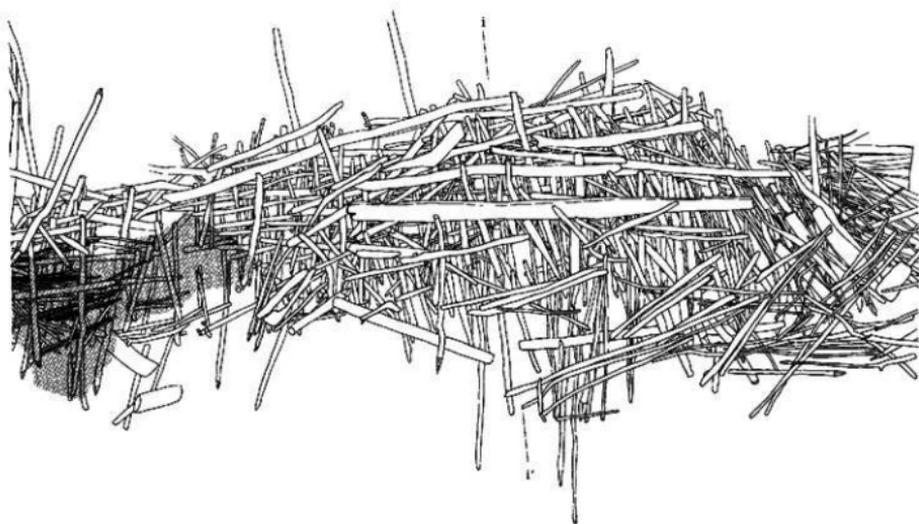
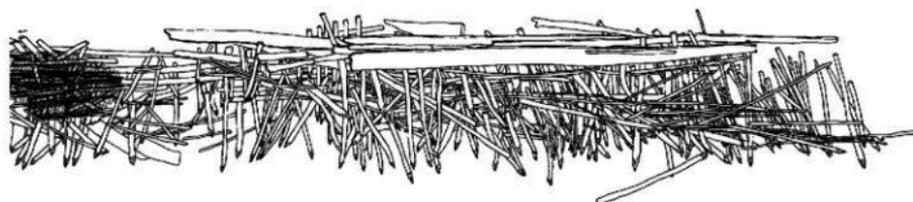


Fig.76 第2柵実測図



L = 9.00m



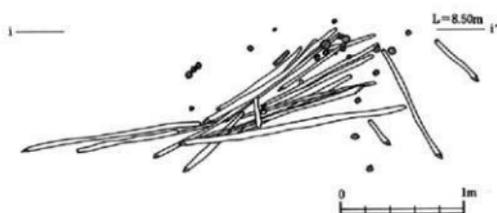
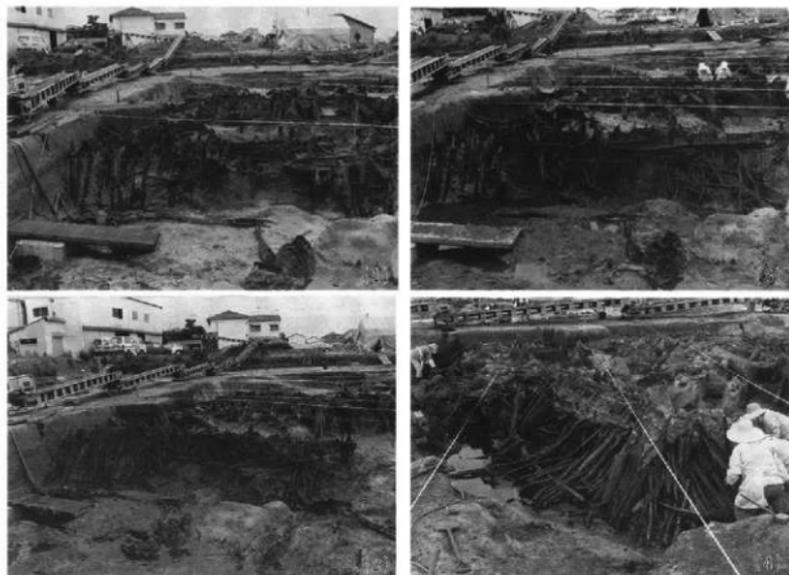


Fig.77 第2橋断面見通し実測図 (1/40)

第1井堰とは違って、SD-01bの流れの方向に沿って築かれ、護岸施設と考えられる。中央ベルトの12・13層 (Fig.59) がこれに伴う溝だが、南壁では対応するものがはっきりしない。杭の裏は第1井堰との間に堆積した河川堆積で、粗砂を中心とする。

井堰の上流側の起点は第3井堰から半円状に張り出すように弧を描き、径6～7cm大の杭を密に重ねて築く。この南側の端部に近いほど杭は多く打たれる。断面g-g'で見られるように、河川の中心ほど杭は角度を増す。また、杭の頭には、長さ3～4m、幅12cmほどの板材を横におさえるように配す。また、径2～3cmの横木を中位付近を中心に並べている。また、ところどころに葉状の繊維が敷かれたように見られる。これは井堰とは接しない河川中にも見られる。北側に行くほど杭の密度は薄くなり、横におさえる木も5cm大と小振りになる。北端は14mほどのところで途絶える。この先は流



Ph.49 第2橋構築状況

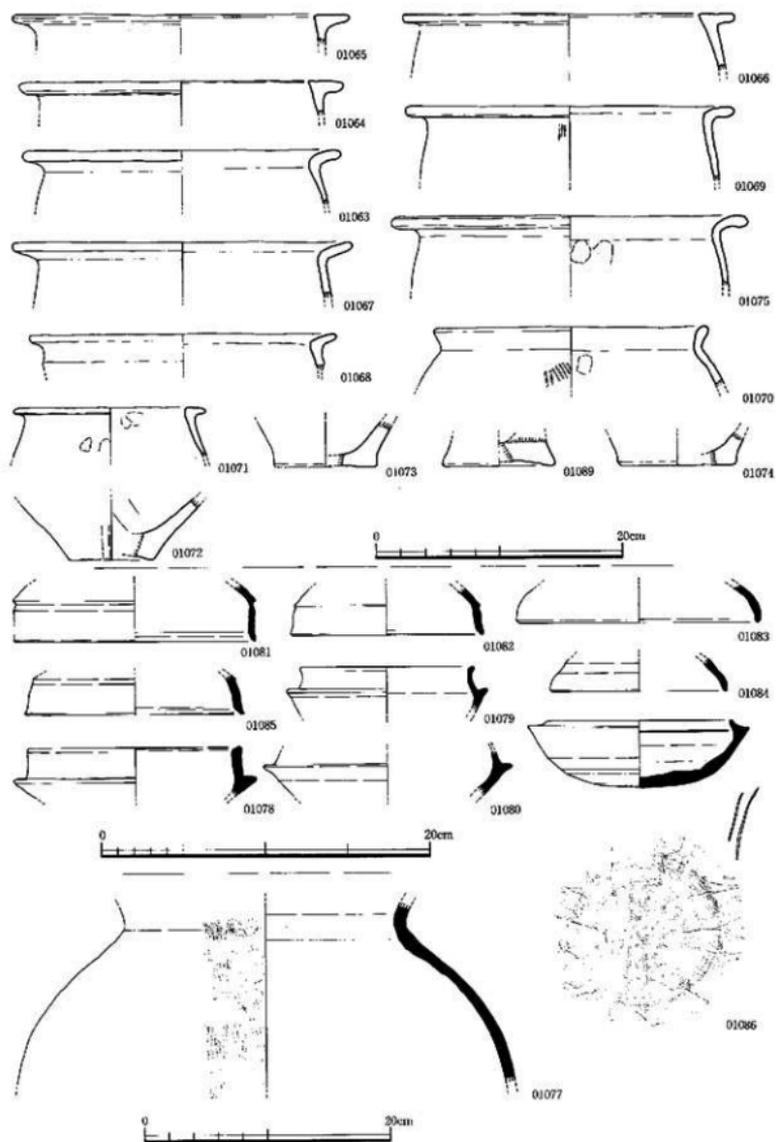
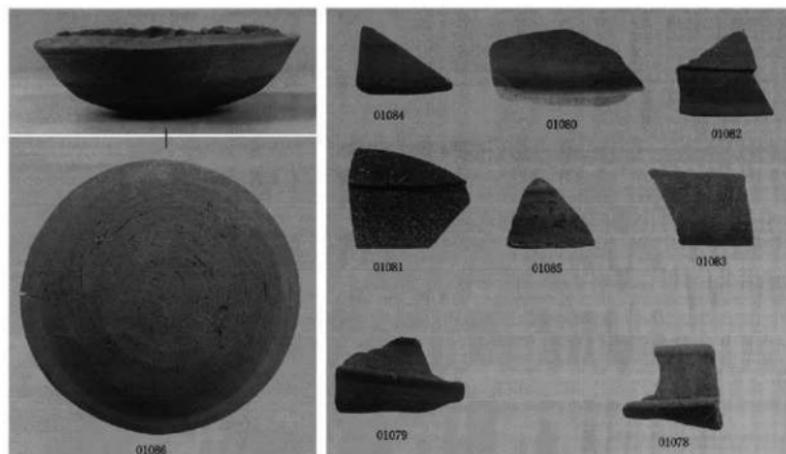


Fig.78 第1号溝第2桶出土土器実測図



Ph.50 第1号溝第2欄出土須恵器

されて消滅した可能性もあるが、杭のレベルも上がっており、もともとここで終わるとも考えられる。

遺物は先にみたように弥生中期の土器から須恵器が河川SD-01Cから出土している。欄は須恵器の年代の6世紀中頃から後半の時期に比定できよう。また、杭群中より二又鉄等の木製品が出土している。

3) 第3井堰 (Fig.79・80, Ph.51)

第2欄の北端につながる幅5mほどのアーチ形の井堰である。径6～7cm、長さ1.5mほどの杭で形作られる。厚さ1m弱を測るが杭自体は密ではない。第1井堰・第2欄で見られるような横木は見られない。井堰の弧の西側は、第2欄の端部からの杭と重なり、第2欄の方が密度が高い。対応する流れは明確なものはない。南壁の33～38層あたりが考えられるが平面的にとらえられない。第2欄と一対になって、SD-01bに水を流す機能をもつものか。正面は先にふれた東西方向の段落ちの屑になっており、これとの関連も注意する必要がある。遺物は杭の中から三又鉄等の木製品が出土した。



Ph.51 第3井堰 (南から)

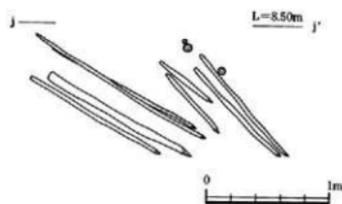


Fig.79 第3井堰断面見通し実測図 (1/40)



Fig.80 第3井樁尖圖

4) 第4井堰 (Fig.81・82, Ph.52)

第1井堰の下流やや西寄りに築かれる。東西に直線的で東端の1.7mほどが内湾する。幅5.3mを測る。長さ3.6m、径15cmの端部に納穴を配した建築材を横木とする。その前の杭が、長さ1.5mで垂直に近い角度に打ち込むのに対し、後ろは長さ1mの杭で約45°の角度である。また、前面には、葉状の繊維が薄く広がり、これが部分的に2面ある。上面は標高8.3mの横木のレベルから8.0mまで広い範囲におよび径2cmの細い横木の列に挟まれる。下面は7.8m位の高さで部分的である。この繊維のレベルはそれぞれの時期の井堰の表面と考えられる。

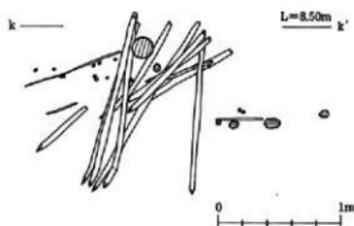
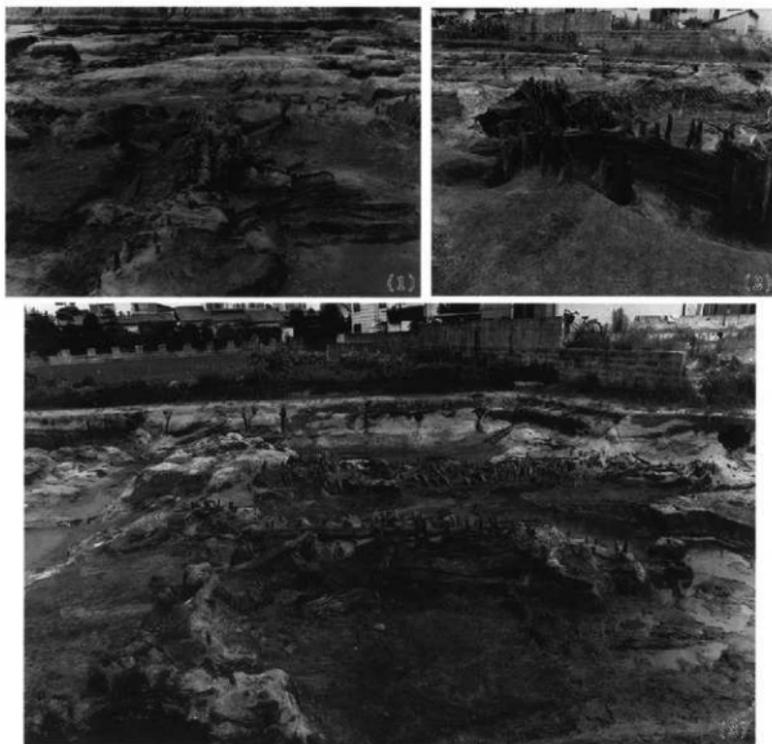
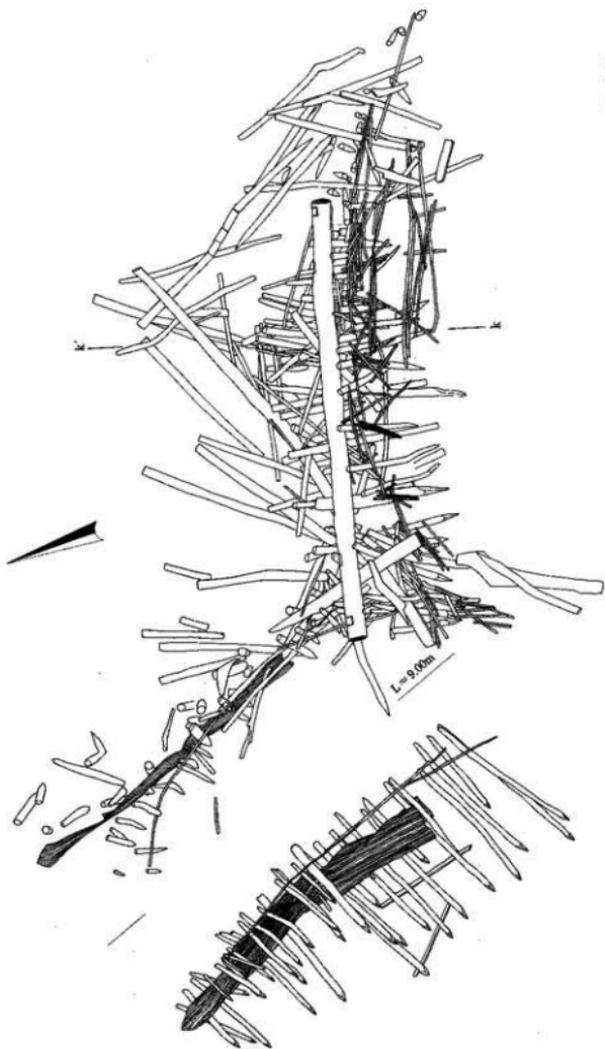


Fig.81 第4井堰断面見通し実測図 (1/40)



Ph.52 第4井堰 (1)東から (2)欄(西から) (3)南から



$L = 9.00m$

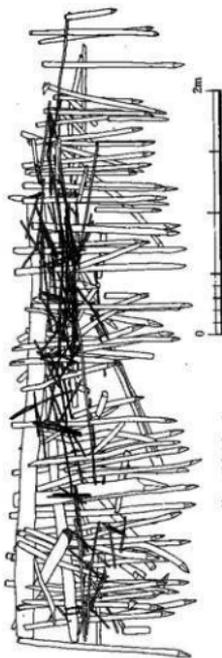


Fig.82 第4井擴実測圖

井堰の西端からはSD-01bの流れの方向に杭列に挟まれた横木が張り出す。(Ph.52-2) まったく別物の可能性もあり、第2層に関連する可能性もある。横木は高さ20~35cmに隙間なく積み上げられる。方向からして護岸的なものと考えられる。杭は、井堰に近い部分では1.3mと長めだが、北側は短くなる。また、横木の前面の方が細く短い。

5) 第5井堰 (Fig.83・84, Ph.53)

第1溝のなかでもっとも下流に位置する。アーチ形に弧を描き、幅9.5mを測る。厚さ1m強に杭を密に河川の中央に向かって打つ。Fig.84に見られるように前面の杭ほど傾斜角度が緩い。径8~10cmの太めの杭が目立つ。横木も見られるが単位はわかりにくい。全体的にレベルが低く、杭頭が標高8.0mと他の井堰と比べて0.5m以上低い。西側1.5mは高い位置にあり、杭を打つ方向も異なり傾斜も直に近い。第1井堰側から流木が第5井堰の中央にむかっており、流れが推測できる。流れは、北壁の9層へと向かうが、意図した水の行き先は不明である。土師器が出土しており、第1井堰と同様の時期と考えられる。

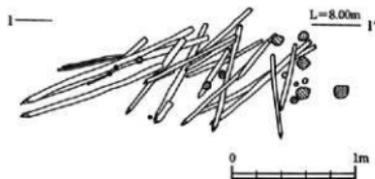


Fig.84 第5井堰断面見通し実測図 (1/40)



Ph.53 第5井堰 (南から)

6) 出土石器 (Fig.85, Ph.54)

本溝からは、本溝が存在したと考えられる時期の石器としては、石製穂摘具2点(2001・2002)が出土した。2点とも安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製で、2001は器長5.25cm、幅13.1cm、最大厚0.65cm、孔中心間2.6cmを測り、重さ65.09gである。2003は第3号溝出土で、同じ石材を用いている。

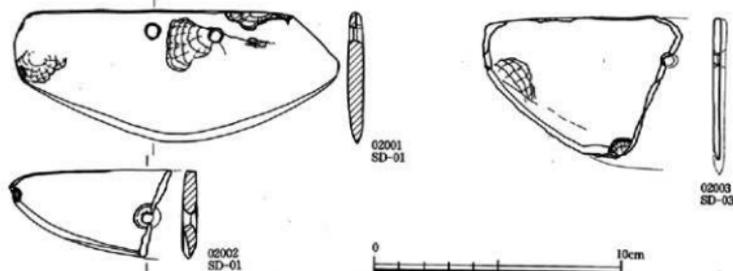
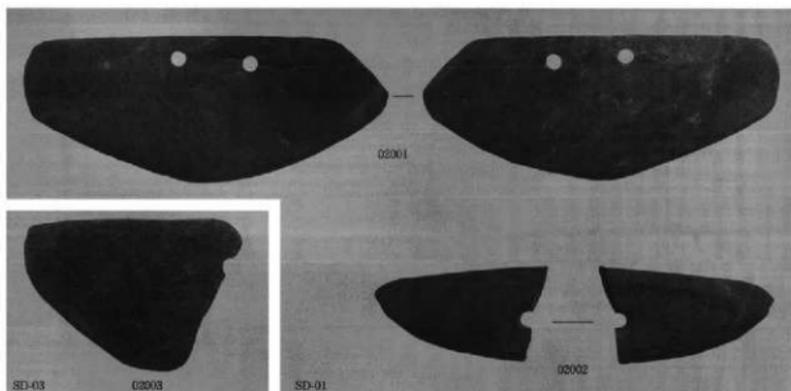


Fig.85 第1・3号溝出土石製穂摘具実測図



Ph.54 出土石製穂摘具

7) 出土木器 (Fig.86～97, Ph.55～60, Tab.1・2)

本溝からは第1・3～5井堰・第2欄の杭群の中および溜まりから、古墳時代の農具類などの木器が出土した。また、柱材などの建築部材は第1・3～5井堰・第2欄の構築にあたって、横木・枕木や杭として利用されており、多量出土した。本溝出土の木器としては、杭(丸杭が大多数を占める)が約3,000点ともっとも多く、建築部材が100点前後で、農具が30点前後とその他の木器がある。本溝のほか第3号溝などでも本溝より量的には少ないが木器が出土しており、ここで本遺跡出土の木製品について概観する。

出土農具は、起耕具である鋤類・鉤類、脱穀具である堅杵、その他の種などがある。起耕具の鋤類からみていくと、諸手鋤・平鋤・二又鋤・三又鋤がある。06は、弥生時代前期初頭の包含層と考えら

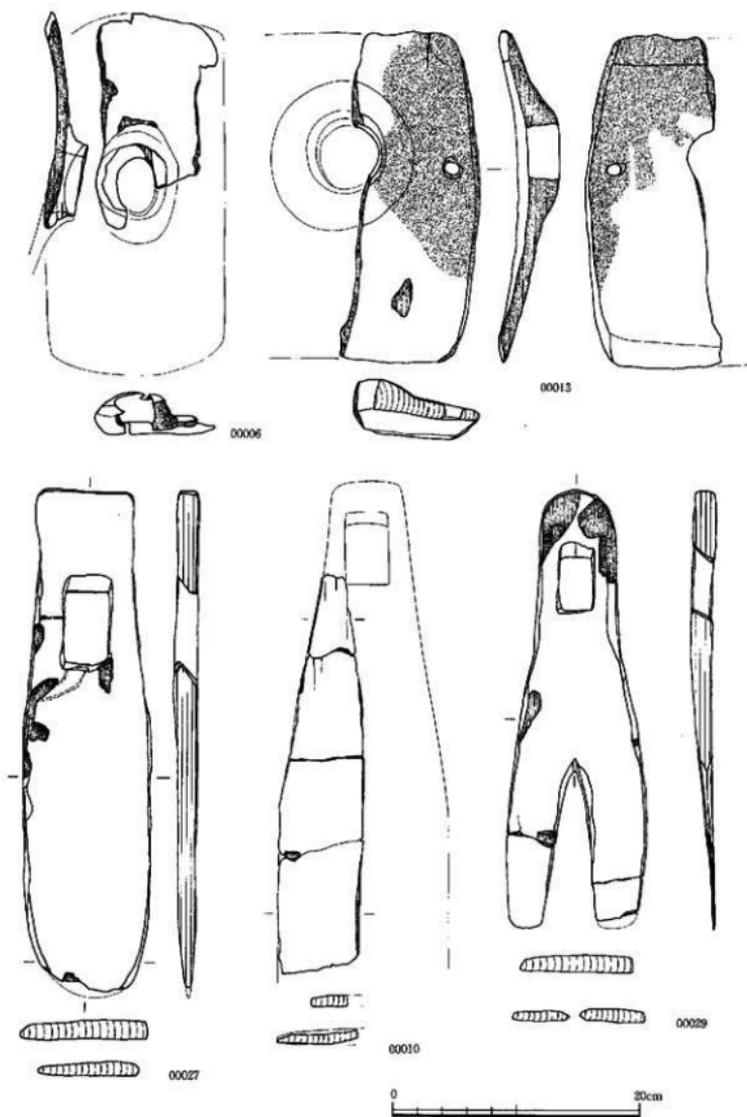
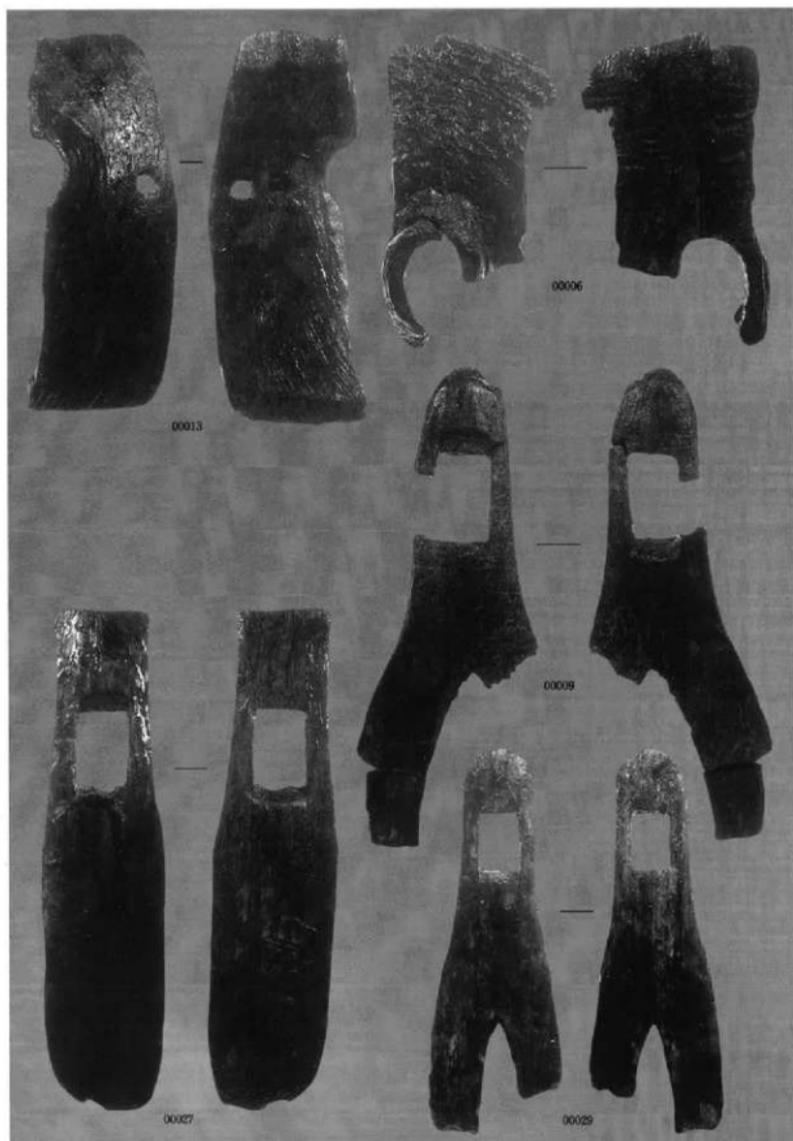


Fig.86 出土銅類實測圖 (1)



Ph.55 出土木器 (1)

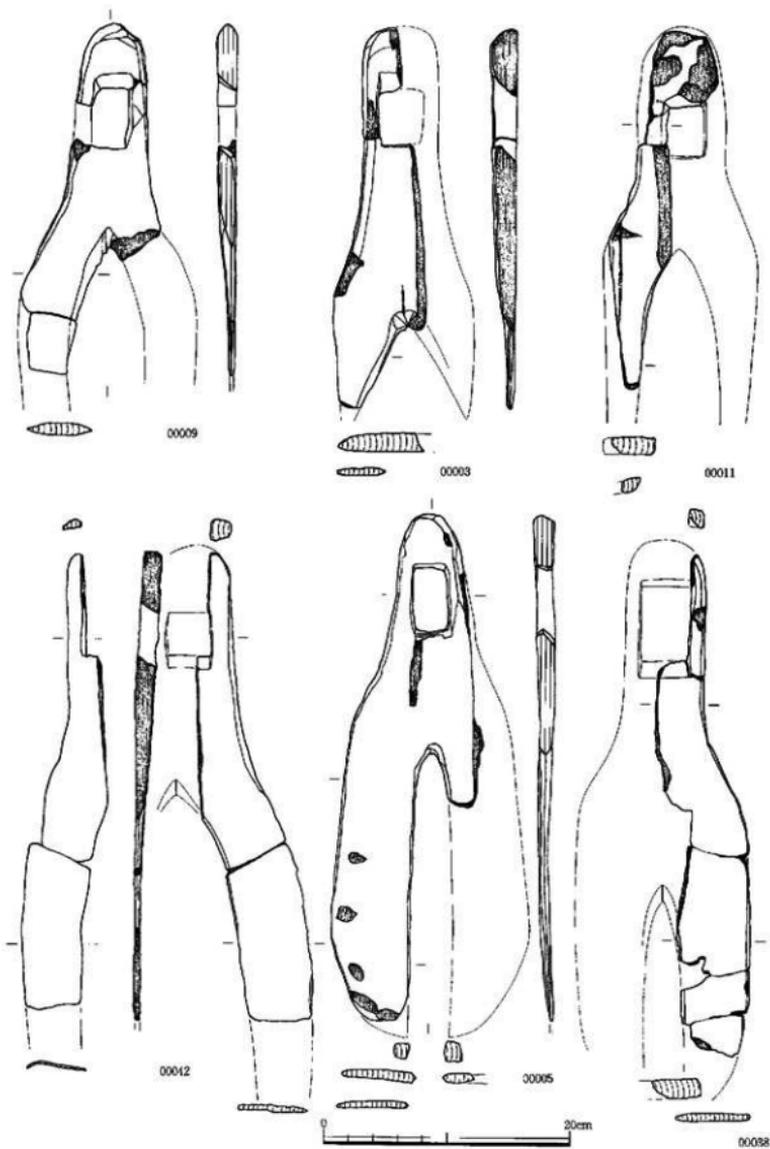


Fig.87 出土鉄類実測図 (2)



Ph.56 出土木器 (2)

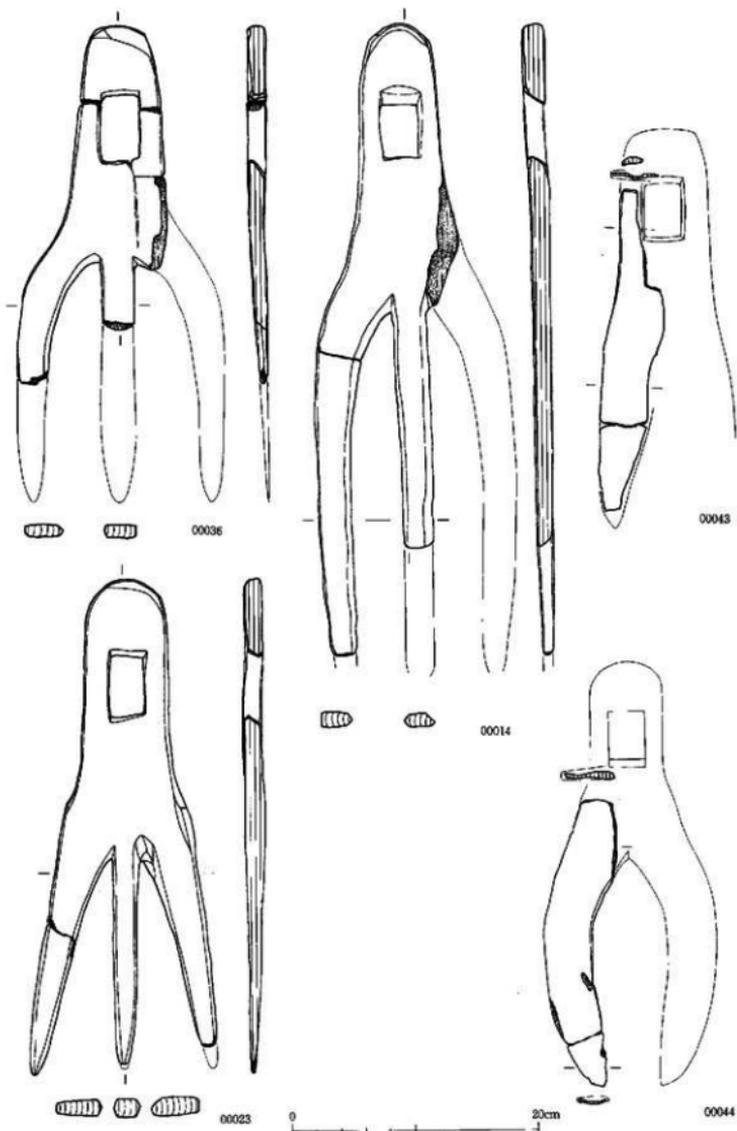
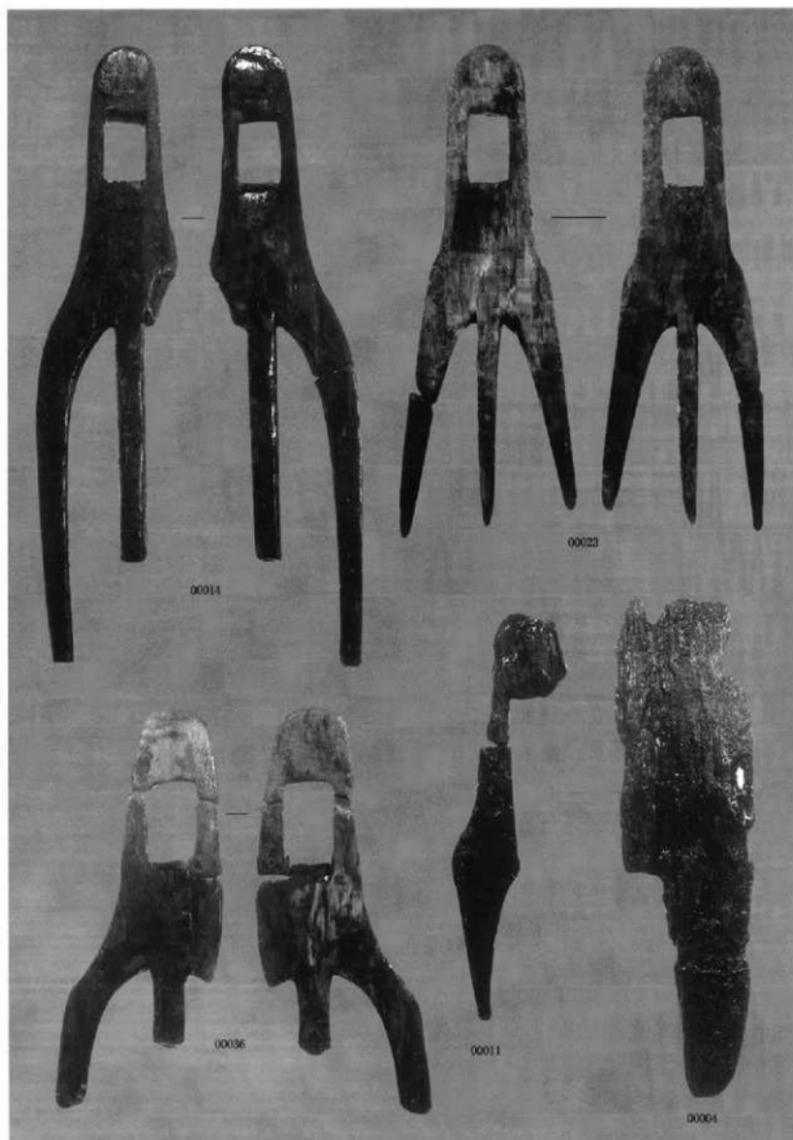


Fig.88 出土鐵類實測圖 (3)



Ph.57 出土木器 (3)

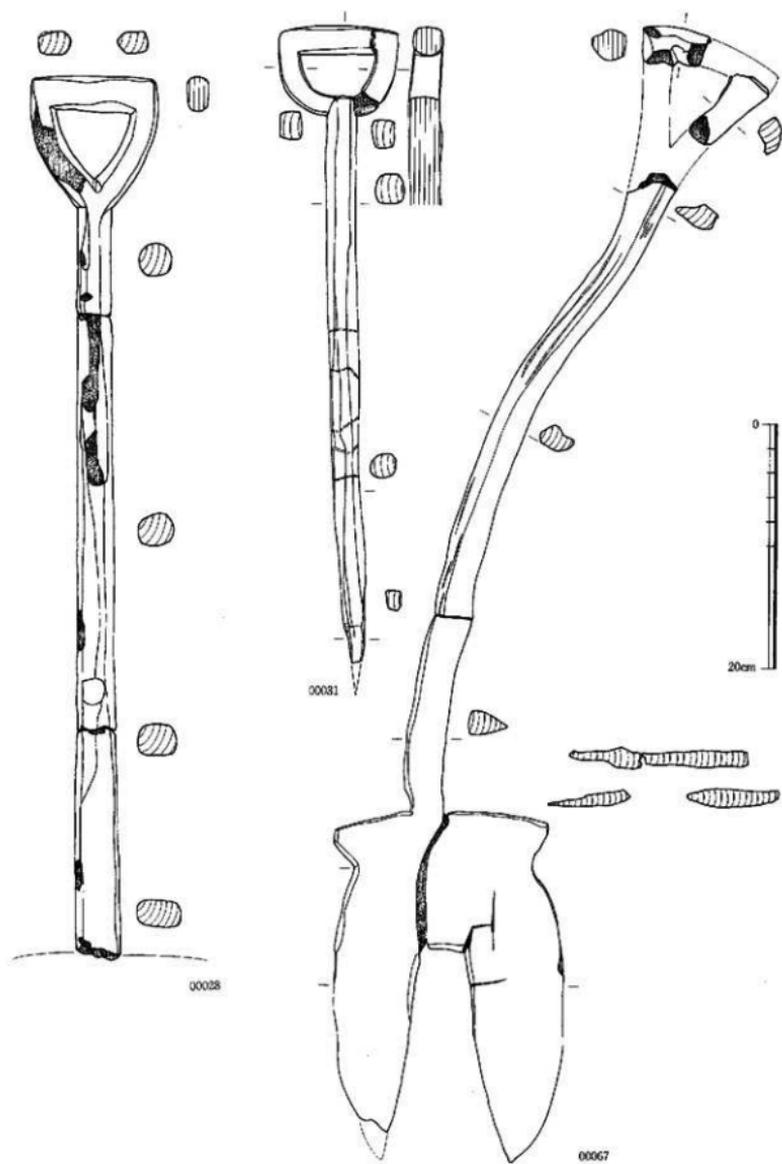
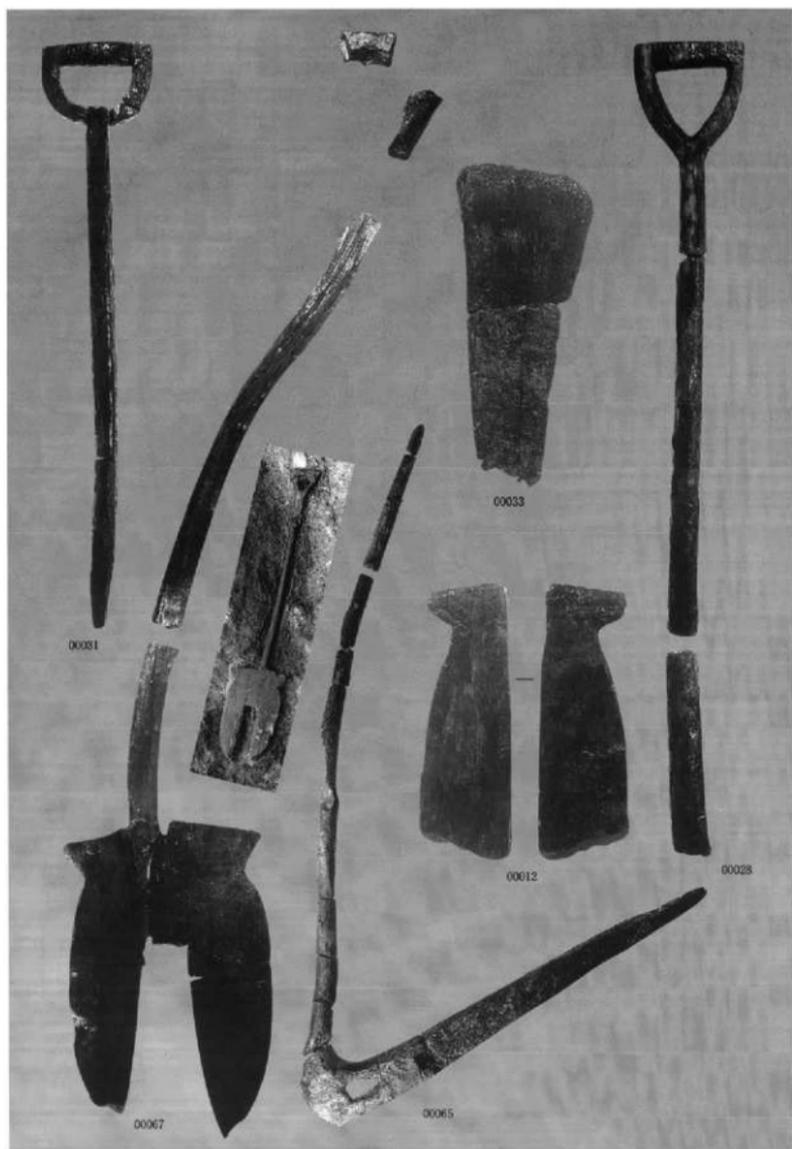


Fig.89 出土筋類実測図



Ph.58 出土木器 (4)

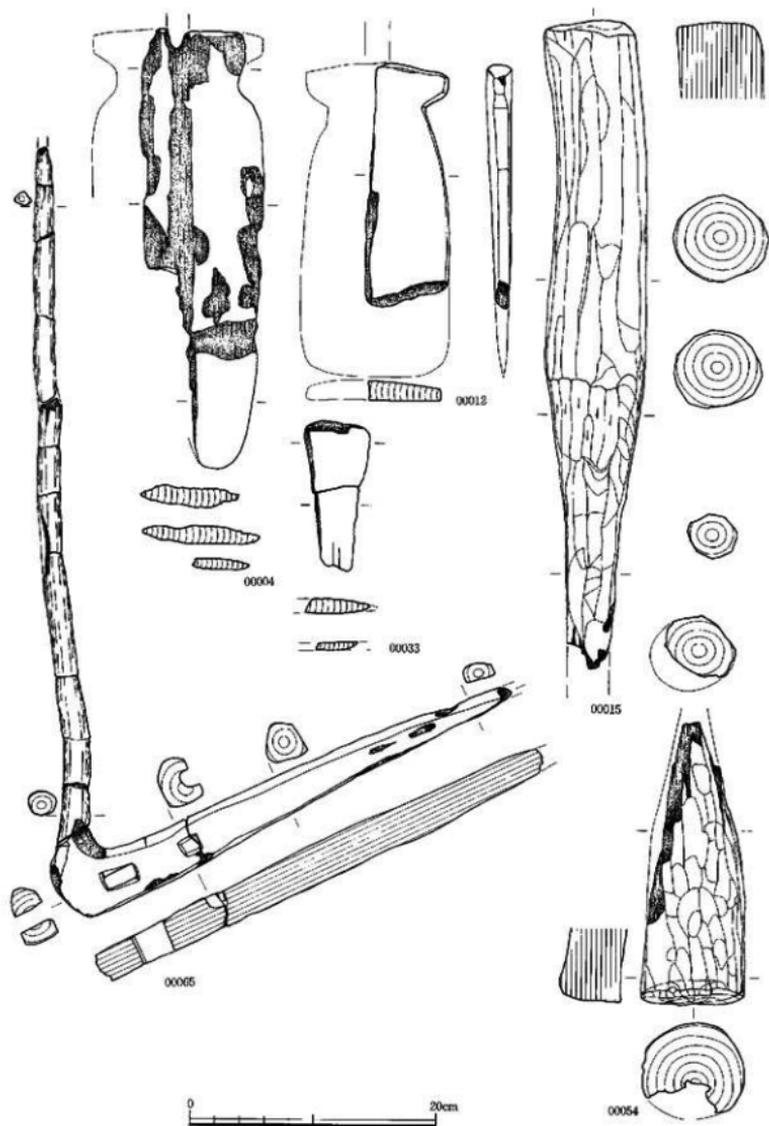


Fig.90 出土木製農具実測図

Tab. 1 出土木器一覽表

遺物登録番号	器種	用材		沈量 (cm)			特記事項	出土遺構	四返	挿目				
		附麗	木取	器身長	最大器幅	最大器厚								
00006	前手帳	カシ	板目	17.5 + a	9.7	0.9	表面電線跡の小孔あり 穴を穿け一層貫通している。年輪か	第1号溝 第6号溝	Ph.55	Fig.86				
00013				32.5 + a	6.8	1.4	漆皮片	第1号溝 第1号溝	Ph.56					
00010				40.3 + a	10.3	2.0	納孔径2.3cm (内径) 7.6cm (内径) 納孔径3.6cm	第3号溝 下層溝	Ph.55					
00027				35.8 + a	10.4	2.0	納孔径5.5cm (内径) 5.6cm (内径) 納孔径2.8cm 外径長12.6cm	第1号溝 第1号溝	Ph.55					
00063				31.0 + a	7.6 + a	2.2	納孔径5.8cm (内径) 5.6cm (内径) 外径長14.8cm	第1号溝 第3号溝	Ph.56					
00005				41.7 + a	10.9	1.7	納孔径5.4cm (内径) 6.3cm (内径) 納孔径2.8cm 外径長9.7cm	第1号溝?	Ph.55					
00009				28.5 + a	9.0 + a	1.7	納孔径6.3cm (内径) 5.5cm (内径) 納孔径3.3cm 外径長8.1cm	第1号溝 第1号溝	Ph.55					
00011				29.1 + a	5.5 + a	2.0	漆皮が剥離のために狂縮変形	第1号溝?	Ph.57					
00038				40.3 + a	5.9	1.6		第1号溝 第1号溝	Ph.55					
00042				37.3 + a	10.0	2.8	乾燥のために狂縮変形	第1号溝 第2号溝	Ph.56					
00043				26.4 + a	—	—	漆部から劣化片 乾燥のための狂縮変形	第1号溝 第5号溝	Ph.56					
00044				23.4 + a	—	—	劣化片 乾燥のための狂縮変形	第1号溝	Ph.56					
00014				二又鎖	カシ	板目	51.7 + a	8.9	2.1		納孔径3.3cm (内径) 3.2cm (内径) 納孔径3.3cm 外径長12.6cm	第1号溝 第1号溝	Ph.57	Fig.88
00023							40.3 + a	11.2	1.9		納孔径3.6cm (内径) 5.6cm (内径) 納孔径2.8cm 外径長11.6cm	第1号溝 第3号溝	Ph.57	
00036	29.2 + a	9.7 + a	1.6				納孔径5.4cm (内径) 6.3cm (内径) 納孔径3.2cm 外径長8.4cm	第1号溝 第3号溝	Ph.57					
00028	71.9	10.2	2.7				一本は釘着付の跡 スワップ跡の発見ありだしあり	第1号溝	Ph.57					
00031	(52.5)	9.8	2.5				適合かた逆造の跡 スワップ跡の発見ありだしあり	第1号溝 第1号溝	Ph.38					
00067	92.9 + a	18.8	2.75				一本は釘着付の跡 スワップ跡の発見ありだしあり	第1号溝 下層溝	Ph.57					
00004	平鎖	カシ	板目	35.6 + a	—	1.7	一本は釘着付の跡 身取部に通っておりだしあり	第1号溝 第1号溝	Ph.57	Fig.90				
00012				20.0 + a	6.8 + a	2.1	一本は釘着付の跡 身取部に通っておりだしあり	第1号溝	Ph.58					
00033				12.4 + a	5.5 + a	1.4 + a	一本は釘着付の跡	第1号溝	Ph.58					
00065				58.75 + a	5.4	3.2	器身長40.4cm 納孔径長63cm 2.3cm x 1.2cmの長方形納孔あり	第1号溝 第1号溝	Ph.60					
00015	事件	カシ	板目	53 + a	8.2 x 7		両部は凸凹レス状をなす 輪郭・輪郭の境は比較的明瞭	第1号溝 第1号溝	Ph.60	Fig.91				
00054				23.2 + a	8.5 + a		輪郭は凸凹レスをなす	第1号溝	Ph.59					
00001				39.7 + a	9.6 x 8.7		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある	第1号溝	Ph.60					
00002				56 + a	7.5		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある	第1号溝 第1号溝	Ph.60					
00021				カシ	芯持ち	43 + a	8.8 x 8.2		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある		第1号溝	Ph.59		
00022				カシ	芯持ち	45 + a	9.7 x (10)		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある		第1号溝 第3号溝	Ph.59		
00030				カシ	芯持ち	47 + a	8.7 x 8.9		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある		第1号溝	Ph.59		
00017				39.9 + a	9.2 x 8.5		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある	第1号溝	Ph.60					
00018				カシ	芯持ち	28	3.2 x 3.2		小形の鑿付とみられる 鑿は凸凹レス状をなす 輪郭は凹凸がある		第1号溝 第1号溝	Ph.60		
00064				47.9 + a	6.8 x 5.9		輪郭は凸凹レス状をなす	第1号溝?	Ph.60					
00007				55	10 x 10.4		輪郭は凸凹レス状をなす	第1号溝 第4号溝	Ph.59					
00016				53.6	10.6 x 9.2		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある	第1号溝	Ph.60					
00039				63.7	7.5 x 6.75		輪郭は凸凹レス状をなす 輪郭に凹凸がある	第1号溝	Ph.60					
00034				—	板目	5.8	3.3	1.5	小形を鑿する		—	—	Fig.93	
00035	—	—	3.1 + a	1.9	0.8	穴を穿けて貫通している	第2号溝	—						
00024	カシ	板目	13	2.9	0.7	細心の鑿付とみられる 表面から3つの納孔 された小孔もつ 乾燥のために狂縮変形している	第3号溝 下層溝	—						
00025	火燧白	—	21	2.8	1.8	鑿の鑿付部を盛りだしているが 1ヶ所のみに使われている 両側には鑿付を残す	第1号溝 第4号溝	Ph.60						
00026	鑿付	ヒノキ?	13.4	(3 + a)	2.5	新造か旧木造り	第1号溝 第4号溝	—						
00032	木眼	ヒノキ?	6.3 + a	1.2 x 1.1			第1号溝	—						
00037	杓文字	カシ	27.8 + a	7.8 + a	0.7 + a		第1号溝	—						
00050	横	—	63.1 + a	23 + a	4.4	横列をなす	—	—						
00059	曲木出板	スギ	58.2 + a	6 + a	1.0	穿穴式内削り曲木製 器に用いた小孔がみられる そのうち1ヶ所は板縁側からみられる	第1号溝 第3号溝	—						
00048	板材	板目	17.3 + a	2.15 + a	1.1	器物片か	第1号溝?	—						

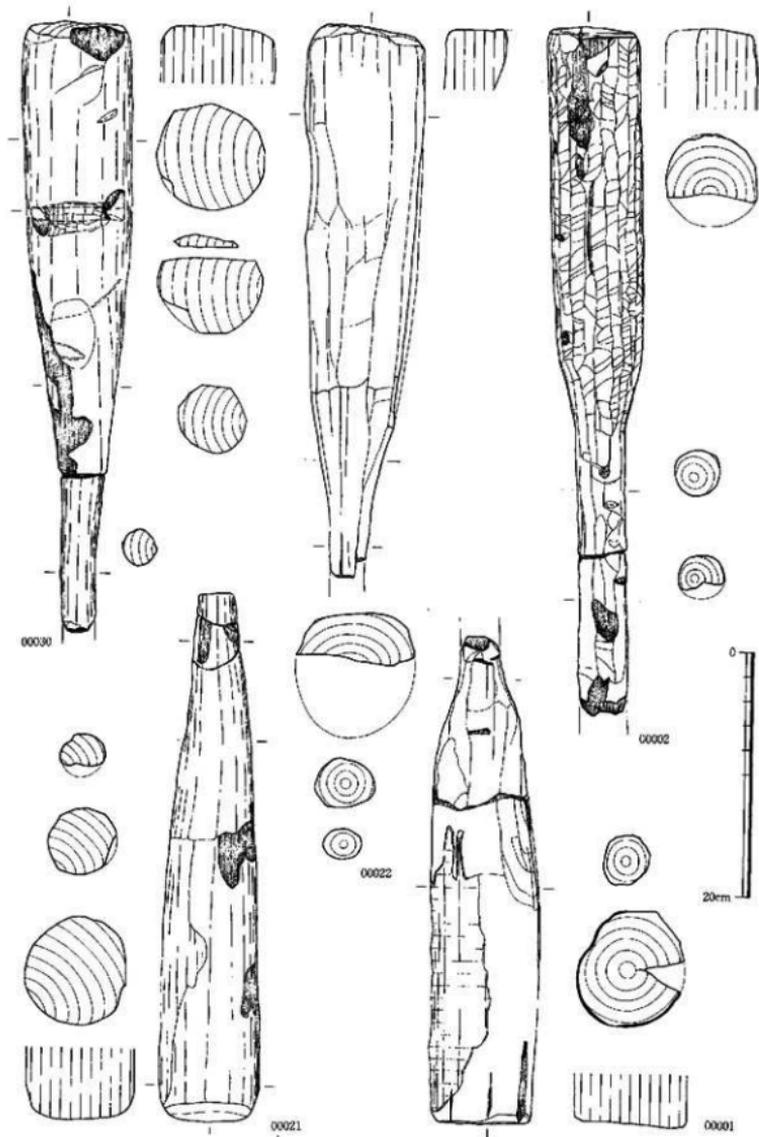
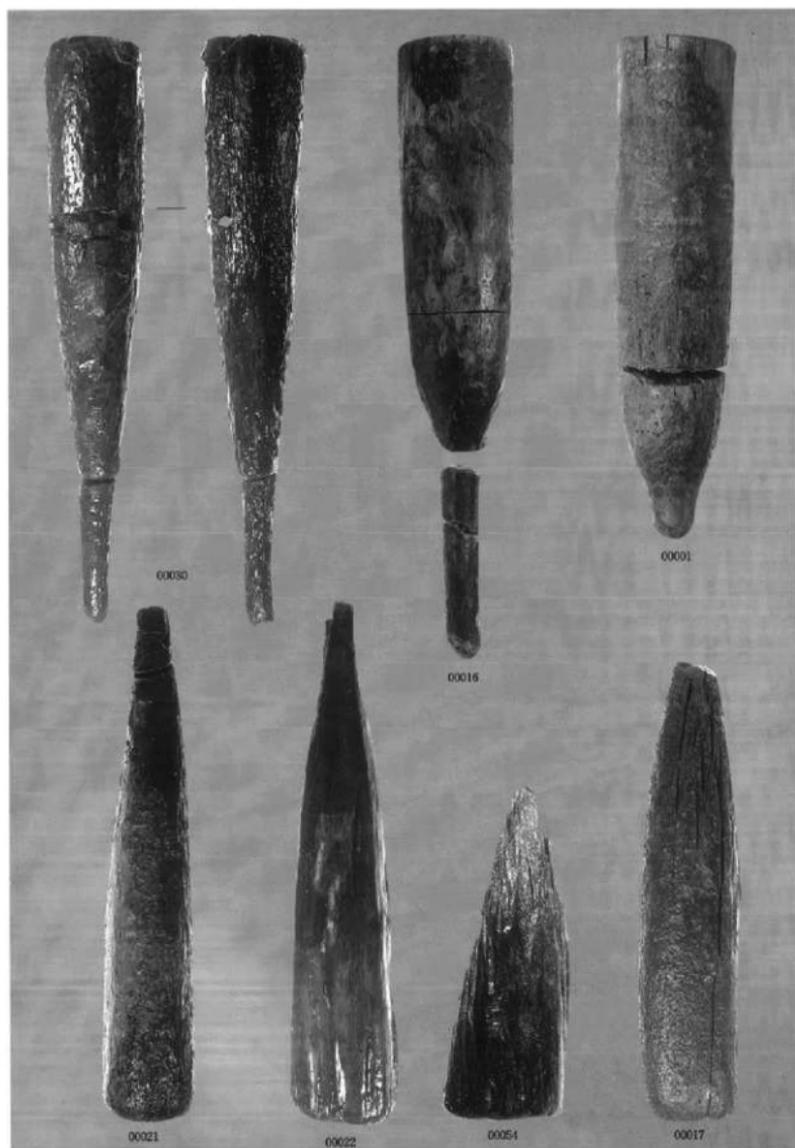


Fig.91 出土豎杵實測圖



Ph.59 出土木器 (5)

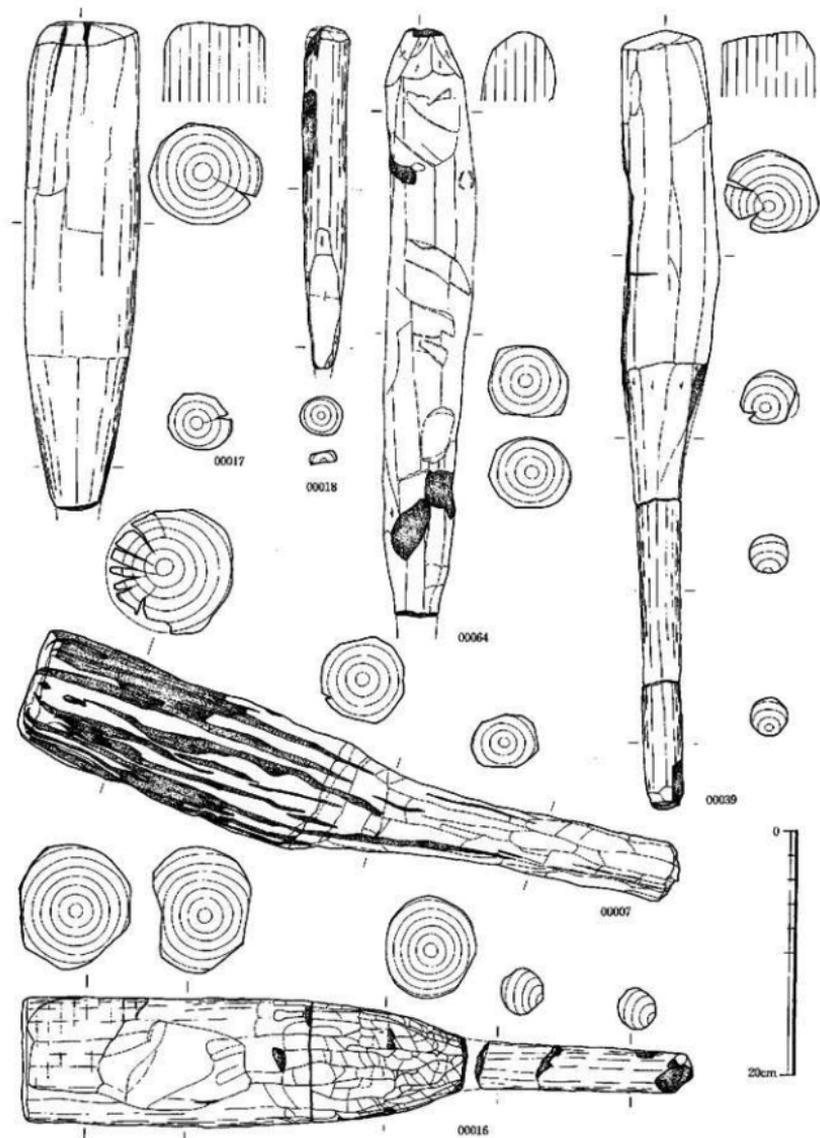
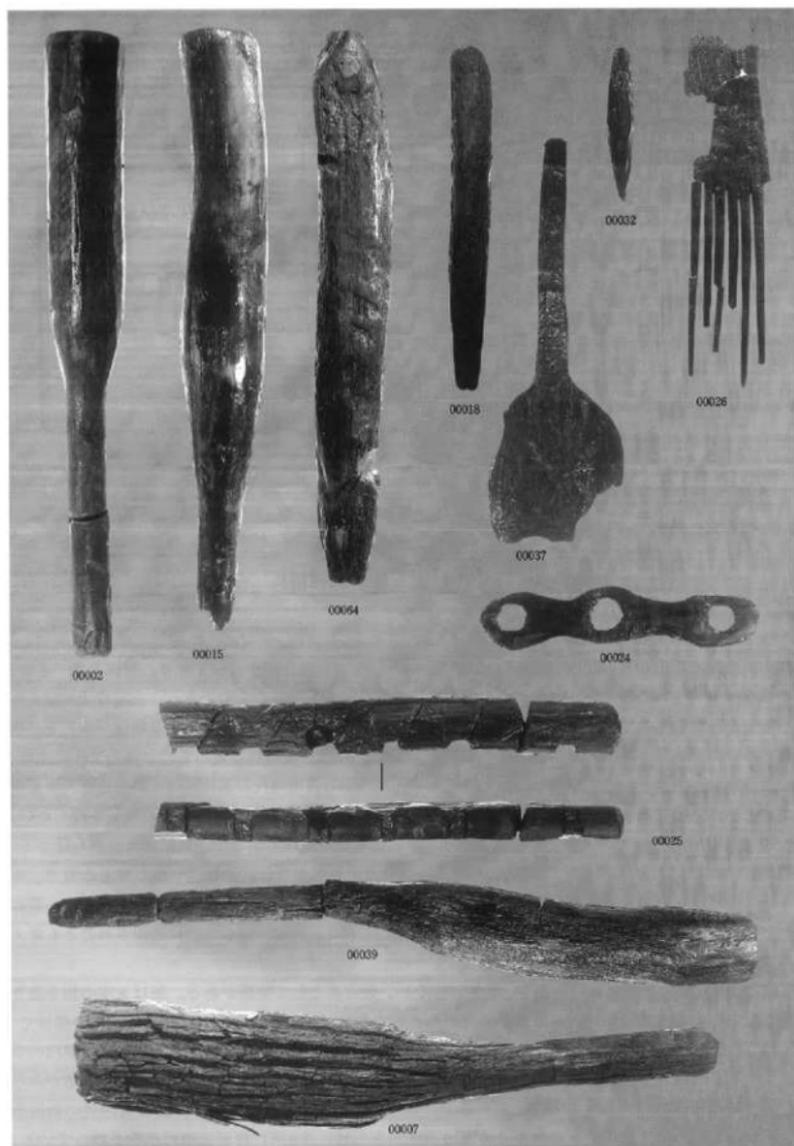


Fig.92 出土杵・槌突測図



Ph.60 出土木器 (6)

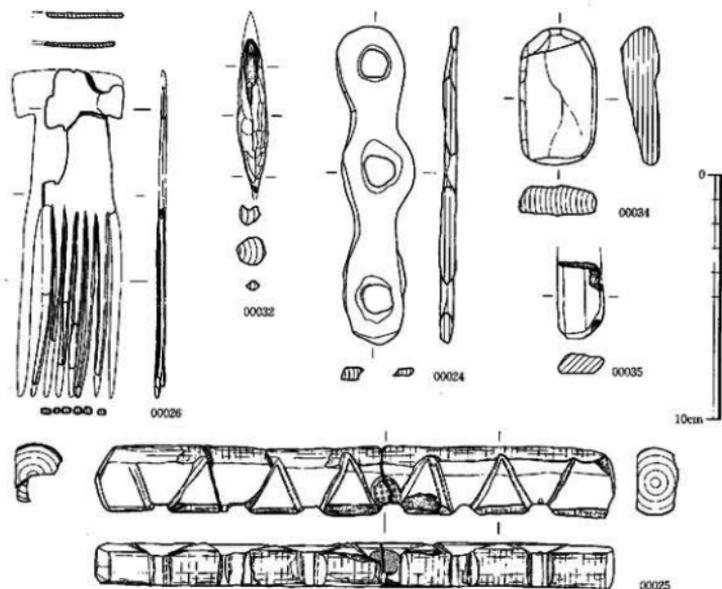


Fig.93 出土木器実測図 (1)

れる黒色粘土層中からの出土である。13は諸手鋸としたが、柄孔が片寄っており、平鋸とすべきか。これも弥生時代前期のものといえよう。他の鋸類はすべて方形柄孔のものであり、古墳時代初頭を中心とした時期のもので、弥生時代後期から古墳時代後期の間のものといえよう。鋸類は一本造り長柄鋸と組合わせ式鋸がある。31は弥生時代前期末前後で、67は古墳時代初頭のものといえよう。65は、湯納遺跡など福岡平野を中心とした地域の弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺跡で、少量出土している木器である。農具の可能性が高いが、用途は不明である。今後の資料の増加を待ちたい。堅杆は搦部端が凸レンズ状をなすものが多く、搦部と握部の境は不明瞭で、搦部の造り出しはなく、芯持ちのものが大多数を占めている。21・30は割材を用いており、握部に造り出しをもつ型で、弥生時代前期のものか。他は弥生時代後期から古墳時代後期のものであろう。槌は大形品が多く、堅杆としたものも完形品はなく、片方の搦部が多く出土しており、井堰・欄干築時に利用されたとも考えられる。

建築部材を除く木器は各種あるが、量的に少ない。装身具として堅握がある。26は8本の歯を造り出した白木の刻歯式堅握である。武器・狩猟具として木鏃(32)がある。24は組合わせ用の部材で、糸巻きの部材か。日常雑器・什器・容器類として火鑽臼・杓文字・曲物・槽がある。25は火鑽臼の完形品で、6ヶ所の発火部を造り出しているが1ヶ所のみ使用し、もう1ヶ所火鑽棒を当てた痕跡がみられる。37は黒漆塗布の杓文字と考えられるが、乾燥のため圧縮変形している。59は有段式の楕円形を呈する大形の曲物底板で、杵あたりの溝の痕跡がみられ、3ヶ所に杵固定用の小孔を穿っている。その内1ヶ所には桜皮が縄縛の形で残っている。48も曲物片か。50は大形の長方形をなす槽で、盤と

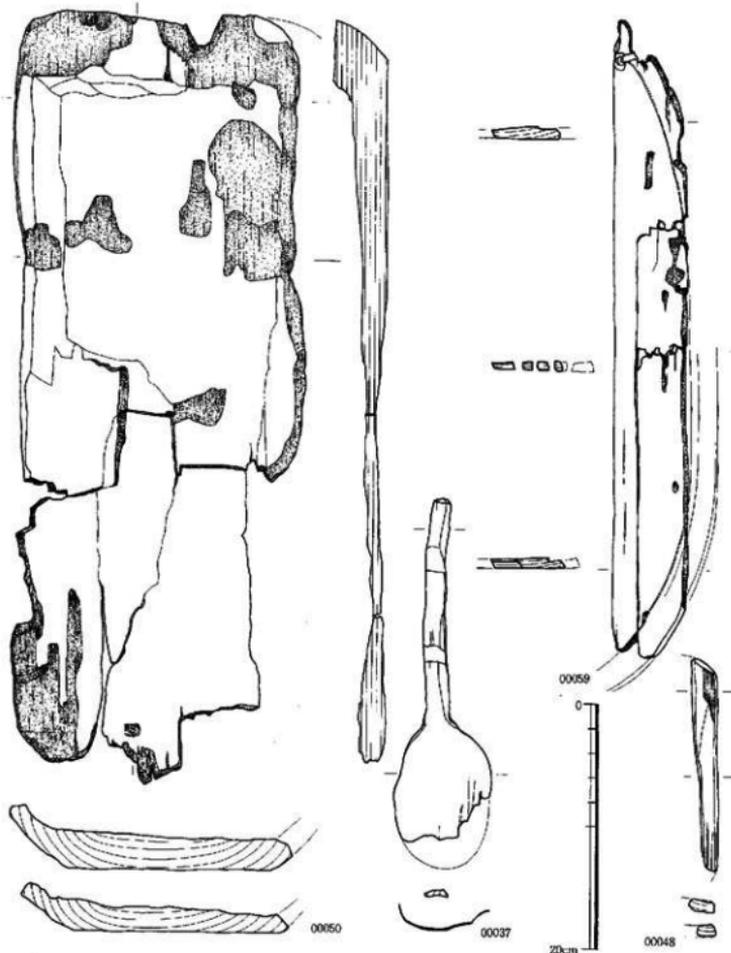


Fig.94 出土木器実測図 (2)

すべきか。以上のほか、作業台なども出土している。25は第3号溝の底で弥生時代前期の土器とともに出土しており、前期後半前後のものであろう。59は第1号溝第3井堰からの出土であり、6世紀のものといえよう。他は弥生時代後期から7世紀初頭までの間のものである。

前述したように、本遺跡では建築部材がもっとも多く出土した。いずれも井堰・橋構築の部材として使用されており、本来の形を保っているものは少ないといえよう。また、井堰・橋構築も廃材ばかり使用してはならず、新たに製作したのものもあると考えられる。ここでは、井堰など構築部材も建築

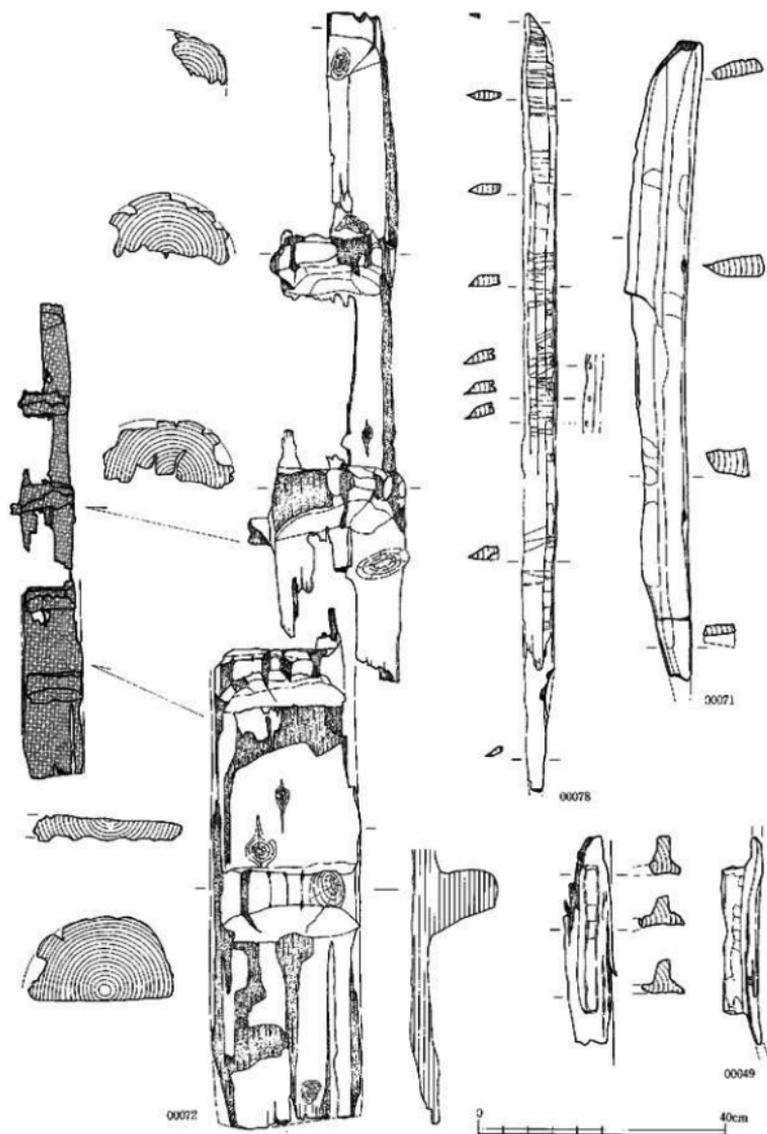


Fig.95 出土建築材実測図 (1)

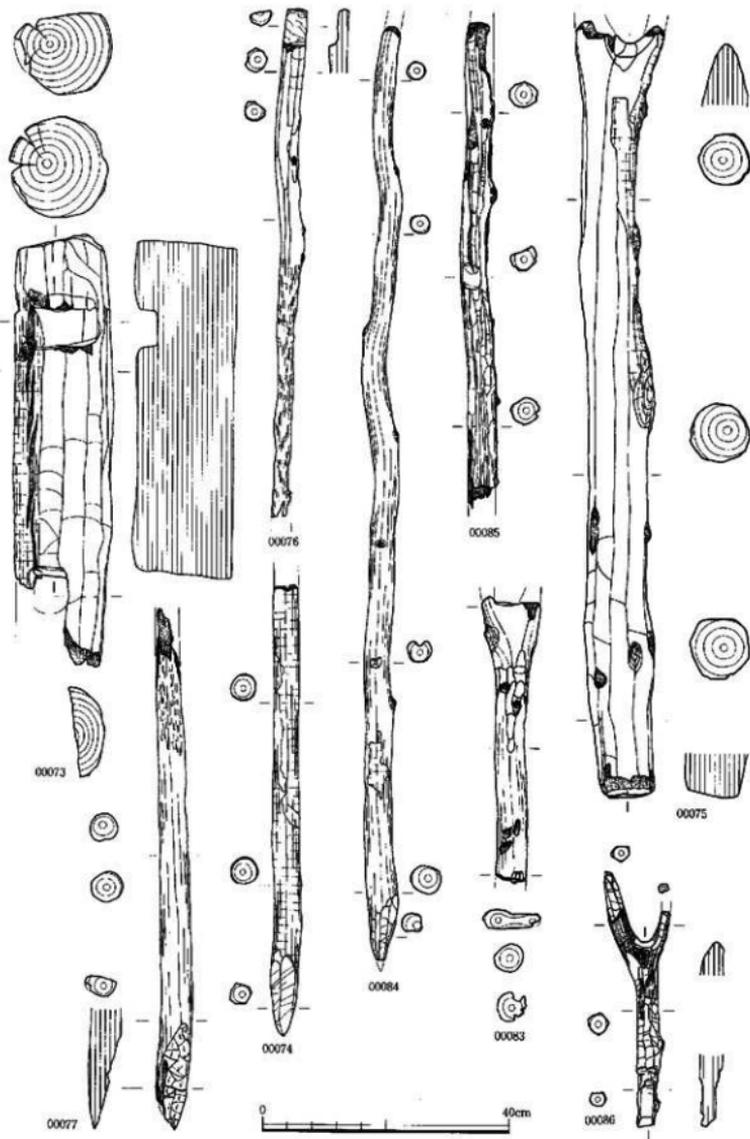


Fig.96 出土建築材実測図 (2)

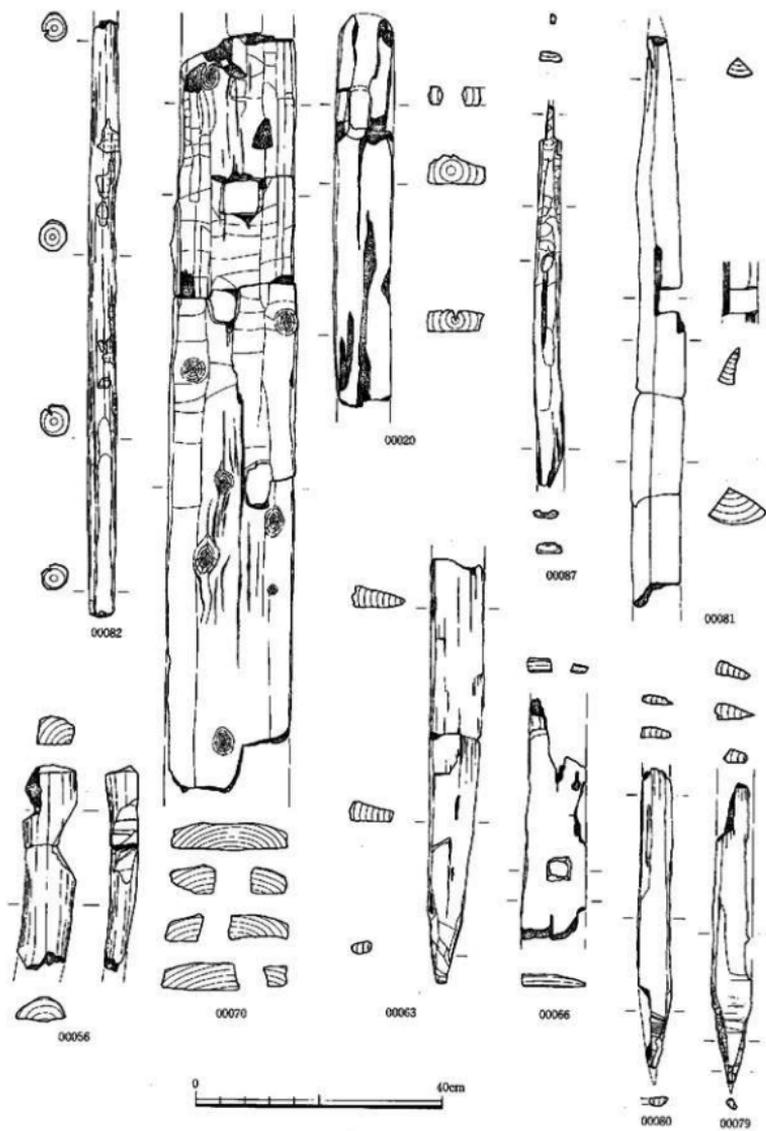


Fig97 出土建築材実測図 (3)

材として扱うことにする。建築部材を大別すると、建物本体に用いられた柱類、床・天井・壁などに用いられた板物、棟・桁・梁に用いられた丸太物・角物、檣などの屋根材と梯子・扉・ねずみ返し・室内装飾用部品などの付属品類となろう。まず、付属品からみていくと、本遺跡では梯子と扉がある。49は乾燥し圧縮変形しているが扉把手である。72は梯子で、5段分遺存している。1段のステップは36cm前後で全長も2mを越えると考えられ、かなり高い床に取り付けられたものといえよう。73~77・82~86は柱材で、75・83・86は枝分かれ部を利用した又柱である。83は82と同一個体の可能性が高く、75・83は東柱として用いられ、86は枘を造り出していることから棟木などの支柱として用いられたものか。73はコの字状の削り込み、枘穴をもち、76の端部にはL字状の切り込みがあり、85もコの字をなす削り込みがみられる。板物としては20・66・70・87などがあり、87は枘を造り出し、20・66・70は枘穴を穿っている。これらの建築部材は、非塚・樽塚築時のものであると考えられる。したがって第1号溝第2層・同第3井堰出土のものは6世紀後半頃のもので、他は弥生時代後期から5世紀前半頃のものといえよう。

本遺跡出土の木器を紹介したが、以上のほか、建築部材をはじめ、各種の木器・加工材・削り屑など多量の木器が本調査で出土している。今回は時間的な制約もあり報告できなかったが、今後、機会をみつめて追加報告していくことにする。

Tab. 2 出土建築材等一覧表

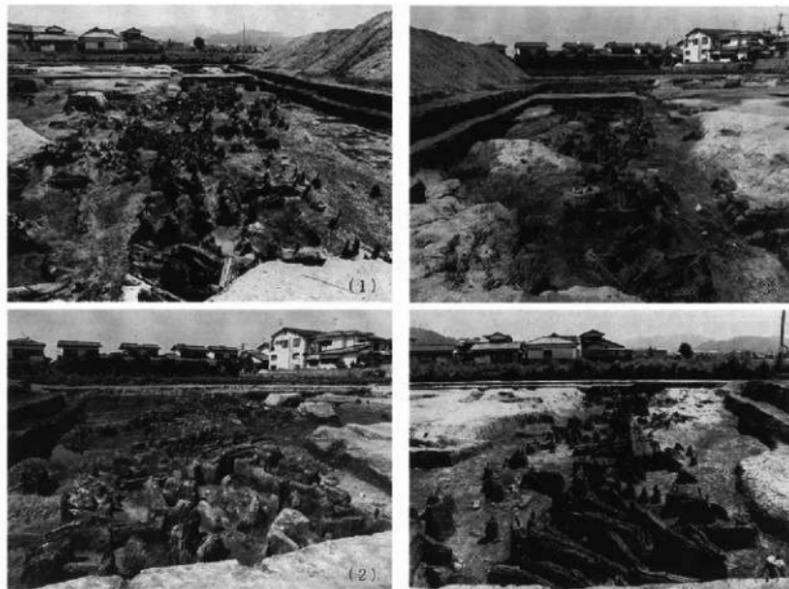
遺物登録番号	器種	用材	法量 (cm)			特記事項	出土遺構	押図
			木取	器長	最大器幅			
00049	扉	スギ	縦目	34 + a	7.5 + a	5.9	削り込み遺存するが枘部のみの形跡している	
00071	板材	クスギ	志持ち	104.5 + a	9.7	4.5	平片をなし、枘取り加工を加えている	第1号溝?
00072	梯子	スギ		194 + a	25.5	13.8	2の辺同 一體性と考えられる段物遺存している	第3号溝 上層溝
00078	板材	カシ	栞目	128.5 + a	5.5	2.3	深い溝の縁部中央に1ヶ所削り込みを伴った削り込みあり	第1号溝?
00073	柱材	スギ		70.9 + a	16.0	16.4	枘部を削り出し、端部下に6cm前後で3mmの「字状」の削り込みあり 端部下に7cm×7cmの枘穴あり	第1号溝
00074	柱材	シイ		147.7 + a	9.0	8.8	端部はL字状をなし端部には枘取りあり	第1号溝
00075	梁柱			126.3 + a	10.8 × 11.5		端部および枘部は削取り加工 枘穴を利用して受け部を造り出している	
00076	柱材	スギ	志持ち	165.8 + a	7.7 × 7.4		端部下に6cmのL字状をなす削り込みあり	第1号溝?
00077	柱材	スギ		170.1 + a	10.2 × 10.2		端部は枘取りをなす	
00083	又柱	シイ		93.2 + a	19.0	9.4	枘部を利用して受け部を造り出している 00082と同一個体あり	
00084	柱材	カシ		305.2 + a	10.2 × 9.0		端部は枘取りをなし 端部から50cm×10cm×20cm×10cmの削り込みあり	第1号溝 第3号溝
00085	柱材	スギ		154.7 + a	9.6 × 9.0		枘部は削取り加工仕上げ ほぼ中央に長さ6cm×3cmのコの字状をなす削り込みあり	第1号溝 第1号溝
00086	梁柱			83.6 + a	7.5 × 9.1		端部は削取り加工 端部は3cmの枘を造り出している 枘部は枘穴を利用して受け部を造り出している	
00020	板材	広葉樹		64.4 + a	9.4 + a	4.7	端部は削り出し、先頭から1cmの枘穴を穿っている	第1号溝?
00056	枘	割材		33.5 + a	8.4	5.4	端部は削取りあり 先頭から1cmの枘穴を穿っている	第1号溝 第1号溝
00063	矢板	栞目		69.2 + a	8.5	3.5		
00070	板材	マツ	栞目	124 + a	20.5	4.6	枘部削り取り加工6cm×4cm、5.5cm×5.5cmの枘穴を4ヶ所穿っている	
00079	板材	クスギ	栞目	98.2 + a	6.5	2.7		第1号溝?
00080	矢板	栞目		97 + a	5.4	1.9		
00081	柱材	割材	志持ち	93.3 + a	7.7	6.0	横断面が一角形をなす一辺に長さ4cm×3.5cmほどのコの字状の削り込みあり	
00082	柱材	シイ	志持ち	97.2 + a	4.8 × 5.2		下層は1本の削り取り加工を伴っている その上は端部も削り	
00087	板材	広葉樹	板目	62 + a	4.4	1.8	先端に、6cm×1.7cm長さ6cm+aの枘をもち 先端から25cmと削り込みあり	第1号溝 上層溝
00066	板材	スギ		89.5 + a	10.8	2.3	2.5cm×3cmの枘穴を穿っている	第3号溝

4. 第3号溝 (SD-03) と出土遺物

1) 第3号溝 (Fig.56, Ph.61・62)

本溝は本調査区の西端近くに位置し、第6号溝に切られている。現代水田耕地および床土を除去した標高8.8m(西側中央から北側)～9.1mの面で、本調査区の東側では一部灰色～青灰色の粘土～シルトの露出があったが、西側は灰色の砂が一面に広がり、縞状に黄褐色～褐色粗砂がみられる状態であった。本調査区西側の調査は、灰色～青灰色粘土～シルトを覆っている灰色砂層を除去することから始めた。その結果、西側北で幅2mで、暗灰褐色砂と黄褐色粗砂が縞状をなす溝1条(第6号溝)を検出するとともに、第6号溝に切られる形で幅2.5～3mの黄褐色粗砂を埋土とする第3号溝を検出した(Ph.61)。

本溝は南側では黄褐色粗砂が30cm前後堆積しており、粗砂を除去すると皿状をなす溝となり、ほぼ溝の中央に2条の矢板杭と丸杭からなる橋を検出した。橋間は1mで、調査区を南北に縦断している。しかし、第6号溝によって切られた北側は粗砂の堆積がなく、不明瞭であるが橋のみは連続していることがわかった。調査が進行していく過程で、本溝は黄灰色～淡灰色の粗砂を基調とし、砂・シルト・粘土・粗砂の互層となり、橋をもつ幅2.5～3m(橋間は1m)の溝と暗灰色～褐色粘土～シルトを基調とし、粗砂・砂・シルト・粘土が互層となる幅4～5mで、深さ80cm前後の溝が重なっていることがわかった。前者を第3号溝の上層溝、後者を下層溝とする。上層溝は下層溝の土層堆積状態でみていくと、シルト～粘土が水平堆積をなしていくところが多く、人為的に埋められた後掘削



Ph.61 第3号溝検出状況



Ph.62 第3号溝第6井堰構築状況

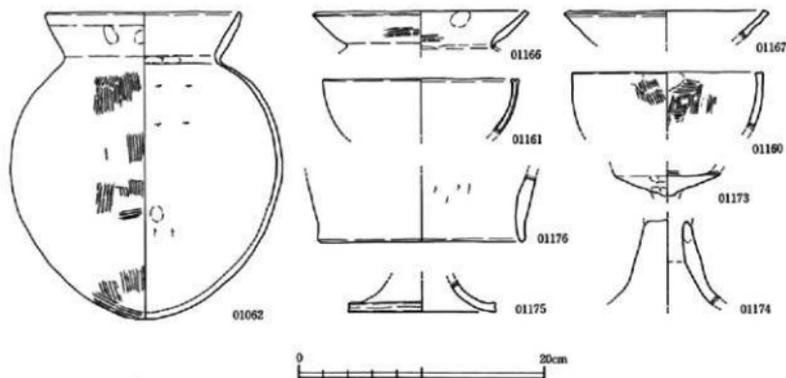
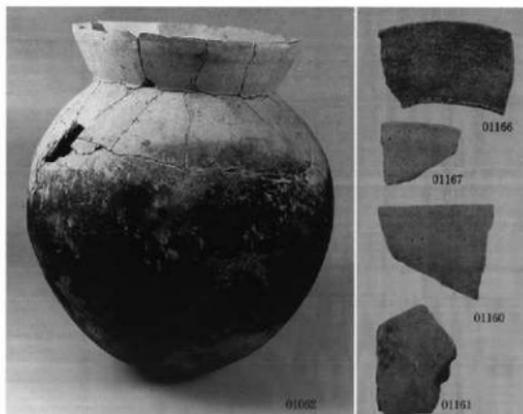


Fig.98 第3号溝上層出土土器実測図

したと考えられる。本溝付設の欄は、完掘すると南側では浮いた状態となることから上層溝に伴うものといえよう。本溝上層溝には欄のほか、調査中央から南に直線的な井堰が2ヶ所設けられている。もっとも南側の井堰の手前には幅2m前後の溝が西へ分岐しており、取水溝と考えられ、その井堰の南には幅1mの溝が南東方向から延びてきており、こちらは排水溝が取り付いていると考えられる。中央から北側については欄が深くなっており、欄も本溝と直接的には無関係の可能性もある



Ph.63 第3号溝出土土器

杭群に埋没した状態となっている。この第3号溝北側の密集杭群を第6井堰として調査を行なった。

上層溝付設の欄は遺存長70cm前後、幅10cm強で、厚さ2cm前後の矢板杭を用い、25cm前後の間隔で、溝中央から緩やかな傾斜をもつ壁に直交する形で打ち込まれている。2条の欄間は、前述したように検出面では1mの幅をもっている。なお、この欄の矢板杭間には丸杭・半割杭が入るが、欄の補修・補強に用いられたものといえよう。南側2ヶ所の井堰は丸杭を30~50cmの間隔で、2条を溝と直交する形で打ち込んでいる。2条の杭列間は40cm前後を測る。また、取水溝・排水溝口にはそれぞれ丸杭を20cmの間隔で打ち込んで直線的な井堰を設けている。

第6井堰は、第3号溝の上層溝に伴う欄と直線的な井堰が存在するほかに、同時期前後の欄というより護岸施設（西側からの水流から護る）と第3号溝下層溝に伴うアーチ状井堰の基底部分のみが残った状態であるといえよう（Fig.62）。1/10の平面実測図および矢板杭・丸杭などの取り上げ表があり、

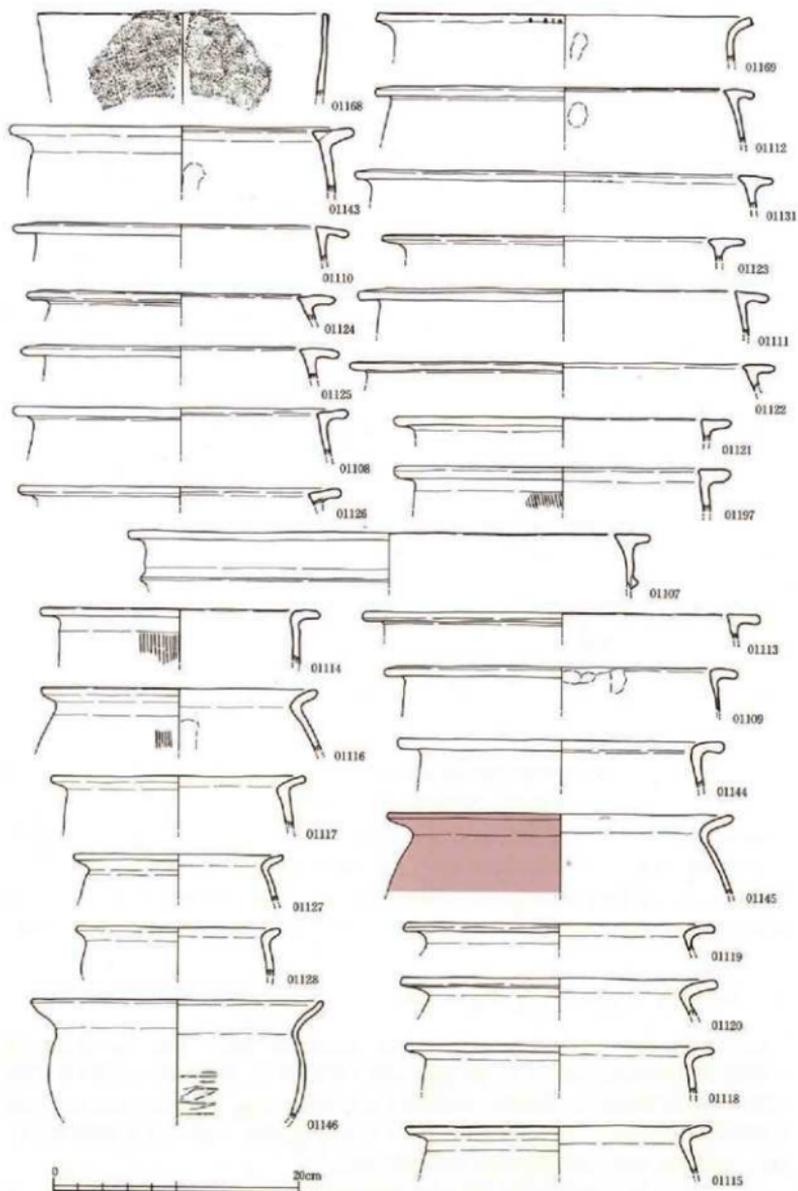


Fig.99 第3号溝出土弥生土器实测图 (1)

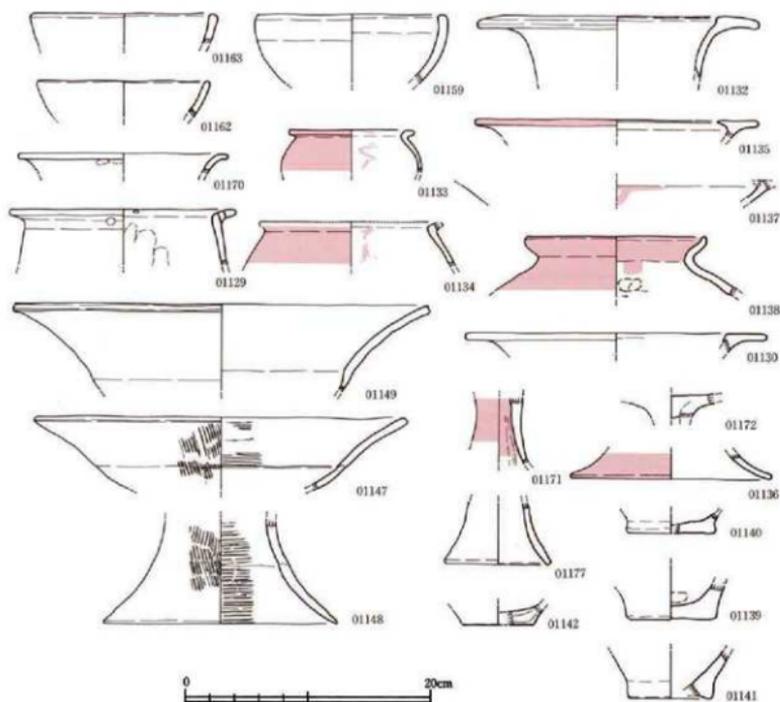


Fig.100 第3号溝出土弥生土器実測図(2)

実測時のレベルもわかり、各断面図もあることから詳細な図を起こし、切り合い関係など比較検討することは可能である。しかし時間的制約と浅学のため詳細についての検討はできなかった。

本溝は、以下で紹介する出土土器から、上層溝が4世紀前半に掘削され使用された溝といえ、下層溝は少なくとも弥生時代後期初頭頃には存在していたと考えられる。廃棄されたのは4世紀前半頃といえよう。

2) 出土遺物 (Fig.98~101, Ph.63・64)

1062・1160・1161・1166・1167・1173~1176は上層溝出土の土師器で、1175・1176は第6号溝との切り合い部から出土したもので、第6号溝の遺物と考えられる。1062・1166は球状をなす胴から屈曲して開き口縁となり、口縁端をつまんだ甕である。口径15.9cm、器高25.1cmを測る。本土器は本溝南側の取水溝近くで出土しており、水口(または井堰祭祀)に用いられた可能性がある。1160・1161は鉢、1173~1175は高坏脚、1176は瓶である。

1140・1168・1185・1186は、第6井堰および本溝の北側出土のもっとも古い一群の甕である。外反する口縁をもち、口縁端に刻目を施している。1107~1128・1131・1139・1141・1143~1146・

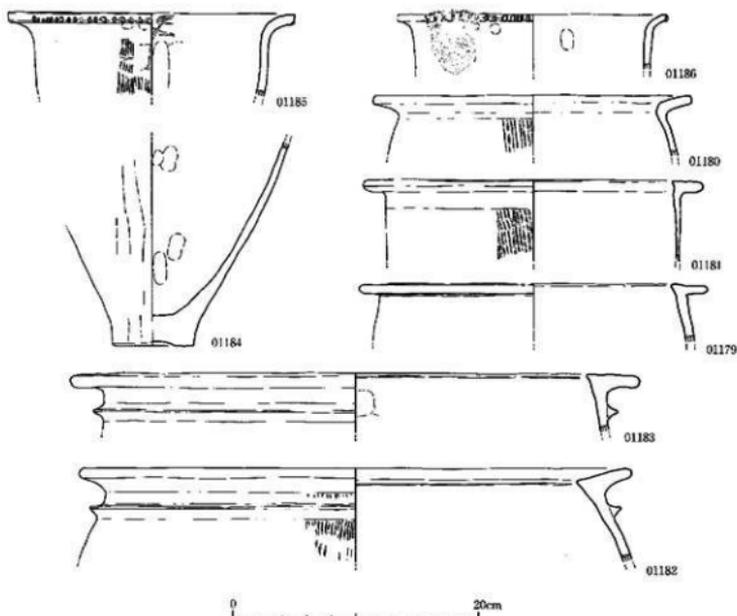
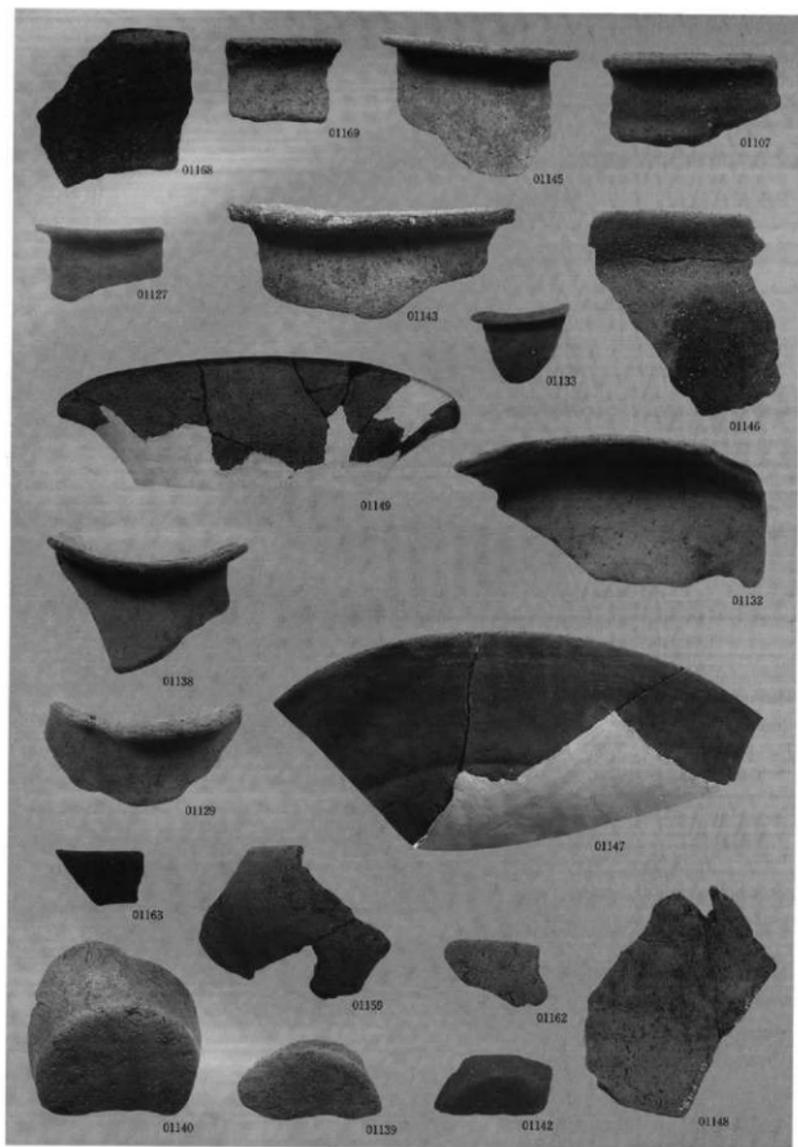


Fig.101 第3号溝第6井堰出土土器実測図

1169・1179～1184・1197は甕で、内傾・平端・外傾する逆L字状口縁をなすものが多く、くの字状口縁をなすものが混じっている。底および底近くは逆L字状口縁をもつものが出土し、磨耗を受けていないものが多かった。

1159・1162・1163は鉢、1148と1177は白付の鉢か。1136・1147・1149・1171・1172は高坏である。1136・1171は丹塗りである。他は壺で、1129・1133・1134は無頸壺。1130・1132・1135・1137は鋤先状口縁をもつ壺である。

本溝の上層溝からは、平鋤(10)・二又鋤(67)・梯子(72)などの農具・建築材などの木器が出土した。また、下層溝からは、壺(26)・火鑽臼(25)などの木器と石製穂搗具が出土した。



Ph.64 第3号沟出土弥生土器

5. その他の遺構と出土遺物

1) 第2・4号溝 (SD-02・04) (Fig.102, Ph.65)

両溝は本調査区中央の南側に位置し、第1号溝に切られている。標高8.8mの黄褐色シルト面で検出した。第2号溝は検出面では幅2～2.5mで測り、30～60cm遺存し、15mの長さを確認した。第4号溝は検出面では幅60cm強を測り、10～40cm遺存している。両溝の切り合い関係は、第2号溝が第4号溝を切っているが、同じような埋土堆積状態をもつことから同時期のものとも考えられる。第2号溝東肩部には橋が設けられている。両溝からは、弥生時代前期と考えられる土器細片と流木が少量出土した。

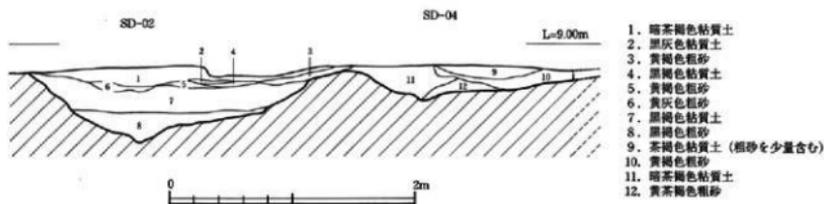
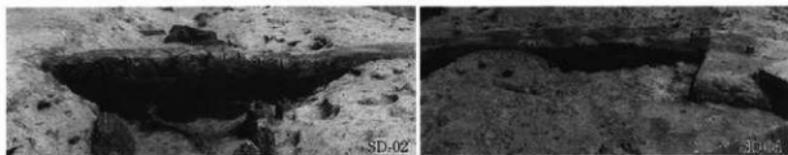


Fig.102 第2・4号溝土層断面実測図



Ph.65 第2・4号溝土層堆積状況

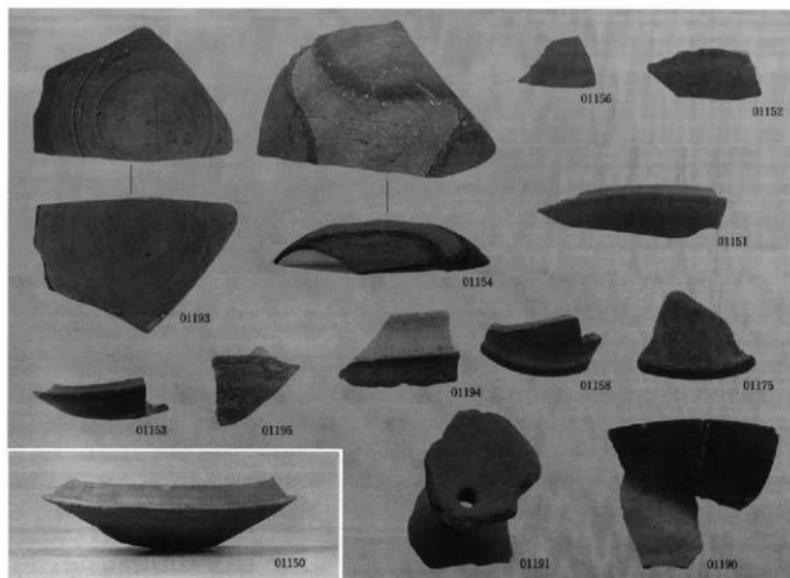
2) 第6号溝 (SD-06) と出土遺物 (Fig.56・103, Ph.66・67)

本溝は本調査の北西部に位置し、第3号溝を切っている。現代耕土・床土を除去した標高9.1m前後(部分的には灰色砂が覆っていた)の面で、黄褐色粗砂および暗灰褐色砂が縞状をなす形で検出した。検出面での幅は1.2～2.5mを測り、30～60cm遺存している。本溝の埋土は粗砂と砂の互層となっているが、調査区西壁の土層堆積状態をみていくと、灰色～黄褐色・黒色粘土層を切る形で粘土を基調とし、シルト・砂・粗砂の互層を埋土とする下層溝の存在が確認できる。しかし、第3号溝と切り合い関係になったところで土層堆積状態が乱れ、密集抗群と重なっているためその延長を確認することはできなかった。また、第3号溝下層溝と第6号溝との前後関係も把握することができなかった。下層溝確認面での幅は4m前後で、50cm前後の深さをもっている。第3号溝に帰属させた第6井堰は、第6号溝下層溝が上層溝よりやや北西にずれていっていることから、本溝下層溝に帰属する可能性がある。第6井堰を本溝下層溝に帰属させるとアーチ状をなす井堰となる。

本溝からは、須臾器と磨耗した土師器・弥生土器が少量出土した。以下に述べる出土遺物から、6世紀前半頃出現し、8世紀前半頃埋没した溝といえよう。また、下層溝の第3号溝と切り合い関係となることから、弥生土器などが出土したが、第3号溝第6井堰出土遺物として前述した。



Ph.66 第6号溝土層堆積状況



Ph.67 第6号溝出土土師器および須恵器

出土遺物 (Fig.103, Ph.67)

1164・1165・1190～1192は土師器で、1165は坏蓋、1164は坏、1190は高坏、1191は器台、1192は高坏か。1165は無返して、口縁端を丸く仕上げ、口径16.5cmを測る。1190は口径30.6cmを測る。

1150～1158・1193～1196は須恵器で、1153～1157・1193・1196は坏蓋、1158は高坏、他は坏で

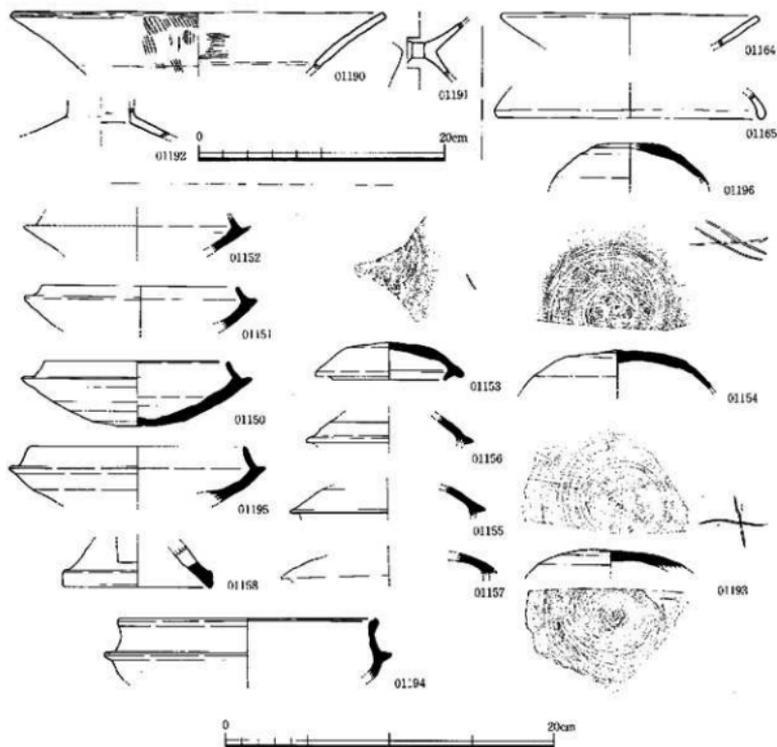


Fig.103 第6号溝出土土師器および須恵器実測図

ある。坏壺はいずれも有返しである。1153・1154・1193の外天井にはヘラ記号がみられ、1193の天井には当て具痕が残っている。1153は受け部径9cm、器高2.3cmを測る。1194は受け部からは垂直に立ち上がり口縁となり、口唇を軽くつまんでいる。口径16cmを測る。1150は受け部から内傾しながら立ち上がる口縁をもち、口径14cm、器高4cmを測る。1151・1195は口径14.2cm・13.2cmを測る。

3) その他の出土遺物 (Fig.104)

本調査では、表土除去および遺構検出作業中に各時代各時期の遺物が少量出土した。

1198・1199・1208は弥生土器で、1198は鐏先状口縁をもつ壺、1208は袋状口縁壺、1199は甕である。1200は土師器鉢、1201は須恵器坏である。

1203は青磁の香炉か。1204は白磁で皿か。1202・1205～1207は近世のものと考えられ、1205・1206は青花の白磁碗。1203はトチンか。

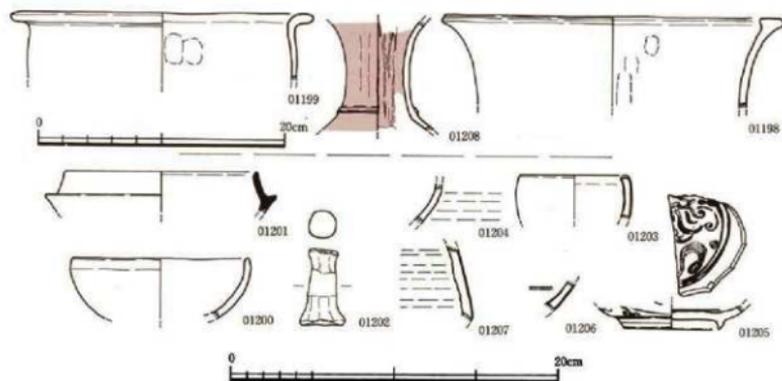


Fig.104 採集遺物実測図

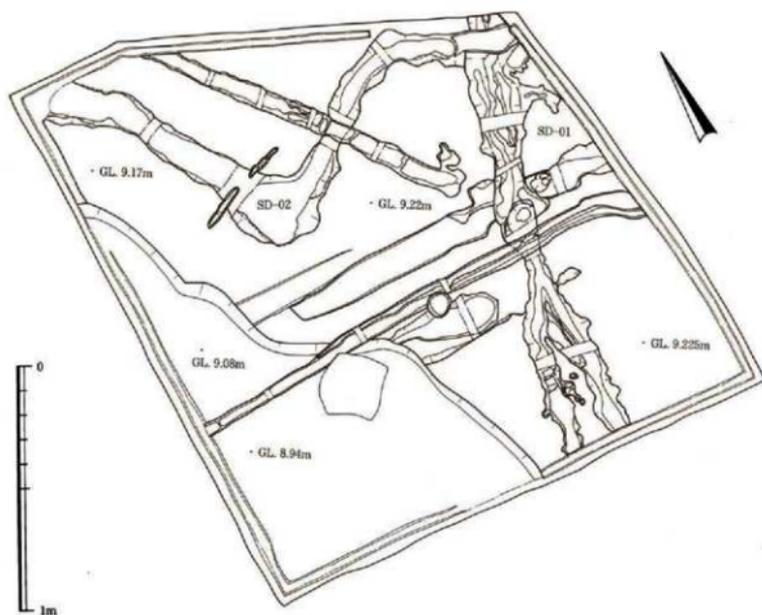


Fig.105 第Ⅱ区遺構配置実測図

6. II区の調査

試掘調査の結果、溝が検出され、水田などの水利遺構が広がるか集落が所在する可能性があるとして要本調査地となっていた。盛土・現代水田耕土を除去した標高9.2m前後の青灰色シルトおよび黒灰色砂の面で溝を検出したため精査した。

検出遺構としては、5条の溝がある。ほぼ東西に走る幅30～40cmで、深さ20cmのU字溝は近代の排水溝と考えられる。第1号溝は幅50cmのU字溝を切り、第2号溝に切られている。幅50cm前後の2条の溝が合流し分かれているが、切り合い関係は判別できなかった(10cm前後遺存)。第2号溝は幅40cm前後で、10cm強遺存するU字溝に切られ、第1号溝を切っている。幅60～80cmで、20cm前後遺存するU字溝である。



Ph.68 II区完掘状況

第1・2号溝からは磨耗した弥生土器・土師器・須恵器とともに青花の白磁・陶器・土師器の細片が出土した。II区の各溝は中世末から近世のものといえよう。

7. まとめ

本調査地は、金屑川東岸の標高9.3m前後(水田部)の低位段丘上に位置している。

調査は、I区に重点を置き実施した。その結果、標高8.9m前後の青灰色粘土～シルトの面で遺構を検出した。さらに部分的にAhが堆積しており、Ahを挟んだ上下層は縄文時代前期の遺物包含層であることを確認した。

縄文時代の2枚の包含層からは、量的には少ないものの土器・石器が出土した。縄文時代早・前期の早良平野をはじめとする福岡平野内での遺跡のあり方など様相を把握するうえで今後の参考となろう。

検出遺構は、弥生時代前期の溝2条(第2・4号溝)と弥生時代後期から古墳時代後期の溝4条である。ただし、各溝は井堰・欄などの付設遺構を伴っていた。第1号溝は、古墳時代前期～後期のアーチ状井堰3ヶ所、直線的井堰1ヶ所、護岸的欄1ヶ所を付設している。第3号溝は、古墳時代前期と弥生時代後期の溝が重なっており、欄のほか、取水・排水用の井堰2ヶ所、アーチ状井堰、護岸用欄、直線的な井堰が重なった枕形を付設している。第6号溝は、第1号溝埋没後にしばらく所在し、8世紀頃埋没したと考えられる。第1号溝第1井堰構築材2点についてC¹⁴による年代測定を行なった結果、B.P.2340±180、B.P.2330±110という測定値を得たが、資料が広葉樹を用材としていることから、伐採後4～5世紀遺存し、使用できるか疑問が残る。ただし、この測定値に合う土器は出土している。

出土遺物は縄文時代の石器・土器のほか、弥生土器・土師器・須恵器と木器がある。特に建築部材の出土は、今後、古墳時代・弥生時代の建物を考えるうえで参考となろう。

第5章 おわりに

本書は、1992年から1993年に福岡外環状道路建設に先だつ事前調査として、発掘調査を実施した早良区賀茂三・四丁目に所在する次郎丸高石遺跡第3次調査と、早良区賀茂二丁目に所在する免遺跡第2次調査の報告書である。次郎丸高石遺跡第3次調査は、試掘調査結果を受け、免Ⅰ、Ⅱ要本調査地となっていた調査地にあたり、免遺跡第2次調査と調査登録し、本調査を実施した。しかし、分布地図改訂に伴い、次郎丸高石遺跡第3次調査と改訂し、調査登録を行ない、本書で報告するものである。免遺跡第2次調査は免Ⅲ要本調査地にあたり、免遺跡第4次調査として本調査を実施したが、分布地図改訂に伴い、免遺跡第2次調査と改訂調査登録を行なったものである。

次郎丸高石遺跡第3次調査では、古墳時代後期から古代と中世前半期および中世末の遺構を検出した。古墳時代後期から奈良時代にかけては、本調査地周辺は水田地域であったと想定される。また、「城司」など墨書土器の出土は、本調査地周辺に官衙的集落の存在を予見できる。

中世前半期も本調査地周辺は水田地域であったと想定されるが、早良平野の条里に乗った道路や溝の検出は、今後の中世の早良平野の様相把握の参考となろう。

中世後期から終末にかけては、南北棟群からなる集落が営まれている。道路に沿った集落と考えられる。第21号建物の4隅の柱穴から出土した墨書石は、15世紀前後の建物建設にあたっての風習を考えるうえで参考となろう。なお、そのほか瓦経片の上横出土も特記できる。

免遺跡第2次調査成果としては、縄文時代前期の遺物包含層検出と弥生時代の水利施設検出をあげることができる。

福岡市内での縄文時代早・前期前後の遺跡の調査は、これまで本遺跡と同じ平野内に所在する四箇遺跡の調査が実施されただけの状態であった。今回の調査は、石器用材選択・製作技法・組成など北部九州での前期の様相を把握するうえで、四箇遺跡出土石器とともに参考となろう。また、低位段丘上に本調査地が立地していることも同時期の遺跡のあり方を把握するうえで参考となろう。

弥生時代から古墳時代にかけては、本調査地周辺は水田地域であったと考えられると同時に、当時の灌漑用水を考えるうえで貴重な資料を提供したといえよう。近年、低地の調査が各地域で実施され、種々の水利施設が検出されている。ここではアーチ状をなす井堰について少しまとめておく。

本調査地でのアーチ状井堰は、自然流路（河川）を利用していると考えられる。構築方法は自然流路の深まりを利用し、まず、深まり下流に横木を杭で止める形でアーチ状をなす井堰を造る。次に深まりを広げながら平坦地を作り、腐土を井堰の前に積み上げ、平坦地に丸太を敷き詰める（板材の場合もある）。次に敷き詰めた丸太材の上流側を埋めごろしにし、腐土前側に横木で組んだ丸杭を廊上に立て掛けると同時に下の丸太材を固定し、藁をその上にかぶせて杭を打ち藁を固定する。さらに組んだ杭をその前に立て掛け、藁・スサを利用しながら固定するという行為を数度繰り返し、護岸も連続して行なっている。こうして流路方向では2～3mの壁を造り、アーチ状をなすダムができて上がっている。これまでアーチ状をなす井堰は、福岡市内では那珂河休遺跡・高畑遺跡で検出されており、その構築時期は弥生終末期前後と考えられる（前者は、後期前半のものもあるか）。本遺跡検出例は、4世紀後半頃と6世紀後半頃と考えられる。以上のほか、大阪府池島・万福寺遺跡（井上智博1996）、愛媛県古照遺跡などの例があるほか、鳥取県米子市でも検出されたという新聞報道がある。

福岡外環状道跡関係
埋蔵文化財調査報告

—2—

福岡市早良区賀茂所在次郎丸高石
道跡第3次調査・免道跡第2次調査

1997年（平成9年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 秀巧社印刷株式会社
福岡市南区向野二丁目13番29号

